女鑑

明治三十五年九月五日發兌
每月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

第貳百六拾號

東京國光社

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい



●ねり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせぼ等を生せす御肌へを滑々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の塲所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢

鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を滑々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔ける病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生ぜず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登縁商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.

WASHING POWDER.

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店洋物店其他各勸工塲各劇塲運動塲ニ有リ

女鑑第貳百六拾號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無逓送料

廣告料
五號活字廿字詰一行 金參拾錢
三一頁 金八圓
半頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年九月四日印刷
明治三十五年九月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊案一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 蛭木巳雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 女鑑社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

婦人界

第一卷第三號九月一日發行每月一回

本誌は婦人界の燈明たらんことを期し申候婦人界の出來事、婦人の問題に涉りて廣く深く其消息を傳へんことを第一として婦人の思想を高め感情を養ひ併せて國民として婦人の趣味を清新に導かんと試み申候。この目的を終始一貫して苟も時流の弊を趁ばす候三號の要目をあぐれば

- **口・・・繪**（には梶田半古氏筆美人（石版彩色）を始め寫眞版には北白川宮貞子女王殿下、露國皇室岩倉侯爵と其令夫人外數葉あり）
- **婦人の要求**（には文學博士加藤弘之男の「婦人の信仰」と下田歌子女史の「女子の實業教育」とを載せ）
- **家・庭・欄**（には家庭における「露國皇帝」平和主義なる露帝が理想的家庭なうかがふに足るべく法學博士添田壽一氏の「女子の貯蓄」完結し「獨逸家婦の一日」と「家庭教育より見たる室內繪畫」は本欄の双鎮たるべく）
- **小・說・欄**（「夏衣」は艷嬌「世の樣」は莊重「私の伯母さん」は清新を御一讀下され候へば記者が家庭に讀ますべき文學につきていかに撰擇の勞を費せるかこの一片の寸志は十分に御同情を得るの値ありと存候）
- **社・會・欄**（「東京に於ける婦人會」羽仁もと子「趣味より見たる大阪」山下雨花は是亦御一讀ありたく）
- **文・藝・欄**（には新保磐次、中根淑、佐々政一、大和田建樹諸氏の文藝に關する有益の記事を掲げ申候）
- **史・傳・欄**（には文學士大森金五郎氏の「源頼朝と其家族」これは歷史を學ぶべき女學校の生徒諸君に推薦いたし候）
- **談・叢・欄**（音樂學校長渡邊龍聖氏の「音樂談」新保氏の「大阪女子師範學校席上演說」は本誌の懇請に應じて寄稿せられしものに御座候）
- **詞・藻・欄**（には磯野秋渚氏の美文「やり水」大和田建樹氏の「和歌」珍とすべきものにて此の欄には懸賞和歌新體詩の披露これあり候）

其の內容は記者の口より不申上候へ共自から世に定評あるべしと信じ申候外裝の美を飾るを無用と思居したまふもあれどこれは婦人の美術心の養成にもと存じ候ますく意匠をこらして大方の希望に叶ふべく候

發行所 東京本町 金港堂書籍株式會社

定價一冊に付貳拾錢 郵税貳錢 ● 七冊 十四冊（郵税共） 前金壹圓四拾四錢 前金貳圓七拾八錢

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵令夫人

をんな

第二卷 第八號發兌

毎月一回十五日發行
定價金拾五錢
全國無遞送料

(卷首)千代尼の筆蹟(論說)英國家庭敎育(承前)、下田歌子●結婚の成立要件、愛南學人(學藝)和書解題、(徒然草、方文記)喜田文學士●漢書解題(漢書後漢書)丸井文學士●日本名媛批評(和氣廣蟲)下田歌子●作文批評、今泉定介●作歌批評、大口鯛二●兒童の言語(三)梅澤和軒●明治維新の原動力(六)津田黃昏●夏の理科(蚤と蚊)中村乙橘(修身)最も大切なる學問は何ぞ、嘉悅政子(齊家)點茶、杉浦伯爵●割烹、石井泰次郎(世務)經濟談(會社)伊藤秋南●虎列剌病豫防心得、淺川醫學博士、●各地產業の實況(二十三)「岐阜提燈篠」原知明(史傳)千代尼、松籟生(譚艸)義理ある子(上)岸本柳子●雲雀の雛(中)大塚素江(詞藻)十番歌合、白檮舍主人●田邊和氣子日記●みやび會員詞藻(雜錄)刺繡、木村仲子●婦人論梗概(彙報)內外要報十數件

發行所　東京麴町區下二番町三七　大日本女學會

大賣捌　東京神田區表神保町三　東京堂

各本山名所圖會

佛光寺派御門跡題詠同新門跡題字

石倉翠葉著
山中古洞畫

佛光寺名所圖會

全壹冊
洋裝菊判美本
正價二十五錢
郵税四錢

口繪

●後醍醐天皇綸旨●後醍醐天皇宸翰●後水尾天皇宸翰●後西院天皇宸翰●孝明天皇御寄附菊形香爐●皇太后大進有範卿眞筆●見眞大師自作の有範卿及吉光尼の木像●見眞大師眞筆嗣法相承の名號●御影堂●本山外面●表玄關●東山別院●同唐門●東山本廂●同側面●其他木版數十個挿入

眞宗各派中に最も山緒の正しき佛光寺派の本山内外の事蹟歴世の重寶史料一切を親く其門に就て精査し同派僧俗の朝暮觀覽に備ふ此冊の眞價は喋々を要せず

●本派本願寺名所圖會（全壹冊）

洋裝寫眞入正價金六十錢●郵税十錢

●大谷派本願寺名所圖會（全壹冊）

洋裝寫眞入正價金四十錢●郵税八錢

風雅文庫第五編

鶯亭 長井金升君著

狂躰句の栞

●全一冊正價金二十錢 郵税金六錢

狂俳の可笑しみは狂句を離れて別に一の調あり本書は狂俳の名附け親たる金升君が狂俳始まつて以來の狂吟を四季に別けて集めたるものなれば俳人は古池に蛙の飛だ事を言たものだと呆れ雜俳家は乙なものだと嬉しがり一讀腹を抱へる珍書にて避暑の鞄中には無く叶はぬと云ふ奇特の珍に御座候

續帝國文庫第四十二編

博文館編輯局校訂（製本出來）

釋迦八相倭文庫 下卷

●全一冊洋裝背皮金字入 正價金六十錢 郵税金十六錢

現實を天竺の皇室に則り進んでは因果應報の理を明にし退ては善惡邪正の果を示し能く五戒を諷し巧に六慾を戒め變幻の文備明の辭不知不識の間世俗を敎導訓諭する者是れ本書の梗概とす今や上下二卷茲に完成せり萬亭應賀の作實に近來無比の雄編と云べし

發兌元 東京日本橋區本町 博文館



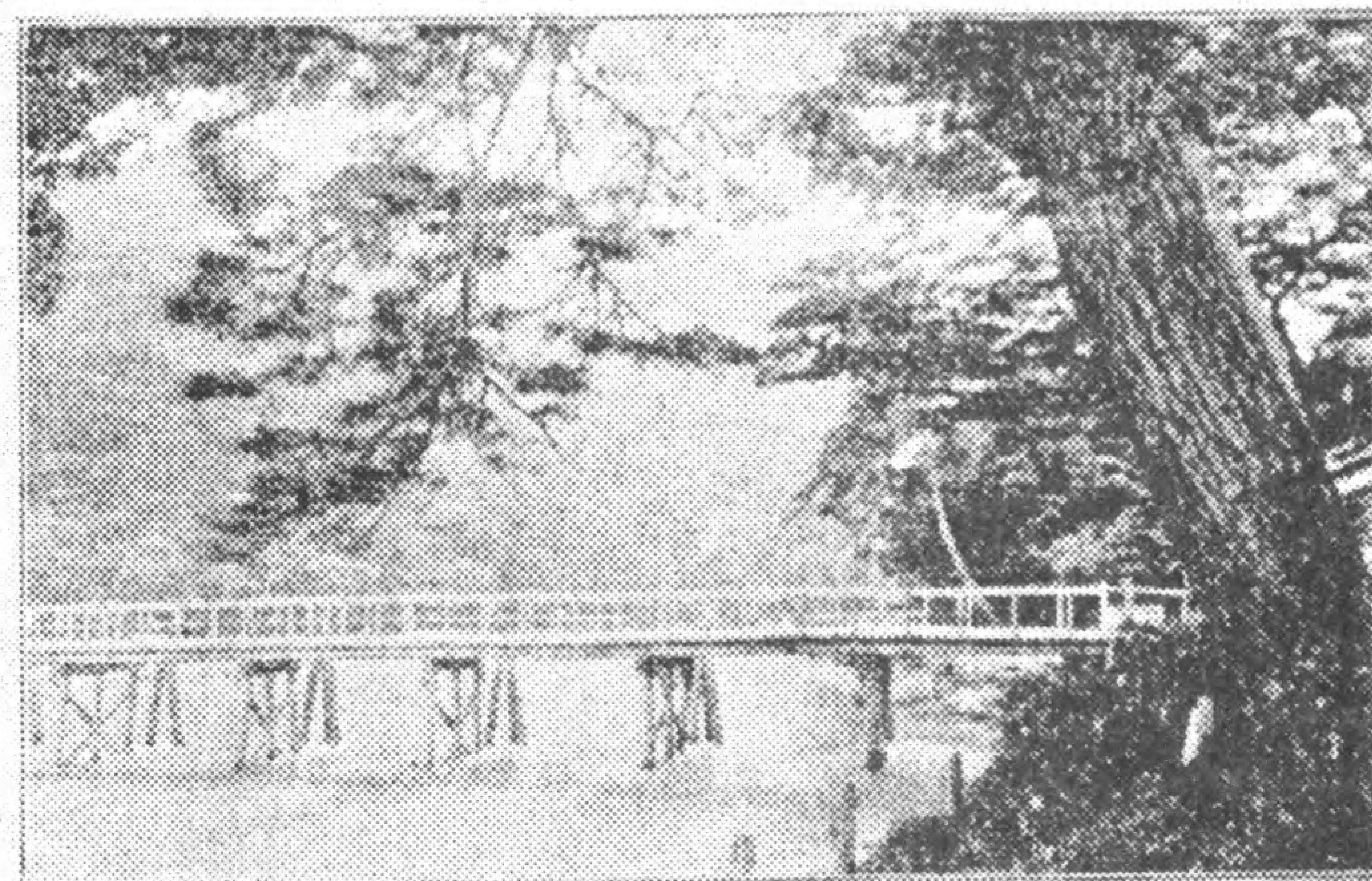
長岡子爵夫人知久子



千葉縣立高等女學校教諭
田中正雄子

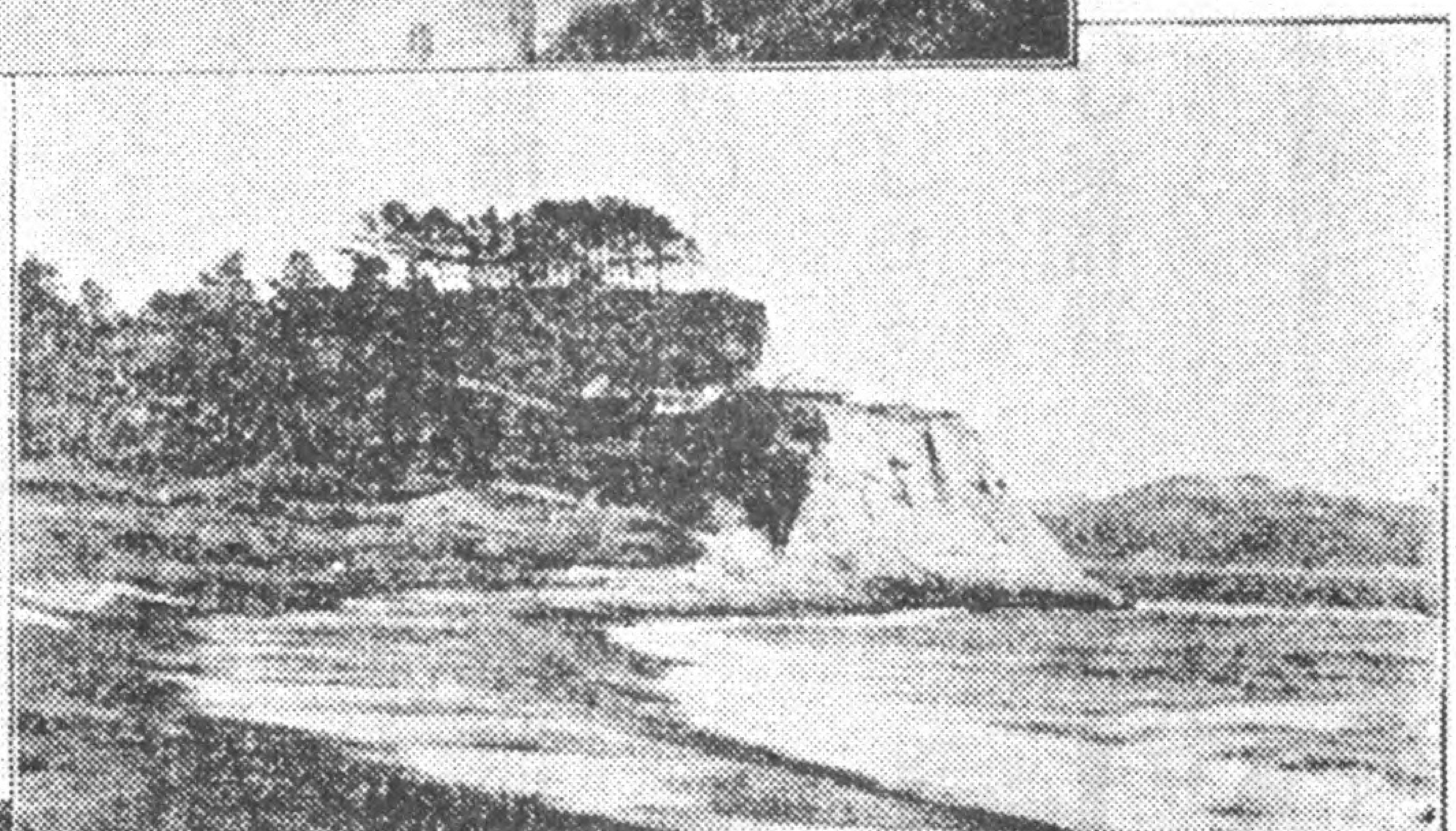


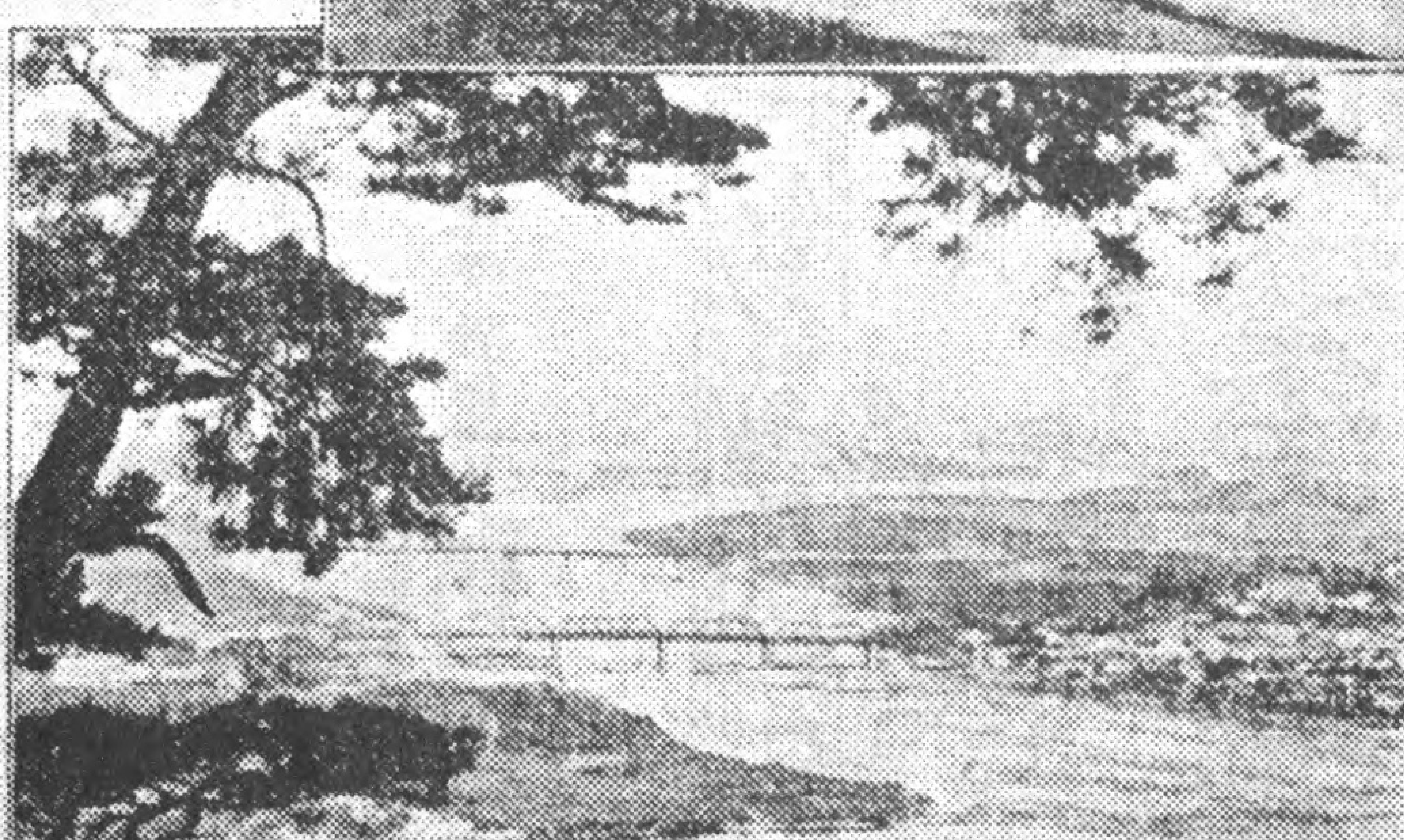
伊豫松山松操會員



京都嵐山渡月橋

鎌倉稲村ヶ崎





岩代福島町信夫橋

●女生徒募集

授業開始入所當日

當女子部は女子に簿記法を教授し家計整理又職業としては計算事務員たらしむる外○華族紳士商家與向家計整理員○女學校其他出教授○女子部計算事務員紹介保證の依頼に應ず

東京市神田區裏猿樂町四番地

私立 銀行事務員養成所女子部

大日本圖案協會編纂

圖案

第三号 定價金拾五錢 郵税金壹錢

發行所 發賣所 東京築地二丁目 國光社

女鑑廣告

本社同樣取扱申候

神田千代田町 **博報堂** 電話本局一四四番

京橋區尾張町 **弘報堂** 電話新橋八五一番

京橋區南鍋町 **廣告社** 電話新橋二六一番

●わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**すること確證す且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話 局二五四六番）

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製武劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢 特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良最新式 時計形文具兼用錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩葢開きにて一面は墨池肉壺檢印等**文具**を備へ一面は**錢入**銀貨銅貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩葢開き九拾五錢上製八拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**


M. Yoshinuma
時計ハ器械堅牢時間正確美術品ハ意匠卓絶製作精妙
商品ハ正札附陳列縱覽御隨意撰擇ノ便ニ供ス
圖入定價表ハ送料郵券四錢ヲ添ヘ御申込次第送呈ス
東京市京橋際南傳馬町
時計及寶玉類
貴金屬美術品商
吉沼又右衛門
特電本局三三
仝一〇四〇
大坂市心齋橋筋順慶町角 仝出張店 特電東一八八〇


品質精撰製作巧妙價格至廉責任保証書ヲ添付ス
商品ハ正札ヲ附シ陳列シテ隨意御縱覽撰擇ノ便ニ供ス
無料進呈(營業要覽但圖入定價表)送料四錢ヲ要ス
東京市京橋際南傳馬町
時計及寶玉類
貴金屬美術品商
吉沼又右衛門
特電本局三三
仝一〇四〇
大坂市心齋橋筋順慶町角特電東一八八〇
仝出張店

學問と處世とに就いて

鹿逐ふ獵師は山を見ずとかや。學窓の下に勵精せる學生は、その學校の課程たる學問の他には何事をも念頭に掛けず、眼底に映せしめずして、一意專心螢雪の苦を積みてこそ、學生たる本分を盡すものといふべけれ。

されど、こは暫らく學生と學問とに就きて之を云ふのみ。元來學問の目的は、實用にあるが故に、學校生活に於ける三年若くは五年の中に蓄積し得たる凡ての學術は、人生なる長き歳月の間に、日常絶えず、之を應用せんが爲めなるは言ふまでもなきこと也、故に學校と世間とは固より別物なるに相違なきも、之を全く縁なきものとして、區々別々に見做さんは、學問の用を知らざるものと言はざるを得ず。

殊に女性に在りては、獨立の生活を營むべき職業を目的とするものを除きては、みな良人を戴きて、家庭の勤めに當り、内助の責に身を任すべき天分を有するものなれば、男子が一科專門の學藝を修めて、一身を之が研究に委ね、或は之に依りて衣食生活の料を得んとするものとは、初めより全く其趣

を異にせることを忘るべからざる也。女子の本分を以て、夫に貞に、子に愛に、而して一家和樂の基とあるにありとすれば、學校時代に於ける多くの修養は、是等の本分を盡すに於て最も適切なるものたらざるべからず。若し學校の修養と、家庭の實地とが相間隔し、分離せんか、女子教育は全く實用上効益なき無意味のものなりといふも、恐らくは之を疏辨するの辭あるべし。

中等以上の生活を營める婦人にありては、高等普通教育が、日常百般處生の上に、頗る必要なるは勿論なるのみならず、配偶婚姻の一條件と認めらるゝ迄に至りたれば、今日の女學生に取りて、之を修得するの要用あるは、高等女學校入學志願者の員數の年を追ふて增加し來れるに依りても知るを得べし。これ寔に悦ぶべきことあれども、此の處生上必要なる學業を修めんと欲するの志望が、唯だ學業そのものを修めんとするのみに止まりて、學業修得後の事に及ぶなく、却つて處生の道を等閑に附するが如きことあらば、妻たり、母たるの後までも、その面目、體度、動作みな長く老女學生たるの觀あるを免かれずして、家庭和樂の基たる女子の本分は、決して之を實地に見るを得べからざるべし。家事を治むるの點に至つては、彼の無學なる村婦野娘にも數歩を讓るの趣なきを保すべからず。斯くては處生の爲に修學するに在らずして學問の爲に修學するの譏を免かるべからざる也。

此故に今の高等女學校及び之と程度を同ふせる各種私立女學校に於ては、その課業の一として、裁縫、

諸禮式は云ふに及ばず、料理割烹、點茶、挿花等を教授するも、唯だ如上の所以あるが爲に外ならずと雖も、吾輩は猶一歩を進めて、女學生が、成る可く行正しき家庭に接近し、高尚にして品格ある家族と交際し、その日々習ふところ、學ぶところを實地に鑑みて、之が資助となし、他日の實用上に差支へなき用意を爲さんことを望まざるを得ず。

鹿逐ふ獵師の山を見ざるは、鹿を射んことをのみ欲するが爲也。學校に在る學生が、一意專心學問にのみ汲々たるは、學業の進歩を圖らんが爲めに外ならず。されど學問は最後の目的にあらずして、他日の實用に供せんが爲めの準備なれは、常に其の實用と相齟齬し、相間隔し、相抵觸せざらんことに注意すべきは、最も肝要の事ならずや。(寄眼子)





論説

過渡時代の女子教育

三輪田女學校長兼日本女子大學講師　三輪田眞佐子

似て非なるものは、摸擬と開發ぞかし。凡そ一國の文化が他邦に輸せられ、若しくは異邦の人が他郷に住するごとき際には、必ず摸擬的俗習の行はるゝに至るべし。これに反して、文化開發なるものは、時運の成熟に促され、進歩の必要に馳せられて、自ら發揮開達するを言ふなり。從ひてその結果霄壤の差を生ずべければ、決して同一視すべからず。

これをわが現今の國情に徴せんか。彼の電信及び鐵道の如き、亦は醫術のごとき、有益なる工藝、及び學理の應用は、これを外國より摸擬するは大に好みすべしと雖も、わが國の特有なる君臣の大義名分、親子の人情恩義を棄てゝ、外國の短所なる華奢浮薄の民俗に摸擬せんか、その害言ふべからず、元來摸擬なるものは、我を去り他に準するを以て、その善惡正邪を撰ぶに遑なし。故に摸擬を以て直に進歩と考ふるは、痛く、誤りならん。わが國今日に行るゝ物質上の文化は悉く摸擬により形ちづくらるゝを以て、その長所あると同時に短所をもなしと言ふこと能はざるべし。

然るに、開發は炯眼卓識もて時運を察し、他より採るべき長所を撰びてこれを我に同化し、その短所に至りては、忽ちこれを棄てゝ顧みざるにありかくして日進月歩の効を積み、遂には他國の文化

をも凌ぐに至るを得べし。

これをたとふれば、開發は種子の春暖に促されて地下より芽を生じ、漸々枝も繁り葉も増して成長するがごときものなれども、摸擬は時ならざるに美花を點ずる造花に等しく、近づきてこれを見れば、眞に色も香もなからんかし。されば開發は、つねに精神あり特色あるも、摸擬は、精神なく主義なきものと言ふべし。

こを以て風俗の源となり、一國の母となりて、文化の魁をなすべき任務ある女子たるものは、東西文化の流通するこの時代に於て、摸擬と開發の差異を辨別し、以て、その寄るべき標準を定めざるべからず。これ、過渡時代の女子教育に於て最も必要なり。

洋風心醉者流は、摸擬のみを事とするを以て、取捨の力なきことながら、盲者の色を識別するに譬ふべし。これに反して、國家の文物制度は、時代とゝもに開發すべき理勢の存するを知らざる頑迷者は、巨木となる植物の種子を握りて、これを蒔くことを知らず。亦琢磨せば麗光を放つべき寶玉を懐きて、これを瓦石と價値を同うせしむるに比すべきなり。

或人曰く、女子教育につき進歩主義を主とせば、殆ど西洋に拘泥せん、將た保守主義を主とせば、全く蒙昧に退歩するを如何せんと。おのれ思へらく、西洋に拘泥するは摸擬に外ならず。蒙昧に退歩するは開發の理を知らざるのみ。されば今日女子教育者の取るべき方針は、我國體、人情及び土風を根本としてこれを開發せしめ、唯わざとならざる美花をつけ、おのづからなる菓實を結ばしむるこそ肝要なれ。

母親の心得（承前）

愛敬女學校長　棚橋絢子

小學校卒業後の敎育

玆に女子初等敎育を終れば、其一家の事情等に依り、家に止るものと、更に進んで女學校に入るものとの別を生じ、且つ其家の所在地に依り通學するものと、父母の家を離れて他に寄寓するものとを生ずべし。

世人は、現今の女學校程度を甚だ高きもの丶樣に思へども、決して然るものにあらず。一般卑近の普通學を敎ふるものにして、相當の地位ある人の妻とならむには、日常に適切なる學課を敎ふるものあるを以て、若し良校長、良敎師ありて、校規嚴肅能く溫順貞淑の氣風を養成するに足るものあらば、成るべく之に入校せしむるを良しとすと雖も、良師なるものは世間多からず、從つて輕佻浮薄に生徒を養成し、人の子を賊ふ學校少しとせず。これ切に注意せざるべからざる所なり。惡敎育の害の恐るべきは毒蛇よりも甚しきものあり。

また女子に故障なくして、獨立の生活をなさしめむ意志を以て學校に入る丶父兄の如きは、不心得の甚だしきものと云ふべし。男子は娶り、女子は嫁せざるべからず、尤も男子にして大悲の願を發し、生死の海に汨沒する衆生を濟度せむ爲に家を出で、飾好を捨て、宗敎家たらむとするもの、又は身を學藝に委ね、其極致に到達し、絕世の事業をなさむとする輩の如きは、或は獨身なるを宜しとする場合も萬に一はあるべけれど、是れ稀に起る處の異例にして、而も男子にはま丶ある習あれど、女子には斯る場合なしと斷言せらるべし。されば女子は皆嫁して妻となるべきものにして、決し

て、獨立の生活を送るべきものにあらず。勿論世には不幸の人も少なからず、早く良人に別れ、人情再嫁するに忍びず、或は遺子を養育せざるべからざる如き變に臨みては、已むを得ず獨立の生活をなさゞるべからざるも、此場合に於ける獨立の生活は人事の變に臨みて寧ろ良妻として、或は賢母として身を處するの道にして、現今彼の多數の輕佻なる敎育家が喋々する女子獨立生活とは、大に其性質を異にするものなり。女子は必ず嫁せざるべからず、父母たるもの敎育家たるもの、常に此事を念頭に置きて、之を監視し、之を敎育すべきなり。

能く舅姑に勤仕し、奉養すること實に父母に異るなく、夫に仕へて溫良貞淑內を治め、夫をして內顧の憂なからしめ、小舅小姑を扶育し、兒女を敎養し、和氣靄然たる圓滿幸福の家庭を作るを女子の任とす。嗚呼夫れかくの如くして女子は人類に慰藉と勇氣とを與へ、其夫と共に天職を盡すものといふべし。女子の價値は玆にあり。女子の尊きは此孝貞仁慈の至德を備ふるにあり。舅姑に孝なるを見て卑屈とし、良人に貞順なるを指して卑怯とするが如き僞敎育者醉狂者あらはれて、漫然男女は同權なり男女同じく人なり、豈尊卑あらんや。服從の行爲あるべからずなど妄言して憚らざるは、實に害毒を世に流すものといふべきなり。是等は人倫の何たるを解せず、道德を無視するものなり。人間もと尊卑の別なしと雖も、是個人相互の關係を言ふものにして、既に君臣、父子夫婦の關係を生じ、其地位を異にする以上は、其間に尊卑の別を生ぜざるを得ず。男女に尊卑の別なしとするも、夫婦なる關係を生じたる以上は、尊卑の關係をも生ぜざるを得ず。君は臣より、親

は子より、夫は妻より尊し。故に其間には、個人と個人との關係を以て說明すべからざる道徳生ず之を君臣の間に忠と云ひ、父子の間に孝といひ、夫婦の間に貞と稱す。斯くして人生の進歩を見るなり。人の價値は道義を守ると否とによりて上下すべきものにして、服從と否とを以て論ずべからざる也。予は男は尊し、女は卑しとはいはず。たゞ夫は妻より尊し、母は子より尊しと斷言して憚らざるなり。夫は妻より尊しと雖も、若し夫にして暴戾、放恣夫たる徳義情愛に背けば、是夫たる名に於て尊しと雖も、人としては至卑至賤の人のみ。妻は夫より卑しと雖も妻にして其徳を守らば、妻たる名に於て卑しと雖も、人として極めて尊貴の人たること、恰も臣は君より卑く、子は親より賤しと雖も、忠臣孝子は人間の精華として尊敬すべきものなるが如し。男女既に體格を異にし、業務の度合、種類を異にする以上は、同權と云ふことと斷じて妄あるべし。其義務に於て其活動力に於て差等あり。權利に於て差等あるは當然なりとす然らば世の婦女子たるもの彼の妄言に迷はされて婦道を盡すを卑屈と考ふるが如き謬見を廢絶すべきなり。

以上論じたる處に依つて、予は良妻たることの行爲が、實に尊ぶべく敬すべき至上のものなる所以の一部を說き得たりと信ずるを以て、次回には更に進んで、未來賢母良妻を作るに當り、父兄の注意すべき一つ二つを述ぶべし。

（未完）



都下の女學生に告ぐ

東京女學校長　折田重任

現今都下に在學せる幾千幾萬の女學生諸子よ、諸子は懷かしき鄕里を後に見て、親愛なる父母と兄弟姉妹とに別れ、以て遙々と此の輦轂の下に來りて學びの道に從事せるは、其の志や誠に雄々しと謂はねばならぬ。抑卿等は如何なる目的を抱きて、此の壯遊を企てつゝあるか。余の聞かんと欲する所である。

余を以て推測するに、卿等の目的は實に多般多樣のものなるべし。或は眞誠に學問其の物を愛好し村里良師友に乏しきを以て出遊せしものもあらん或は成業の後、生計の資を得んが爲なるものもあらん、或は學藝の力を藉り、自己を裝飾し、良緣を求むる介とせん爲のものもあらん。或は都下學校の卒業免狀を得て、田舍に誇耀せんとのものもあらん、卿等の目的たる一樣ならずと雖も、之れ決して惡しきにはあらず、然れども下等の目的は最上の目的の前には屈從せねばならぬ、何人も人間唯一の目的、即ち理想善を知て之れに接近するを知らざるものは中途にして、失望落膽の淵に沈淪するより外はない。特に卿等の身邊は終始種々の誘惑と嚴重なる社會制裁とを以て包圍せられて居る故に、能く前途の光明を認め、心の舵を操て彼岸に達する雄氣がなければ中流にして傾覆の虞なしとも限られぬ、基督曰く余は世の光なり、余に隨ふものは闇路を行かで生命の光を有たむと、人間の目的は實に生命の光明なることを忘れてはならぬ。

凡て人間の活動は目的より生れ出ぬものはない。目的を離れては人間の活動は生せぬ。之を小にし

ては一個人の目的あり。之を大にしては古今に通じ、東西に亘りたる目的がある故に、人間は個々自らの目的を撰擇すると同時に、又或る一定の目的範圍内に活動する所の動物である。併し其の目的たるや普通動物と異なる點がある。普通動物の目的は單に感覺の欲望を達する爲の活動に過ぎない。されども人間の目的は之れと同時に精靈の要求がある。之れを達せねば滿足はしない、換言すれば、衣食住の圓滿を希望すると同時に、道德的善人たることを希望する。之れは他の動物と異なる點である。孟子曰く飽食暖衣、逸居而無レ敎近二禽獸一と。實に千古の至言である。現今普通一般の女子を見るに、服裝の華美と身體の安逸を貪るとを以て無上の幸榮唯一の目的とし之を得る手段あらば如何なる邪道岐路をも避けず殆んど人間の品位、品格の何物たる、婦道の何物たるを解せざるかの如く、滔々として爭て之に赴く有樣は、恰も蒼蠅の腐敗を逐ふと一般なるかの觀あり。之れ今日無敎育青年女子の常態である、然るに若し敎育ある女子の中にも、此の如き者ありとすれば、余は其の何の心たるを解するに苦む。

夫れ男女の別なく吾人人類は其の幸福を增進すると同時に、有道的たらむことを希望せねばならぬ。若し單に肉體の欲望を達するのみを以て人間の能事畢れりとなすならば、人間の價値固に淺ましきものではないか。只其れ精靈的要求がありて、始めて人間の人間たる品位品格が生ずるのである。故に吾人は常に前途の光明を認め尺取寸前理想に接近する道途を索めて歩行せねばならぬ。「ジャチー」曰く吾人の一生は終始撓まざる決心を以て平和の中に種々の發念の戰爭せねばならぬと。孔

子曰く誰出不レ由レ戸。何無レ由二斯道一と今若し數里數町を隔てたる知人の家を訪問せんとするも適宜の道路を擇で之れに由らず只足の向ふまゝに進まば或は垣根に突き當り、樹木に障へられ、或は河溝に陷り、高低に躓き、到底達すること能はぬではないか。又若し渺茫たる大洋中に舟を浮べて磁針器もなければ、櫓楫もない。只風波の搖蕩に任せ以て或る目的地に到着せんと欲する者あらば、誰か其の暴虎馮河を笑はざる者がある。今吾人の目的即ち理想善に達せんとするも一定の指針道路がある。之れ即ち正道と云ふものである。正道の行先きには光明が充ちて居る。若し之を蹈み誤らば、邪道岐路に彷徨して、窅冥暗黑の中を辿らねばならぬ。楊墨の練絲岐路に泣きしは、其の白にすべく、黒にすべく、東すべく、西すべきを以てゞある。然れども正道は決して遠きにはあらぬ、吾人平素の思慮周旋動作の間を纏ふて離れない。唯注意如何に因りて、後日愉快幸福、圓滿玉の如き人間ともなれば、失意、不幸人を怨み世を厭ふ人間ともなる、愼むべきことではないか。

聞く近來都下の女學生中、種々の惡聲を立てらるゝものありと、之れ捉影捕光的風聲にして、元より信を措くにも足らぬ、然れども千百人中一人にても事實とすれば之れ畢竟教育の任に當るもの指導其の宜しきを得ぬと、社會制裁の餘りに嚴酷に過ぐるより來りし惡評ならんも知るべからず。然れども又卿等が前途の光明を認識して、確實に正道に由ること能はざるより、此の惡聲を招きしには非るなき乎。

（以下續出）



近藤裕子刀自の事を記す

文學士　吉丸一昌

樹立ち物古りたる動坂の森はづれに、女松の木高く聳えたる門あり。風月自ら門守りもやなるらむ、戸ざしだになし。はいりの石段を、小松に沿うて下り行かば、必ず幽に響く鐘の音と共に、稱名の聲を聞かむ。これ三十年來天下の志士の母たる、近藤裕子刀自の聲なり。されば、多くの中には、今は志を得たるもあり、不遇にして尚浪々の身たるもあれど、皆御祖母様々々といひて、慕ひ寄ること、血緣の人にも勝りてあはれ深し。おのれの御祖母様と知りしは、我修養塾以來のことなり。抑、修養塾は、學資に乏しき學生を助けて學德の修養を圖るを以て、目的とするところにして、事業として、牛乳配達を營ましめ、各自志すところの學校に通學せしめ居れるが、昨年十月、始めて創設せしより以來、僅に十一ケ月の日子に過ぎざれども、生活の艱難にして、また學德のややもすれば、是が爲に阻められむとすることありて、幾度か瓦解顚倒の厄に遇はむとせしが、僅に今日のながらへを續くることを得るは、師友の憂を分ちたるに依るべけれど、實にまた御祖母様の同情の涙と、慈愛の心とに依りてなり。されど、おのれは、我塾の未だ成功の曉に至らざる前に、我塾の慈母たる御祖母様をば、言說せさるべし。唯おのれが知りしこのかたの其逸事の一二を語らむ。

愛國婦人會、爪生四恩會、さては、白山の南隱老師の道場に因緣ある人は、御祖母樣の名を知らざるものはなからむ。されど、これらに於ける御祖母樣を語らむよりは、むしろ平生の思行の勝れたるところを語るは、若き女性の心得となるもの多かるべきを信ず。

御祖母樣の秘藏に、四部錄といふ佛書あり。是は坐禪儀、證道歌などゝいふ入禪のたよりとなる四部の書の合卷にて、古くより斯道の人の珍とするものなるが、此書を得たるこそめでたけれ。

或年の夏の頃とかよ、所用にて他許ゆき、その歸るさ雨いみじう降り出で、風さへ吹き競ひければしとゞに濡れて、歸りを急ぎて、今や我門に入らむとする折しも、横手の道より、是も濡れそぼちて、網代笠に草鞋の迸にまみれたる一僧、急ぎ足に來懸れるを、衲旅僧、此雨の降りの强さよ、しばし休ませ給はずや、濡れを急ぐ用もあらざめるを、殊に今日は、亡き親の命日なれば、一椀の報謝もまゐらせたし、といへば、僧もうべないて、さらばとて入る。笠を取れば、眼眸炯々として、面貌一廉ありげある人にて、ひかるゝまゝに坐に通れば、一人の息子にて、今は陸軍中尉となれる人の、むかしの着物を取り出して、これは、かく包紙に記し置けるが如く、たとひ身榮ゆとも、むかしを忘れさせじと、後の誡に殘し置きつるものなれども、けふの報謝にまゐらせむとて、濡れたる着物を脱がせて着せたりけり。僧は、この粘付着物の干きたるを着て、佛前に諷經を手向け、やがて一禮して歸りけり。去るに臨みて、いふやう、前生の宿緣にて、けふの報謝に預ること深く佛恩を謝す。われは今より別れて美濃の山中に入らむとす。人生は如レ露如レ電、逢ふときはまた何の

時ぞ。此四部錄は、峩山といふ人の註入にて、片時も身を放たざりしものなれども、心なき心にも、今日の御いつくしみに、かたみとせむ。またの因緣によりて逢ひ申さむ時あらば、その時改めてわが名も聞え上げむとて、飄然として立ち出でたりけりとなん。後に聞けば、峩山といふは、白隱禪師の高弟にて、世にも尊き聖なれば、またとなき四部錄なりきとぞ。

尙記すべきこと多けれど、筆をこゝに止め措きて次の號にとてなん。　（つゞく）



海上の名花　（承前）

文學士　濱田廉

○朝の眺望

曙光かすかにさして夜はやう／＼明けはなされたり。グレースは小舍を出でゝ嵐の景色を見やりぬ霧はなほ海面を蔽ふて、華蓮群島其半を隱したり風尙高く浪未だ靜らず、荒磯には白雪散り亂れて鶯も春もえ知らぬ浪の花咲く。

或一島の端に於て、グレースはあやしき黑き塊を見たり。望遠鏡の力を藉りて難破船の一部分なるを知り、尙數人の遭難者のこれに附着せるをも發見せり。グレースの雄心こゝに於てか大に動く。「噫父上よ、かなたの巖に難破船あり、見給へかし、二三の乘客はなほ生存すめれば」と、グレースは小舍に走りて、父に望遠鏡を與へつゝかく叫びたり。「嗟乎哀れの人々よ、いかでか長くながらへ得ん、神よこの不幸の人々を救ひ賜へ、かゝる暴風の海上を凌いでかの船に達するは、人力の企及すべきにあらず」、父の答はかくの如くなりき。彼は

たくましくいさましき心有りしも、かゝるけはしき海上の、かゝるあやうき岩の間に、一葉の短艇を放たんは、こよなき危險なるを知れりしなり。

グレースも亦その危險を知れり。されどそのをゝしき性質は靜止すること能はざりき。彼は絶海の孤島に生れながら、いまだ海上の操縱を知らざりき。順風の下恬波の上に、短艇を操りて遊びくらせし外には、いまだ風波と戰ひしとあらざるなり

されどグレースは父を勵まして倶に救助に赴かんことを慫慂せり。「妾は手を拱いて、この不幸なる人々の死するを座視するに忍びず、神の冥助を得て、以て救助の事に從はん」と、あはれ孤島の名花、窈窕として海上にはころび出でんとす。

○少女の雄擧

グレースがいさましき憤勵に、父も奮ひ起ちぬ。やがて短艇は艤せられて、父子の手は各楫を執れり。恰も干潮なりければ、短艇の兩岸の岩に衝突するを避くるを務めざるべからず。然れども幸にしてその航行は安全なりき。而して遂に難破船に近づくことを得たり。

遭難者は直に一小艇のこなたに突進し來るを認めたり。艇は或は巉巖に衝突せんとし、或は浩浪に噬み下されんとす。遭難者はこの故に更に中心の不安を感ぜり。されど短艇はやう〳〵近づき來りて、漕手の明に見ゆるまでとなりぬ。

艇中には頒白の老翁顏にうき世の辛慘を印して座せる側には、勇氣みち〳〵たる少女の平靜熱心なる面もちして、徐に楫を操るを見し時、遭難者の驚駭のいかに甚しかりしかは、吾人これを想像するに苦まざるべし。衆人の心は和らぎぬ。その生命を睹して見知らぬ人々の難を救はんとする善人の身の上に、幸あれかしと衆人の心は熱心に神に

祈れり。恐らく遭難者の中には、母の胎内を出でゝ以來、未だ嘗て祈禱を口にせしことなき痴者もあらん。そがむくつけき口もこの時初めて天帝の御名を呼べり。

グレース父子は非常なる困難と冒險とを以て、九人を艇中に收容せり。今や難破船を去て長石島に向ひし時、潮やう滿ち〳〵初めぬ。危急の秋ならざりせば、再び潮の退くまでこの危き岩が根に留るこそ、なか〳〵心やすきことなれど、その饑渇と疲憊とに苦める遭難者を如何せん。父子は再び風浪を冒して楫を操り、艇は恙なく燈臺の下に達したり。こゝに於て少女が一片の義心は九人の生靈を救ひ得たれど、嵐の餘波尚海波を蕩搖してやまざりければ、九人は二日の間グレース父子があまき恵の露にうるほひて、やがて長石島を辭したり。

○慈折の嘆

九人の人の子去てより、長石島裏人影復依稀なり●●●神の子グレースはうらさびしき小舍に歸りてその纖手を憩へぬ。偉大の慈善を施してこれを賞讃するものなく、父母の外にはこれを愛するものなきグレース、ダーリングよ。しかれ共天の照鑑嚴なし。數日の後にはその名聲天下に喧傳して、グレースは歐洲大陸に於て最も有名なる婦人の一にかぞへられぬ。

九人の遭難者の本國に歸りて、長石島裏の俠少女を語るや、歐洲は一様にその壯擧を驚嘆せり。新聞紙上その香しき名を署せざるはなし。七百封度を醵して、その勞に酬いし如きも、決して失當にあらず。店頭悉く其肖像を揭げて、その功をたゝえし如きも決して過賞にあらず。グレースの歌はものせられて、市井唱吟の聲を聞く、決して奇を好みしにあらず。丹田の至誠發してこれ等の擧と

なりぬ。永くこの俠少女を忘れざらんと欲すればなり。

然りと雖もグレースはかゝる推賞讃美の裏にありながら、決して婦徳を失却せざりき。天稟の温厚は尙その一擧一動に認められたり。嗚呼この溫厚こそ勇氣の眞の侍女なり。溫厚と伴はざる勇氣はこれ蠻勇なり、眞の大勇と云ふべからず。而してグレースは尙この淋しき長石島に留りて、居然島守の娘なりき。されど不幸にして彼はこのなつかしき島と訣別せざるべからざるに至りぬ。嗟乎鈞天人なくして、帝これを下界に求めしか、いまはしき肺病はその冷なる手をその胸におきたり。名ある國手の配劑も多く功なかりき。顏色憔悴し形容枯槁して、羸弱纖羅にだも堪えざるに至りぬ。かくてこの娑婆を辭して白玉樓上に赴きぬ。時に千八百四十一年、この日慘雨いとゞしく降りしきりて、紅涙幾千萬の青衫を濕せり。是れ我が紀元二千五百一年、天保十二年に當る。

あはれ敷島の女郎花よ。しばらく風流を談じ戀愛を說くをやめて、うき世の狂瀾に溺死せんとする、不幸の人のいゝ子を拯ふの策を講ぜよ。徒に方六尺の家庭を天地として、よしなき空想に耽らんはをこの業なり。ゆめ／＼グレースに劣るな。(完)



ジョージ、エリオット

土肥羊次郎

戯曲家としてのセキスピーアの名の知れ渡るが如く、小說家としてのジョージ、エリオットの名を知らぬ者は恐らく有るまい。特に彼が生涯の六十年間、恰かも十九世紀の過半、其の故國なる英國

の文學壇上に、比類なき織文の花を咲かせた事實を知らぬ者は更らに無からう。デ、此の英國の紫式部とも云ふべきヱリオットを、兎も角も海外女傑の一人として諸君に紹介致さうと思ふ。が、一つお斷りをして置くのは、何が扨て東西人情風俗の異なる西洋婦人の事で有るから、温雅に奥床しいのを專一としてある、我邦の風俗とは聊さか勝手の違ふ個所の無いでもないが、夫等はホンの白璧の微瑕で深く詮議立てするには及ばぬと思ふ。ヨシ又た爾で無いとして見た處が、エライ事は確かにエライ人物であるから、他山の石以て玉を磨くべしで强がち無用の業では有るまいと思ひます。と先づ勝手な理屈を列べて扨徐々本文に取掛りませう。

英國の片田舍南アルブリイ在にロバートヱヴンスといふ人が有りました、職業は日本なら大工だが英國であるから建築師始めは、其の建築師で有つたが非常の人望家と見えて、其地方の管林者となり更らに進んで土地の貴族、ニユドドゲート家及び其一族が所有地の管理者とまで成りましたから田舍でこそあれ物に不自由なく誠に豊かに暮らして居ります。此のヱヴンス夫婦に三人の子があつて上が男で下二人が女です、其の女の子の總領こそ、後に至つて十九世紀隨一の女文豪ジヨージ、ヱリオツト其人で有ります。

千八百十九年十一月二十二日に生まれ幼名をマリーアンヱバンスと云ひました、今日こそ文明を以て誇る英國ですが、其當時は未だ何んの發明も出來ませんから、汽船も汽車も電信も行なはれません、況んや倫敦巴里にあらぬ此邊等の僻村とて、粗末極まる乘合馬車の日の内に二三回、喧ましき輪聲を傳へて往復する外には何の響きとてなく、

夫れの牧場に家畜の哮ゆると森の茂りに百千鳥の聲を聴くのみで有る。斯くの如く四邊の風色人情の孰れも自然的にして、宛から太古の有様を示せる處に彼女は生まれて、六歳の曉まで此のアリブリイ在に在りましたが、千八百二十四年父エヴンスの都合に依りて一族と共にグリフ村といふに移る事に成りました。

グリフ村に移つてからマリー、アン、エバンスの學業は創められました。恰度彼女が七歳の春の半ばでござります、グリフ村の村立女學校に入學したが間もなくチルワースコトンの公立學校に移り、又た〳〵今度は父の家より半哩程を隔てましたニユニートンの町外れに在る、ニユニートン私立女學校に轉ずる事と成りました。是れいづれも駸々として日と共に進む彼女の學業の程度と伴なつて斯くは屢々通學する學校の改められたので有ります。

ニユニートン女學校に於ける彼女の聲望は殆んど全校を壓するばかり、マリー、アン、エバンスの名は敎員生徒間は更らにも言はず、同校通學者の父兄間にまで知らるゝに至りました。其は孰れも緘默にして輕跳の風なく毎も席隅に座を占めて、少しく不器用なる所あるも凡てに於て注意周到なる一幼女として、一般の人々に認められたと云ふ事である。然れば此の評語の一節を解釋しても彼女は確かに普通一般の幼女とは其の趣を異にして、立派なる老成婦人の假りに幼女の姿を爲したる者かとも疑はれる程で有る、故に彼女は普通一般の幼女の如く、美しき蕾を見るやうな嬌艶は缺いたであらう、が、其代り他には容易に求められぬ、崇高にして侵すべからざる威嚴を備へ居たには相違なからうと思ふ。

斯くもニユニートン女學校の教員生徒、及び其の父兄等より、注意周到なる一幼女として目されたる彼女の年は幾歳であつたかといふと、マリー、アン、エバンスは此時漸く取つて十二歳で有たさうです。けれども斯くの如く衆人に注目されたにも拘はらず、其年又もや學校を變へねば成らぬ事に成つて、今度はリットルパーク町なる姉某の許に身を寄せる事になり、姉夫妻の管理の下にコヴエントリー學校に入學する事に成りました。此時こそ彼女が後年に大名を爲す淵源を作つた時で有つて日頃親しき友とも交通を薄くし、孤立して專心一意唯々學業に心を寄せました、のみならずわきて其頃よりして敬神の心厚く、道義の念高く、其の一擧一動は、光明赫々たる女神の假りに此の少女に宿りしにはあらぬかとさへ人をして思はしめたといふ事である。

斯くて學問なしつゝある事茲に五年あまり、千八百三十六年の夏、彼女に取りては、生まれ出でゝより最も悲しむべき出來事は起つた、开は他ならぬ天にも地にも代へ難き一人の母の病い危篤に迫りしといふ事である。茲に於いて彼女は、燃ゆるが如き學業の念を捨て、學央ばにしてコヴエントリー校を退き、愴惶生家に歸來して母の傍側に侍し、百事を抛うつて母なる人の看護に盡くす事とは成つた。故に朝夕愛誦した書物すら今は全く振り捨てゝ手にする事も成らなんだのである。夫れも宜いが、切めては看護の甲斐でもあつて、母の病氣が全快でもした事ならまだしも、是程の力づくしも殆んど何の甲斐もなく、遂に母なる人は定命であつたか呼べども返らぬ白玉樓中の人と成り終つた。妙齢の處女の身に取つては、是れ一つでさへなみ／＼ならぬ不幸であるに、執念くも災厄

の神は彼女の身邊にまつはり、千古稀れに見る此の篤學の處女をして全く年來の希望を中止するに至らしめたといふ一事である。それは母なる人の病死してより一家の家政の殘りなく彼女の双肩にかかる事に成り、内外の雜事におはれて今は書を繙く暇も得られぬ程には成つた。是れは云ふまでもない事だが彼女自身に取りては、其の如何に悲しく、如何に不滿足であつたらうとは充分に察する事が出來るではないか。

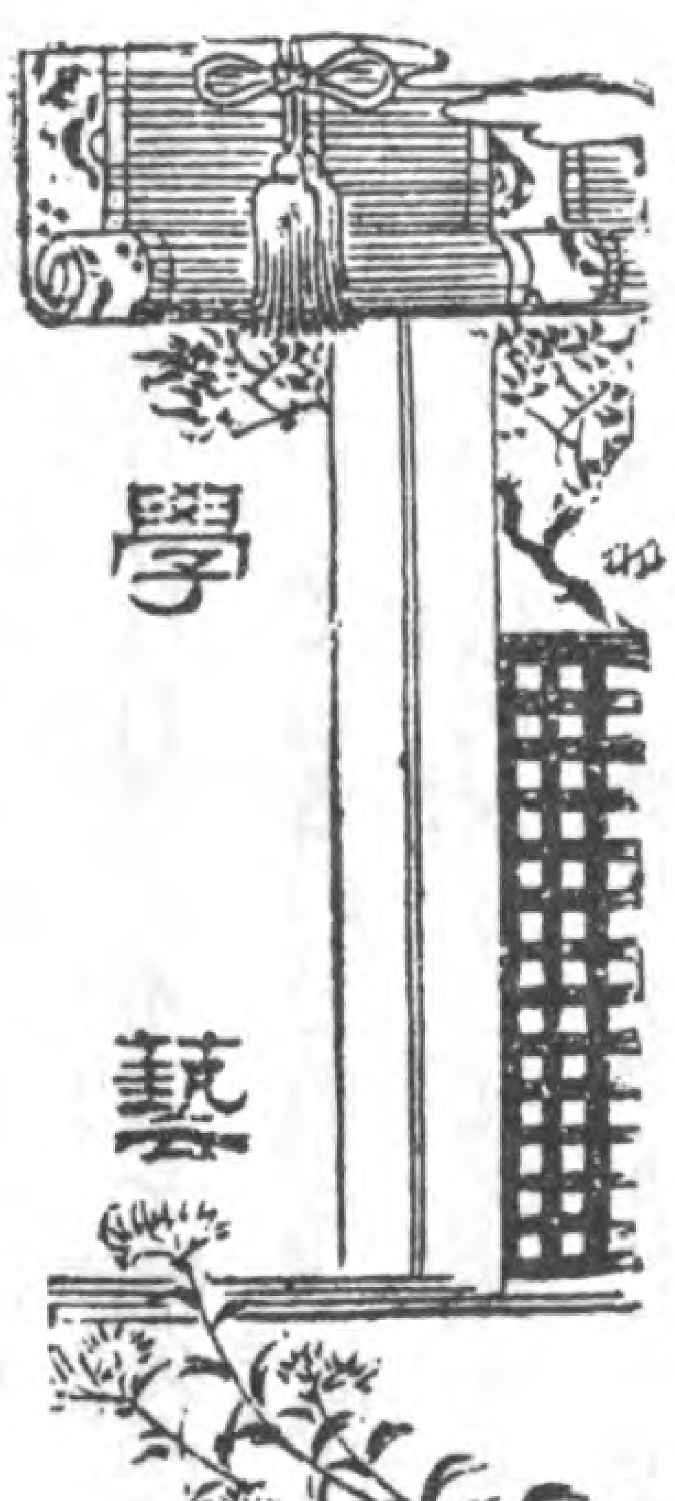
併しながら社會の事物は多くは意外のもので、他目から見て不幸なりと弔する程に彼女に取りては不幸でも不滿足でもなかつたのである。其の說明としては下に記す處の一節を以て慥かに事足りて居らうと思ふ。

彼女の頭腦は明晰に、其の意思は極めて健全なるものなるが故に、其の平生學に篤き程度の夫れ丈け、敬神の念、道義の心熾んなる程度の夫れ丈け、凡てに注意周到なる天性の夫れ丈け、父母および長上に對する畏敬親愛の觀念は是亦た非常なるものであつて、到底尋常な意思では容易に忖度する事は不可能である。故に彼女は自己の信ずる觀念の實行に就いては聊かも躊躇せぬのである、夫れのみか斯る場合には自己の希望を犧牲にしても厭はぬとまで確信して居るのである。故に彼女は母の歿後は、家政の衝に當ると共に父ロバート、エバンスの介抱を一身に引受け、殆んど日課として些の倦色なく、寧ろ喜んで能く其の孝養を盡くしたといふ事である。

一體親孝行などゝいふ事は比較的西洋には流行せぬやうに思ふ人々もあるが、現に此のマリー、アン、エバンスの如きは、最も完全したる孝女と云はなければ成りますまい。其處で彼女が父なる人

に對する孝行の程度を證明するには甚だ的確な證據が一つある、序だから夫れも述べませう。彼女は右の手の際立ちて逞ましく筋肉の發達したるは是れぞ實に彼女が父に對する孝行の結果であつて、其の理由は父エバンスが一日の勞働を終へて歸り來るを待ち、甲斐〴〵しくも手製の乾酪を作りて其の辛勞に報ゆる事永年一日の如く、爲めに知らず識らずの中に右手の筋肉のみ夥多しきまでの發達をなし、尚は之れに次いでは乾酪製作の妙手として數日の人々に知られ且つ稱へられたといふ事である。事は素より些事ではあるが、此の一事を見ても彼女の半面が解さるゝと同時に、其の又た家庭和樂の樣が歷々と示さるゝ如くではあるまいか。

斯くの如くして老父に事ふるの傍ら家事を整理し、尚は餘暇あれば書を讀み音樂を研究し、餘資あれば貧しきを賑はし、裁縫倶樂部を組織する抔、婦人として最上の仕事たる慈善事業にのみ心を傾け、却て自己が眞正の幸福と快樂とを享有せんとする原素たる婚嫁の時期を過ごす事とは成つた。是れ蓋し後年大名をなすヱリオットのエリオットたる所以の故でがなあらう。　（未完）



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(三十九)

おものまゐるとて、女房八人、ひとつ色に、さうぞきて、かみあげ、しろきもとゆひして、しろき

御はんもてつゞきまゐる。

こよひの御まかなひは、宮内侍、いともの〳〵しく、あざやかなるやうだいに、もとゆひばえしたる、かみのさがりば、つねよりもあらまほしきさまして、あふぎにはづれたるかたはらめなど、いときよらに侍りしかな。

かみあげたる女房は、
源式部（かゞのかみ、景好がむすめ）　小左衛門（こびちうのかみ、道ときが娘）　大輔（伊勢のさいしゆ、すけちかが娘）　大うま（左衛門大夫、よりのぶが娘）　小うま（左衛門のすけ、道のぶが娘）　小兵部（藏人、ありちかがむすめ）　小木工（もくのせう、平のぶよしと、いひけん人の、むすめなり）
かたちなどをかしき、わか人のかぎりにて、さしむかひつゝ、ゐわたりしは、いと見るかひこそ侍りしか。

れいは、おものまゐるとて、かみあぐることをぞするを、かゝるをりとて、さりぬべき人々をえらせ給へりしを、心うし、いみしと、うれへなきなど、ゆゝしきまでぞ見侍りし。

釋義

○おもの　御膳なり○まゐる　奉ること○しろき御はん　白き御盤なり。盤とは、物品を据うる下の臺をいふ○御まかなひ　陪膳の女房の中にて、主たる者をいふなるべし○もの〳〵しく　嚴格なること、俗にモツタイラシクといふにおなじ○もとゆひばえしたり　はえは、榮、または、映などの意にて、一段ひきたちて、リツパに見ゆるをいふ。花の夕ばえ、などいへるも、夕日かげのうすづく頃、一きはめだちて、うつくしく見ゆる花の色をいへるな

り○かみのさがりば　　さがりばは、河海抄に、下場とあり、髮のさがりの所のさまをいふ○あふぎにはづれたる　　顔にかざしたる、扇ははしより外れて見ゆるあり○源式部より、小木工までの八人は、上文に、御ものまゐるとて、女房八人とある、その八人の名を擧げたるあり○をかしき　　ことは、ウルハシキことをいへり。

評　解

御膳を中宮に奉るとて、女房八人、一樣なる裝束着て、髮をあげ、白き元結ひして結び、白き御盤を持ちて續き參る。

今宵の陪膳の女房の中にて、主たる女房は、宮の内侍といふ女房なり。

その内侍の裝束は、最も、モッタイラシク、艶麗なる容體なるに、黒くつやゝかなる髮に、白き元結したるが、ひときは見榮えしたるに、髮のさがりグハヒのウックシサは、常の垂れ髮にして居たるよりも、なほ、見かげのよろしささまして、かざしたる扇の端より、外れて見えたるさま、傍より見たる横顔など、實に美麗に侍りし事かな。

さて、この髮あげしたる八人の女房は、

源の式部といへる女房、この女房は、加賀の守、景好といふ人の娘なり。次に、小左衛門といへる女房、この女房は、小備中の守道ときといふ人の娘なり。次に、大輔といへる女房、この女房は、伊勢皇大神宮の齋主、祐親といふ人の娘なり。次に、大うまといへる女房、この女房は、左衛門の大夫、よりのぶといふ人の娘なり。次に、小うまといへる女房、この女房は、左衛門の佐、道のぶが娘なり。次に、小兵部といへる女房、この女房は、藏人

なりちかが娘なり。次に、小木工といへる女房、この女房は、木工の丞、平ののぶよしといひたりし人の娘なり。

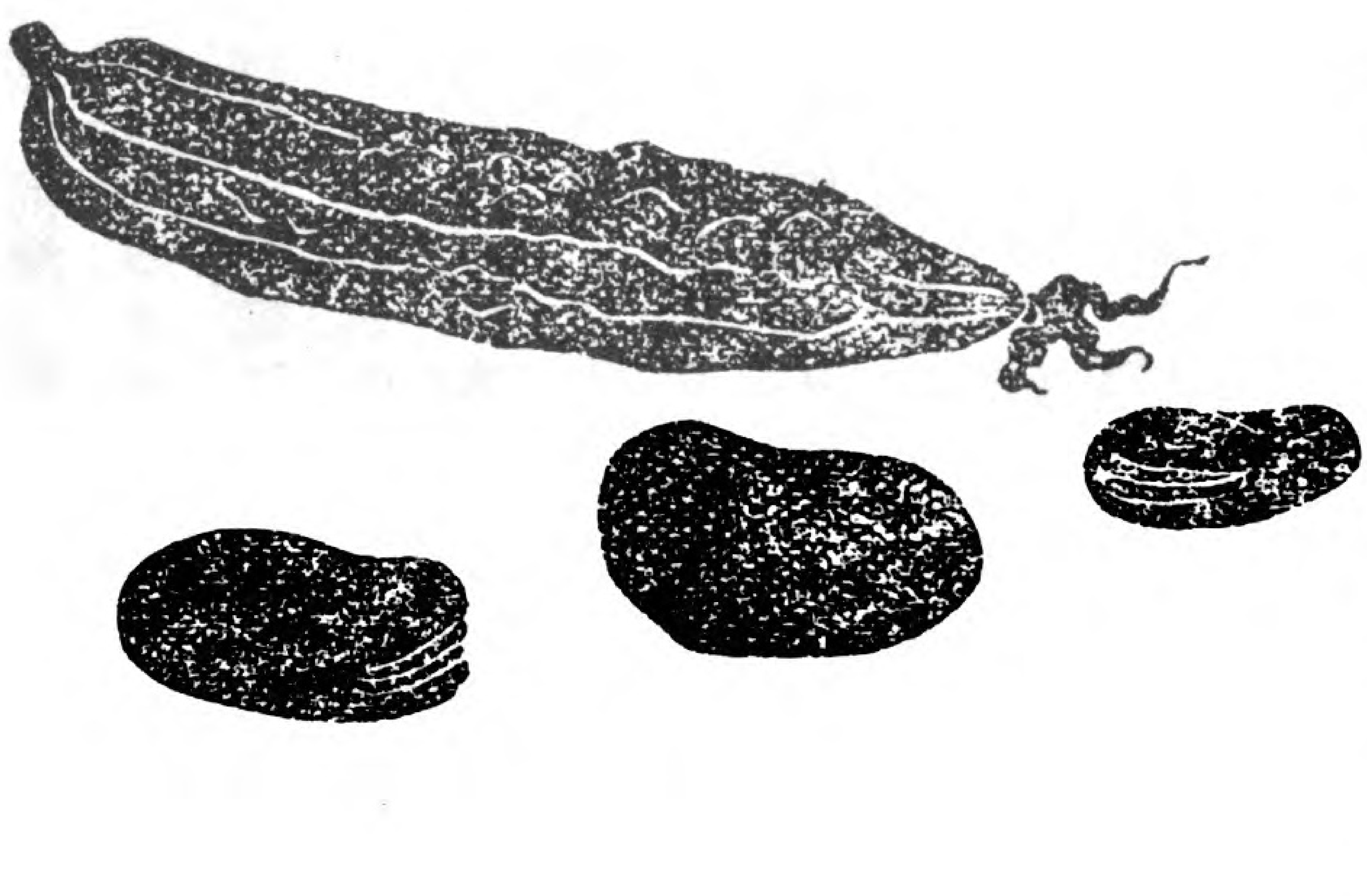
以上、八人の人々は、いづれも、容貌など美麗しき若人のみの撰り抜きの別品にて、差し向ひつゝ、居ならびたりしさまは、最も、見る甲斐がありたり。

平日も、中宮などに、御膳をたてまつるとて、髪ぐる事なるが、かやうなる盛式のをりとて、然るべきベッピンの人々を撰らせ給へりしことを、はづかしくおもひ、かつ、撰に洩れたる人人に對し、はれがましく、髪あげすることを、心憂し、甚だつらしと愁ひ泣きなどして、かゝるめでたき御儀式の折には、忌々しきまでに、式部の目よりは見侍りし。

和畫通信講義（第卅二回）

山崎彩峨

墨畫にては、二色ともに淡墨にてゑがき、後ち瓜



蒂花おち豆の線等を入るゝなり。彩色畫にては、青色に、墨少しを和したるものにて、瓜を畫き、薄き青色にて、豆を畫き、それより、濃墨にて、線を入るゝなり。



火山の話

田中生

皆さんは大抵火山即ち火を噴き出す山嶽の性質光景などは豫て能く御存じのことゝ思ひますけれども、次に此の火山に就て大體のお話をいたします。

●●●●●火山の定義　山であつて現に噴火するか、又は嘗て一度は噴火したことのあるものを火山と云ひます。頂上にある穴を噴火口と云ひ噴出するものを噴出物と申します。

●●●●●●●火山噴火の原因　河海、湖沼、雨雪等凡ての水は幾分か地中に滲入するものであります。所が吾々の住んで居る地球の内部には地熱と申しまして、地球の表面よりか餘程熱度が高くありますから、滲入した水が地熱の近い方に參りますと湯となつて終には水蒸氣になります。が、水は水蒸氣になると俄かに容積を増して一千七百倍ほどになりますので、到底本の場所に其儘になつて居ることは出來ません。それ故何處か罅隙があつたら其處に拔けて出やうとするのです。若し地殼の脆弱な部分があつたらそこを打ち破つて空氣中に出ます。

通常烟を噴き出すと云ふのは、實は水蒸氣であつて、火烟ではないのであります。併し噴出の際には、只單に水蒸氣のみを出すのではなく、其外に溶岩、火山灰、火山泥や、鹽化水素、水素、窒素、硫黄、硫酸瓦斯など種々のものを混じて出し

ます。

●●●噴出物　火山噴出物の主なものは熔岩であります。熔岩と云ふのは、岩石のどんな種類にしろ熱のために熔解して、火山の噴火口から流出するものを一般に稱するので、冷却してから後には火山石と云ふのであります。火山石を檢査すると、その表面の粗らくて鐵滓の樣にポツ〳〵穴があるのは、何故かと云ふに、もと熔岩中には水蒸氣を含んで居るので、夫れが冷却の際發散するからなのであります。熔岩の冷却するには、中々月日を要するものでして、大きな熔岩になると、内部は久しく熱して居つて、六年位は冷却しないものがあります。富士山の麓に風穴が澤山あることは御存じでありませうが、此れは熔岩の外部は冷えて堅くなつて居るのに、内部はまだ熱して居つて柔かであるがため、其内部だけ流出したので、そこで大きな洞穴が出來るのであります。洞穴には大きなのは二三里以上の長さがあります。

●若し噴火の勢が激しい時には、熔岩を空中に吹き上げるのです。それが大きければ火山彈、小さければ火山礫、もそつと小さければ火山灰と申します。火山灰が若し水分を含んで居つたなら、火山泥と云ふのであります。通常噴火の折に灰が降ると云ひますのは、この火山灰が風のために高い空中で四方八方に吹き散らされるからのです。紀元七十九年にウエスビアス山が噴出した時に、ポンペー、ヘルキユラチユムと云ふ二つの都市を埋めたと云ふことですが、それはこの火山灰、火山礫などであります。

●●●火山の形狀　火山の形狀は通常圓錐形であります。それは何故かと云へば、元來噴出するのは土地の極く軟かい所に裂隙を求めて、地球の外部

に溶岩が出るのですから、この溶岩其他の噴出物は噴火口の周圍に順次堆積するので、終には圓錐形の山となるのです。故に初めに山があつて、それから後に噴出するのではなく、噴出してからその噴出物のために火山が出來たのであります。噴火口は火山の頂上中央にあるのが常でありまして、形が圓くあります。今でも山の絕頂に池があるのは、この噴火口の遺跡であります。大きさは一定してる筈のものではありません。淺間山などは直徑が一千尺もあります。

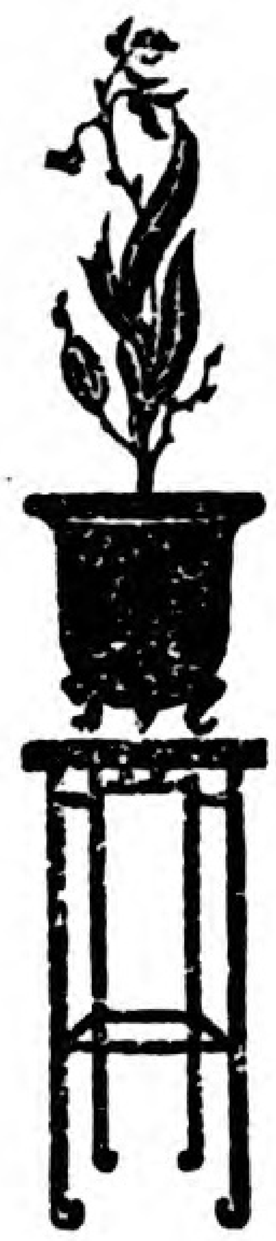
圓錐形火山の傾斜の度はきまつて居りません。緩なものは三度四度位から、急なものは三十度以上のものもあります。又仝じ火山でも圓錐形なのがたんだ一つのもありますし、澤山な圓錐形火山の集まつたのもあります。寶永富士は、富士山の寄生火山と云ふのでして、もとの噴火口よりも外に何地皮の軟かい所を見出して噴出した其の痕迹であります。

火山は皆圓錐形なものでありますから、外見よく火山の特徵は直ぐ分りますけれども、火山が成生してから後、風雨水流の作用などで、其外形も種々變化して居りますから、一寸見たまゝでは分らぬのもあります。

火山の配布　火山は多く嶋嶼海岸地方にのみ多くありまして、大陸の內部にはありません。世界で火山の多い所は太平洋の東西兩海岸、大西洋の東岸、地中海の沿岸等であります。

日本の火山　前に申しませんでしたが、火山には大體二種類あります。活火山と消火山とであります。活火山と云ふのは、歴史があつてから以來一度以下噴出したものでありまして、駿河の富士山、日向の霧嶋山、磐城の磐梯山、信濃の淺間山など

は、則ち活火山であります。この活火山の中でも、現今噴出して居るのと、現今は暫時休止して居るとの二通りあります。消火山とは、一度は嘗て噴出したものでありますけれども、歴史がある時代になつてからは、未だ一度も噴出せないものでありまして、信濃の立科山、伊豆の天城山、上野の榛名山、赤城山の様な山であります。詳しく云へば限りもありませんから、先づ之れ位にして筆を擱きます。





慈母と愛兒（承前）

山形縣女子師範學校長　津田元德

●胎兒のこゝろ

さて前章に胎兒身体の發達を述べたれば、玆には、此胎内期間に胎兒の心意はいかに發達せるかを講究すべし。蓋し此心身の成長一般の標準を知れば從つて胎教の効力をも決定するを得べければなり。されど、此胎兒の心意發達に關しては諸學者の説一定ならず、それ等を一々列擧するは、いと煩はしければ、此には諸學者の説につき研究せし予の結論のみをあぐる事とせん。

蔕花おち豆の線等を入る丶なり。
彩色畫にては、青色に、墨少しを和したるものにて、瓜を畫き、薄き青色にて、豆を畫き、それより、濃墨にて、線を入る丶なり。



火山の話

田中生

皆さんは大抵火山即ち火を噴き出す山嶽の性質光景などは豫て能く御存じのこと丶思ひますけれども、次に此の火山に就て大體のお話をいたします。

●●●●●火山の定義　山であつて現に噴火するか、又は嘗て一度は噴火したことのあるものを火山と云ひます。頂上にある穴を噴火口と云ひ噴出するものを噴出物と申します。

●●●●●火山噴火の原因　河海、湖沼、雨雪等凡ての水は幾分か地中に滲入するものであります。所が吾々の住んで居る地球の内部には地熱と申しまして、地球の表面よりか餘程熱度が高くありますから、滲入した水が地熱の近い方に參りますと湯となつて終には水蒸氣になります。が、水は水蒸氣になると俄かに容積を増して一千七百倍ほどになりますので、到底本の場所に其儘になつて居ることは出來ません。それ故何處か罅隙があつたら其處に拔けて出やうとするのです。若し地殼の脆弱な部分があつたらそこを打ち破つて空氣中に出ます。通常烟を噴き出すと云ふのは、實は水蒸氣であつて、火烟ではないのであります。併し噴出の際には、只單に水蒸氣のみを出すのではなく、其外に溶岩、火山灰、火山泥や、鹽化水素、水素、窒素、硫黃、硫酸瓦斯など種々のものを混じて出し

ます。

●●●噴出物　火山噴出物の主なものは熔岩でありま す。熔岩と云ふのは、岩石のどんな種類にしろ熱のために熔解して、火山の噴火口から流出するものを一般に稱するので、冷却してから後には火山石と云ふのであります。火山石を檢査すると、その表面の粗らくて鐵滓の樣にポツ〳〵穴があるのは、何故かと云ふに、もと熔岩中には水蒸氣を含んで居るので、夫れが冷却の際發散するからなのであります。熔岩の冷却するには、中々月日を要するものでして、大きな熔岩になると、内部は久しく熱して居つて、六年位は冷却しないものがあります。富士山の麓に風穴が澤山あることは御存じでありませうが、此れは熔岩の外部は冷えて堅くなつて居るのに、内部はまだ熱して居つて柔かであるがため、其内部だけ流出したので、そこで大きな洞穴が出來るのであります。洞穴には大きなのは二三里以上の長さがあります。

●若し噴火の勢が激しい時には、熔岩を空中に吹き上げるのです。それが大きければ火山彈、小さければ火山礫、もそつと小さければ火山灰と申します。火山灰が若し水分を含んで居つたなら、火山泥と云ふのであります。通常噴火の折に灰が降ると云ひますのは、この火山灰が風のために高い空中で四方八方に吹き散らされるからのです。紀元七十九年にウエスビアス山が噴出した時に、ポンペー、ヘルキユラテユムと云ふ二つの都市を埋めたと云ふことですが、それはこの火山灰、火山礫などであります。

●●●火山の形狀　火山の形狀は通常圓錐形であります。それは何故かと云へば、元來噴出するのは土地の極く軟かい所に裂隙を求めて、地球の外部

に溶岩が出るのですから、この溶岩其他の噴出物は噴火口の周圍に順次堆積するので、終には圓錐形の山となるのです。故に初めに山があつて、それから後に噴出するのではなく、噴出してからその噴出物のために火山が出來たのであります。噴火口は火山の頂上中央にあるのが常でありまして、形が圓くあります。今でも山の絶頂に池があるのは、この噴火口の遺跡であります。大きさは一定してる筈のものではありません。淺間山などは直徑が一千尺もあります。

圓錐形火山の傾斜の度はきまつて居りません。緩なものは三度四度位から、急なものは三十度以上のものもあります。又仝じ火山でも圓錐形なのがたんだ一つのもありますし、澤山な圓錐形火山の集まつたのもあります。寶永富士は、富士山の寄生火山と云ふのでして、もとの噴火口よりも外側地皮の軟かい所を見出して噴出した其の痕迹であります。

火山は皆圓錐形なものでありますから、外見よく火山の特徴は直ぐ分りますけれども、火山が成生してから後、風雨水流の作用などで、其外形も種々變化して居りますから、一寸見たまゝでは分らぬのもあります。

●●●●火山の配布　火山は多く嶋嶼海岸地方にのみ多くありまして、大陸の内部にはありません。世界で火山の多い所は太平洋の東西兩海岸、大西洋の東岸、地中海の沿岸等であります。

●●●●日本の火山　前に申しませんでしたが、火山には大體二種類あります。活火山と消火山とであります。活火山と云ふのは、歴史があつてから以來一度以上噴出したものでありまして、駿河の富士山、日向の霧嶋山、磐城の磐梯山、信濃の淺間山など

は、則ち活火山であります。この活火山の中でも、現今噴出して居るのと、現今は暫時休止して居るとの二通りあります。消火山とは、一度は嘗て噴出したものでありますけれども、歷史がある時代になつてからは、未だ一度も噴出せないものでありまして、信濃の立科山、伊豆の天城山、上野の榛名山、赤城山の樣な山であります。詳しく云へば限りもありませんから、先づ之れ位にして筆を擱きます。





慈母と愛兒（承前）

山形縣女子師範學校長　津田元德

●胎兒のこゝろ

さて前章に胎兒身体の發達を述べたれば、茲には、此胎內期間に胎兒の心意はいかに發達せるかを講究すべし。蓋し此心身の成長一般の標準を知れば從つて胎敎の効力をも決定するを得べければなり。されど、此胎兒の心意發達に關しては諸學者の說一定ならず、それ等を一々列擧するは、いと煩はしければ、此には諸學者の說につき研究せし予の結論のみをあぐる事とせん。

リボー氏は、胎兒の覺官は凡て無感覺なりといひ、之に反してカバニス氏は、胎兒は、白日の光を見る前に、既に、多くの印象を受け、光、音の感覺もあり、飢餓も感じ、種々程度を異にせる執意をも生じ、多少の慣習をも生じ、偏性をも有すと言ひしは、何れも過大に失せるものにて、

一、心意は外界の印象なければ發達せざる事、

二、新生兒は、其の空腹ならざる間は、凡て昏睡せる事

三、光線及び空氣の媒介によりて初めて其作用を營むべき視聽嗅覺は、胎内の暗黒内にては、到底發達せざるべき理、

四、新生兒の耳腔、鼻内等に一種の粘液の充滿せる事、

五、新生兒の快苦感應の狀態等を比較推究するに、胎兒は、恰も睡眠せると同じく、光、音、味嗅を感ずる事のあらざるは明かなり。從つて充分なる心意發達のあらざるとも亦明かなり。されども、

一、妊娠四五ケ月より兒動きの頻繁なるは少なくとも、微弱なる意識の起るべき所以たると、從つて

二、母体に接觸する事により、多少の觸覺と筋覺とを生ずべき理と、

三、温度の變化によりて、兒動きあり、ルイス氏の觀察によれば、百廿日目より冷き手を母体上に置けば、神生反應により、自發的運動を生ず、

といへりし等と、

四、新生兒の頭部の比較的大なる事と、

五、新生兒が、母体を離るゝや、冷氣の其の肺中に浸入せる驚愕と、苦痛とにより、産聲を發す

る事
等より推究すれば、
第一、生活の實力　　第二、多少の觸覺
第三、寒熱の感應　　第四、筋肉の諸感
第五、飢餓の感應　　第六、快苦の準備
第七、漠然たる意識
は、既に準備し、既に練習せりと云はざるべから
ず。則ち、智力的、感情的、道德的萌芽は、遺傳
により、既に有せるものたらざるべからず。
（續出）

產所式（つゞき）

東京女學館講師　有住常子

なは普通の宮參の時の樣は、嬰兒誕生して、其子三十日迄は、血忌とてつゝしみ、血忌あけて、所の生土の社へ社參するなり。其日は、男子は廿一日目、女子は三十二日目に參宮りす。此日數の丁半にて、男女の陰陽なり。もし其日に宮參できぬ時は、百日目にても、百廿日の箸初の日にても社參するなり。何れも分限によるべし。

神前へのさゝげ物は、上々にては、正しくば神馬一匹を以てせられし古例あり。今も夫によつて、其代ほどの物をさゝぐべし。下には、繪馬などささげなどすめり。

散錢散米の事　　散錢散米とて、押桶に米錢を入れて、鳥居の內より、拜殿までの間にて、左右に蒔かする事あり。下々も、これにならひてまくべし。

神前へは、强めし、餅、たるざかなを獻ずべし。之を神主、廣前へ供ふるなり。分限によつて多くも少くもすべし。

宮參の時の裝束は、產髮をたれて、男子女子とも

に、産着をきせ參らすべし。たとへ産着の色直しありて以後の宮參たりとも、宮參の時は、うぶぎぬを着せて參らするなり。

（未完）

揷花の話（つゞき）

小畑いく子

低ながし

高ながし、中ながしは前回に述べました通り「一の分れ」の長く強きを除かずに、却てそれを利用したるに始まりまして、それに段々と變化を生じて參りましたものですが、此低ながしに至りましては、其性質を少しく異にして居ります。即ちこれは、單に「三」の枝を長くひきましたのみであります。然しそれには、また普通本花の「三」だけにては釣合上不都合ですから、自然「ひかへの枝」を用ゐ、また「三の奥」「三の前」などを程よくあしらはなければなりませぬ。其長さは、大約「一」の長さの半位のものですが、それを長くひくほどが技量を現す處であります。が、其長くひくだけ總体に變化を生じます。即ち「二」の枝などは余り長く出さぬやう、なるべく短く高く使ひませねばなりませぬ。「一」は始めに、充分「二」の方へかゝるやうに出し、腰のあたりよりは、なるべく中心より「三」の方へ越えぬやうに致しませぬと、「三」の方へ引倒さるゝ感が起ります。そこで、なるべく後方へ矯めるやうに致さねばなりませぬ。殊に注意を要するは「奥」であります。

「枝の方向」の條に出しました圖を御覽になると分ります。「奥」と「三」とは、全く一直線の方向でありますから、「三」を長くひく此低ながしには、最、關係のある枝です。「三」を長くして、此奥を普通

の如く使ひますれば、恰も兩手を擴げたやうにて、眞に見ぐるしくなりますから、其時は奥を短くて、よくきく枝を用ゐんければなりませぬ。それ故、なるべく普通の本花のよりは後へ出すやうに致します。さすればまことに全体の釣合を保ちて、奥深く穏なる形となります。御參考に低ながしの圖を下に出しましたが、兎に角天然のゆるすかぎり人工の技を加へて、挿花の本旨にそむかぬやう、常に力量強弱の平均に充分注意をせねばなりませぬ。



低なかし
山花

本花各論

常盤木

是より各論に移りますに付ましては、まづ木の種類より御話を致して草物に及ばし、それも挿易きものより段々と述べて參る方が順ではありますが、それでは折角庭の花園に咲き出ました花の一枝を手折りましても、床に直すことが少しむつかしい。それ故、自然挿花に對する感念が薄くなりますから、まづ當季〱のものより御話し致す方

却てよろしからんかと思ひまして、その順序で進むつもりであります。勿論當季の花と申しても、殊に今より暫くは、所謂千草の秋で、野も山も錦おりなす頃ですから、それを一つ〳〵に付て申す時は際限もありませぬから、到底限りある紙上では申し盡す事が出來ませぬ。そして同種の物は單に其一二を掲げて御話致しますから、他はそれに準じて御承知をねがひたいのであります。然し今日は、まづ四季ともに絶ぬ物から御話しを致します。即ち、常盤木と申しましても、松、檜、槙、榧、眞木など幾種もありますが、大抵其挿花の方より見ます性質は大同小異でありますから、一つ〳〵に説明は致しませぬ。總て此種の喬木は、或は深山幽谷に生じ、或は狂濤梢を洗ふ荒磯にも馴れて育つものでありますから、自然其形に變化のあるもので、つとめて其木の生育の有樣を察して、なるべく其本分を失はぬやう、氣品をおとさぬやうに挿さねばなりませぬ。正月の床飾などに、苔むした老松の節々しきを程よく挿たのなどは、實に結構なものでありますが、左樣な物は容易く手に入る者で有ませぬから、常に稽古挿などには出來ませぬ。同じ松でも、若松の方は、子の日する野邊の小松など、實に聞くからやさしきも



本花左勝手　若松三本

のでありますから、いかにもなだらかに、すなはち挿さねばなりませぬ。まへのさし絵は、即ち其若松の方であります。挿方に至ては、枝の長短、根の締りをはじめ、總て「本花」の條に述べました心得を以て挿せばよろしいのであります。全體既に「挿方の注意」の條にも述べました通り、挿花の形式は、もと一二三の數より起りまして、段々複雜に變化して參つたものでありますが、其一二三の三角形は、決して正三角形ではありませぬ。もし正三角形でありましたらば、横廣くのみ見えまして、のび〳〵と發育すべき形跡もなく、總て變化に乏しくなります。そこで定木のやうな三角形でなければなりませぬ。「一」などは、どこまでも立ちのびる勢を示しまして「二」「三」は、或は「二」を長くして「三」を短くつかひ、「三」を長くすれば「二」を短く出すといふやうに、材料或は塲合に依て起る變化を自由に爲なければなりませぬ。形式草物は大抵一莖づつになりて居りますから、形式通りの體を作りて參ります事も出來ますが、木に至てはさういふ都合になりませぬから、豫め材料を求むる時に於て、よく〳〵「室の勝手」の適否をはじめ、總て枝ぶりをしらべおかねばなりませぬ。また花器に挿さぬ前には、たとへ不用と認むる枝なりとも、猥りに切りとる事を愼まねばなりませぬ。一度切りたる枝は、再び接ぐ事は出來ませぬから、鋏をいれる事は最後の事と致さねばなりませぬ。

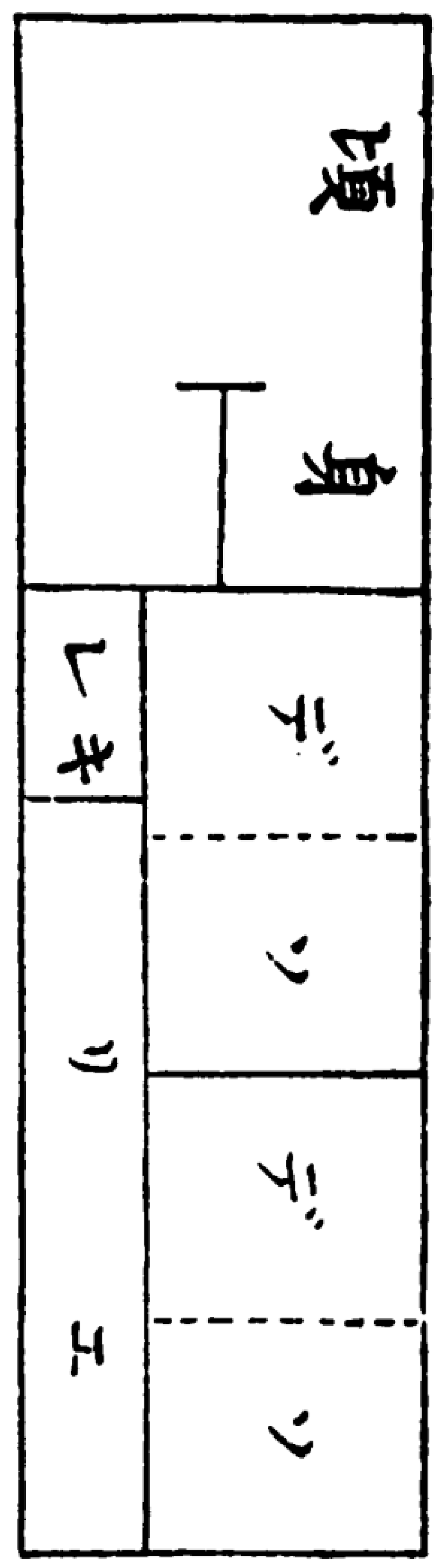
（未完）

裁縫

横濱高等女學校講師　中村むめ子

諸子は、前にお話致しました、一つ身襦袢のことは、よくお分りになりましたでせう、そこで、次

のをお考へ下さい。
矢張り一つ身の襦袢でありますが、前のよりは、大ぶりのですから、幅なりで一尺四寸の丈けに、両袖を取り、其端から二寸五分裁ち落して衿とし身の丈を一尺二寸としましたなら用布は何程入りませうか、



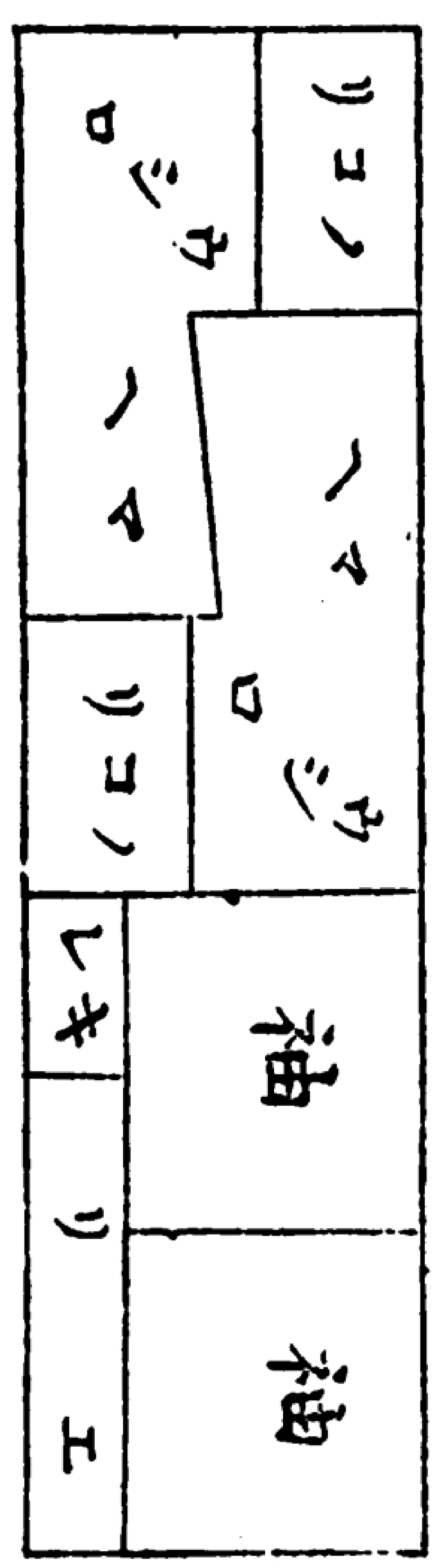
袖巾六寸五分　衿巾二寸五分

衿丈二尺六寸　衿肩　一寸

衿丈けを知りますには、身の丈けへ一寸五分、即ち衿肩の一寸と衿先きの縫代五分とを加へて、二倍するのであります。
次は、三つ身襦袢の裁ち方であります。
巾九寸五分長さ九尺六寸五分の布を以て、三つ身の襦袢を裁つに、袖丈一尺四寸にせば身の丈何程なるか。

裁ち切り寸法

袖丈	一尺四寸	同巾	七寸
身丈	一尺三寸五分	後巾	五寸五分
前巾	五寸	衿肩明	一寸五分
衿丈	三尺一寸	同巾	二寸五分



裁ち方解

九尺六寸五分の中より五尺六寸裁ち切り、片端より竪に巾二寸五分落して衿となし、廣さ方は二つに切りて両袖となす、次に、残りの四尺五分を三つ折にして一は手前より五寸切り込み、一は向より五寸切り込み、肩明一寸五分として、脊の端よ

り殘り切を取り、前身頃は圖の如く斜に裁つのであります。

積り方

(965—145×4)÷3＝身丈13.5

袖丈×4＋身丈×4＝總丈

(總丈—身丈×4)÷3袖丈

仕立つる寸法

袖付	四寸五分内外	同巾	六寸五分
身の八つ口	二寸	馬乘	二寸
身巾	前後いつぱい	衿巾	一寸

縫ひ方

三つ身襦袢の縫ひ方順序は、一つ身襦袢と同樣であります、只脊を袖下の樣に袋縫ひにするのと、寸法の少しく違ひますばかりですから略きました。



だいどころ

女子東京美術學校講師　石井湧太郎

鰹魚料理のさま〴〵

◎鰹飯の炊やう、

これは、生節をよく洗ひ、小口切にして、成るべく細かに崩して、夫れを布巾などに包みて、飯の火を引く前に上部に置き、焚き終りてよく交ぜ合せ、出すあり。かけ汁は、生醤油を酒、鹽水等にて少し淡く仕立、一度煮返し用ゐるなり。加料は、おろし生姜、卸大根、たうがらし、淺草のり等よろし。

◎かつをの刺身の仕樣、

鰹魚を刺身に作るには、普通鯛等を作る樣に、直に其の身を作れば、必ず盛りたる皿に鮮血出來り

て、甚だ見苦しきものなり。されば之れを作るには、始め大身を割りて紙に包み、暫時過ぎて作れば、血汁を出さずして、見苦しからず。

◎鰹魚の麹漬

鰹魚を好き程に見計ひて切り、鹽を振りて暫時置き麹にて鮨を漬けるが如くに漬け込み、壓石をかけ、好く漬りたれば、酒、酢にて食す。或は一寸方角位に切りて、壺に麹に鰹とを一層〳〵に幾層も漬けて其の上より上酒を掛け置きて食するもよろし、

◎かつをの麹巻

鰹魚の鮮なるもの〻腸を去り、腹を割りて脊皮の際まで庖丁を入れ又腹より口又皮の外部へも鹽を擦り、次に鹽と等分に合せ、腹より口迄つめ藁にて巻き、薦席に包み二三日經ちて、上を下に翻す。鹽の能く熟れたる時分を見計ひて食す。味ひよきものなり。

◎鰹魚の皮蒲焼

鰹魚の皮の蒲やきは、皮に少し身の付きたる方よろしく、これを唐辛子醤油又は山椒じやうゆを付け焼にして用ゐるなり。尤も鰹魚に限らず、鯛、鮭、鮃、鰤、等の類は、此の仕方にてよろし。何れも青串にさして用ゐるなり。

◎土佐鰹魚、たゝき指身の作り方、

これは、鰹魚一本を四ッ割にして、其の一ッを薄く三枚にへぎ、それを鐵きうの上に載せて、而してかねて炭俵（茅に限る故之を用ふ）を用意し置きて、右に火を點じ、これに其の鐵きうを差出し。其の肉の外部少し焼けるを度として（此の焼き方尤も注意すべし）裏返し、兩面をあぶりさすれば、肉中未だ生鮮なるを以てこれを俎上に移し、これを指身と成すに、成べく厚く切り、これに鹽を撒布して酢をうち、よく〳〵

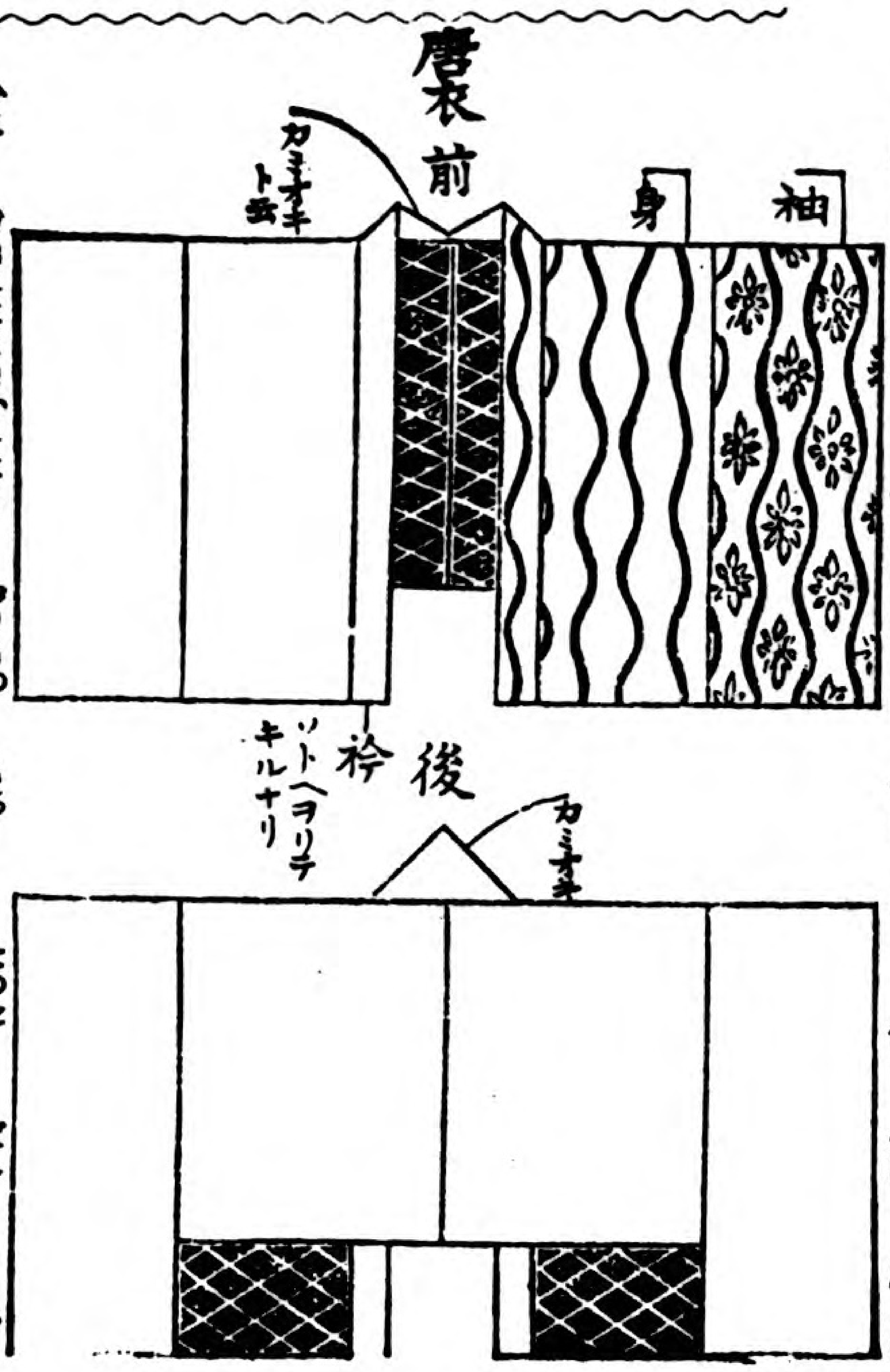
敲き付け（尤もたゝきやう注意すべし）後ち皿に入れ、青紫蘇をきざみてつまとなし食す。味の佳なる事實に普通の指身の及ぶ處にあらず。



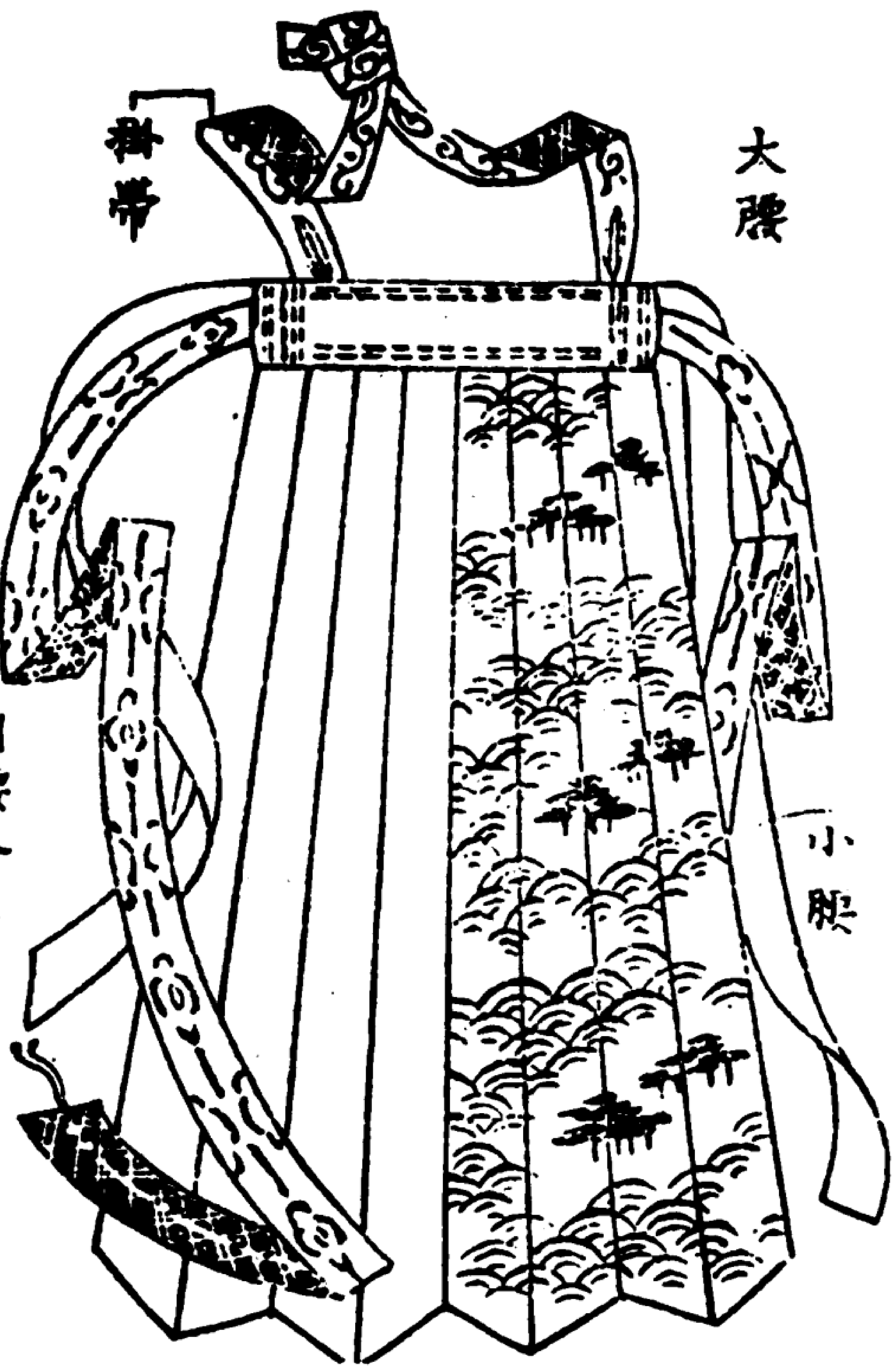
女子服裝の沿革（第十三回）

上地信成

七、唐衣――婦人禮服の時表着の上に着用するので、總體身の丈けと袖巾とは短かく、身の前は少し長くて、袖の丈と同じき異樣な服である。これは元支那の制をそのまゝ摸倣したものでありまして、地質は大抵錦を用ゐます、此服は上臈女房より下臈下仕に至る迄一般に着用しますが此内に禁色と云ふがありまして、色を許された人は赤色青色の織物を用ゐ、其他一般には綾文のえび染を用ゐて居ました、併し又襲の名に隨つて種々の文を用ゐる事も流行して居た樣子である。この他四時折々に流行した色目、織物模樣などは種々ありますが、これを一々申上げては、故實くさく成つて、趣味も減じるだらうと思ひますから、略します。



八、裳——禮服の時、腰から下は、後の方へ蔽ひつくるもの〻、上古の裙から一變したものでありませう、前回云ひ落しましたが、古へは先づ下に紅袴を穿ち、其前の方より褶をまとひ又後の方より裙をつけて居たものである。それが褶は承和の頃に廢せられまして、只裙のみをつ



けて居ましたが、段々世の中が奢侈に流れ、所謂ミエを張る様になりまして、何日しかこの裙に殊更にヒダを深く作り、兩端をつゞめ、後の方にのみあて〻、其裾を長く引く様に爲たのである。これが即ち當時稱する裳と云ふものであります。其さまは上の圖に就て御覽下さい。

扨て裳には繡物、織物の外に、纐纈裳、目染裳、下濃裳、地摺裳等いろ〳〵の種類があります。中にも地摺裳は、尤も廣く行はれて居ました。其模樣も一定して居ないが、大抵高貴の御方は桐竹に鳳凰、又は花鳥の類を畫き、上臈の女房は大方海浦又は大海を用ゐて居たのであります。

(海浦とは海邊の景色を畫き大海とは青海波の形を本として波間に見或は濱松など畫く摺りたるを云ふ)

九、大腰、引帶——兩方とも裳に附屬したものでありまして、元は何れも裳の紐と申したのです

が、何日しか別に製する樣に爲て、大腰は長さ二尺五寸、廣さ四寸五分。引帶は長さ六尺五寸巾二寸五分と定め、表は小さき霰地に窠の紋、裏は白綾に重菱の紋を用ゐる樣に成たのである又小腰と云ふものがある。これは裳の結紐であります。昔しは引帶にて結んだものですが、當時は專ら裝飾のものと成て、裳の左右に引き垂るゝ樣になりましたから、別に小腰と云ふものが出來たのである。

十、掛帶――昔の比禮より變じたものである。併し古く此名が見えて居ないから、初の制は知れないが、後世は、唐衣と同じ織物を以て、唐衣の上より肩を引こして胸のあたりで結びたらしたものである。上の圖に就て御覽になれば、其さまは明かに知ることが出來ます。

十一、大垂髮、釵子平額、袙 扇――これは禮服の具でありますが、說明は便宜上、頭髮及び裝飾品の條に記すことゝいたします。

以上は即ち十二單衣に就きましての大畧でありますが、元より貴賤と貧富或は夏と冬などによつて其地質とか、或は紋がらなどに多少の相違もあり又人々の嗜好によりて、襲の色目なども一樣でありませんから、物語文などの中には、隨分解しかねる樣な服裝も段々ありますが、併しそれは單に襲の色目とか、織物とか、紋がらとかで、其服は何れを御覽になつても、以上記しましたものより外にはないのであります。若し此外の事でお分りにならぬことがありましたら、本誌、落葉籠欄で御質問次第お答へすることとしゝて、詳しき事は略したのであります。

諸道の歴史

文學士　宮崎鳥府

（四）　琴曲

琴は本邦女流第一の樂器として盛に行はれ、今に及びて、なほ衰ふる事なし。今遠く其起原を尋ぬるに、神代の昔、既に天詔琴あり。これ後世の和琴か、東琴など稱するもの丶類なるべし。降つて平安時代専ら行はれたりしは、箏とて、今日の筑紫琴の祖なり。其傳説には、初め宇多天皇の御代に、命婦石川の色子と云へる人、筑紫國彦山に遊び、唐人某にあひて、箏のことを得、其彈き方をも習ひて、天皇に奉りたりしを以て、箏は筑紫琴の名と共に、傳來の始めなりと云ふ。其製法は、樂器考に、桐を以てつくり、上は高く下は平かに、半ば空となし、長さは六尺四寸、首は廣さ八寸二分半、尾は廣さ七寸八分八厘、十三弦にして、柱高さ三寸、竹を以て擽爪とすとあり今日の琴は、何れも十三絃、即ち筑紫琴にして往古箏と云ひしものなり。平安朝以來、鎌倉室町の世を通じて、公卿貴嬪の間に弄ばれしも、未だ獨立の樂器たる能はず。漸く他の簫、笙、横笛などによりて、其音を發したりしが、室町時代の末大永年中筑後國善導寺の僧に、箏曲をよくする者ありけり。肥前の人賢順と呼べる者此僧に師事して、其秘曲を傳へられ、大に會得する處あり。其弟子慶岩寺の僧玄恕、法水の二人又斯道をよくせり次で天文年中、周防の國主大内義隆、常に風雅を好み、詩歌管絃等の遊びに耽りしかば、賢順此技を以て山口に赴く。時に京都は、應仁文明以來、戰塲の衢と變じて、干戈劍戟の聲絶ゆることなかりしかば、内裏雛とまで呼ばれたる大宮人、いか

でか此聲をきゝて、永住することを得ん。上は關白を始めとして、其他の殿上上達部など、思ひ思ひに士をたよりて、各地へ流遇し、殊に大内氏は皇室との關係も淺からざりしことゝて、七人の公卿逃れ來りて大内家に食客たりしが、皆賢順が技にめでゝ各自雅樂越天樂の譜によりて、唱歌各々一首を作り、賢順をして其彈法を作らしめぬ。此七首を後に蕗組と呼べり。(組とは、同趣の小歌を二つ三つ或は四つ五つ集めて一組としたるものをいふ。)これを初めとして、梅が枝、天下太平、薄雪、雪晨の五曲を作りなしたり。これ箏曲組歌の濫觴なりとす。後奈良天皇の天文二十年、陶晴賢の爲に、大内家斷絶するに至るや、賢順去つて京師に上り、大に藪大納言の知遇を受け、遂に此箏曲を叡聞に達せりとぞ。賢順京に停ること十數年、其歸國するに及びて、其弟子法水を上京せしめて、斯曲を流布せしめたり。後、寛永六年の頃、琴の御許を下し給はりて、關東に下り、專ら此法を弘めしより、漸く筑紫樂と稱して、世の弄びとなれりとかや。此時、醫者八橋檢校と云ふものあり。寺尾檢校の弟子にて三味線の上手なりしが、中年の頃より琴に志し、法水に就て其彈法を學び、肥後國に玄恕を訪ひて奥義を極め、やがて歸り來りて思へらく、筑紫琴は其曲雅なれどもいと高尚にして俚耳に入り難きふし少なからず。このまゝにては斯曲の隆盛期す可らずとて、自ら更に新曲を作り、寛文年中に至り、新舊を合せて表、裏、中、奥の四組となせり。表組には舊六曲(即蕗組、梅ケ枝、心づくし、天下太平、薄雪、雪晨を云ふ)にて、新曲、雲の上、薄衣、桐壺、の三曲をば裏組と稱し、須磨の曲をば中組とし、四季、扇、雲井の三曲を奥組となし、合せ四組十三曲を定め、後又新曲二組を補ひて、八橋一流の琴曲をぞ創始

したりける。爾後琴曲又專門家の業となり、左の流派を生ずるに至れり。

○賢順｛玄恕・法水｝八橋檢校（八橋流祖）
　○生田檢校（生田流祖）
　○山田檢校（山田流祖）
　　├山登檢校（山登流祖）
　　├山勢檢校（山勢流祖）
　　└山木檢校（山木流祖）

八橋檢校は寺尾檢校に就て三味線を學び上永檢校城談と稱し、其父祖及び生年詳かならざれども、貞享二年、七十餘歲にて、京地に歿せり。墓は黑谷にありと世事談に記したるは、やゝ信ずべきものなるが如し。彼は萬治寛文頃を中心として、此技の流行を計りたりしも、早や三味線全國に行き渡りて、琴の流行思はしからざりしかば、つくづくと思案をめぐらし、遂に當時流行の小唄を琴にすることを工夫し、先づ近頃人々のもてはやしたる弄齋節、隆達節を琴に彈じ初めたり。されど弄齋の歌は、今日迄琴曲の中に傳はりぬ。

月とや色ヤレノウ山の端に、はなれ〴〵の浮雲
見れば明の別れもあの如く

かく苦心して其流行を期したりしも、三味線の輕便にして、何れの歌にも合せ得るには敵する能はざりしが、元祿中生田檢校出でゝ、檢校の素志をつぎ、三味線に唄ふ地唄をば悉く、箏に移して、平調子にて彈き初めしかば、琴と三味線とは、殆ど同物の如くなりたりといふ。京阪地方にては、今も地唄のみを用ゐて、其本來なる組唄は餘り彈奏せざる由なり。此生田檢校は、彈法を眞草行の三つに別ちて、尤も妙手なりければ、此末流大に江戸に流行し、享保以來は、全く此一流に限られき。當時北島安村の二檢校、生田に次で箏曲を善

くせり。かくて倉橋、三橋、牧野、石塚等の諸檢校輩出して、明石、羽衣、思川、飛燕、若葉、四季富士、玉葛、花宴、等の新曲を出し、又五段七段九段の新調を作り、安永年中には、既に組歌三十三曲、秘曲二曲、段調子七曲、弄齋二曲を制定したり。

寛政年中にいたり、江戸に山田檢校あり。新に一流を起し、八橋生田などの筑紫箏に對し、自ら吾嬬箏と云ふ新曲三十餘番をつくりて、絃の調子をも悉く改め、又必ず三絃と合奏するを得せしむ。次で山登、山木、山勢、の三撿校此内よりあらはれ、數世其名をつぎ、其枝を傳へしかば、江戸の箏曲は、生田流を壓倒して、全く江戸の覇權を握りたりき。

又此間に、琴唄の新作少なからず。中にも、北島檢校の橋姫、明石、末松、空蟬、倉橋檢校の新雲井、弄齋、三橋檢校の雪月花、六玉川、浮舟などを主として、白川樂翁の櫻狩、村田春海の山櫻、橘千蔭の花妻及び吾妻の花、横田袋翁の初音及び小督、高井蘭阿の芙蓉の峯、及び江の島、長恨歌、山勢百泰の住吉、原の戀などの名作交々世に出でゝ、以上の諸流は互に門戸を張りて、良家の子女を薫陶すること今に盛にして、嫁入仕度の必須なる者とはなりぬ。あゝこれ果して是か非か？

箏のしづく（三）

文學士　田淵芙容

あはれ飛箭絃を離れて、幽冥處を異にせんとする一殺那、糸の亂れの苦しき思を叙べて、露の情も宮城野の、草より滋き將軍の虎口を脱し、やうやく玉の緒を繋ぎ止めたる阿部貞任、衣川の流れ淙

淙として、絶えず其美譚をいまに止めぬ。朝廷に叛きたる荒夷の巨魁、不倶戴天の賊なれども、戦ひ悉く敗れ、衣川の堅柵また危からむとして天命こゝに窮まるとき、とし月辛酸苦楚を甞め尽したる衷情を三十一文字に托す。あはれなるは彼が心也。さすが鬼神の聞えある源義家、引き絞りたる満月をゆるべ、敵ながら衣のたての綻びたるを思ひやり、曇りし空に村時雨、やがては鎧の袖も朽ちんとす。やさしきはこれの情也。世は苅菰と亂れに亂れ、兵馬倥偬風なまぐさき間にありて、なほかゝる心操に富める武夫あれども、おぞや寸を以て尺を測る者あり。是を優長なりとして排斥するうたてさ。單に理性の末に走り、殘忍冷酷眼にあつき涙なく、心に惻隱の情なきもの、よく知るべき處ならんや。僅か三十一文字に過ぎざれど、熱腸を絞りたる和歌は、其意や深長、人を動かす事概ねかくの如し。げに罪を得て、南陲の孤島に配所の月を眺め、悲歎悔悟の焰燃ゆるとき、或は寃杜に苦んであだし野の露と消えなんとして世の非道を憤るをり、或ひ佞臣明君を蔽ふて、清廉の士空しく利器を抱いて草莽に蟄するに際し、その鬱屈せる情を洩し、満腔の不平を和歌の美形にあらはして、其志を得たるもの幾許ぞや。

嗚呼、榮利勳功に偏する輩、狭量冷刻死灰の如き士、暫く和歌の海に遊んで、至誠憐愍の情を養ひ精神上の慰籍を求めよ。渺茫としてあだ波驕がず情のしづく、眞珠の光り即ちこゝにあるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

保元このかた、源平二氏互に鎬を削りて雲のゆきかひたゞならす、戦の塵巷を蔽ひて四海波しづかならざりしが、義朝平治の亂に敗れて、尾張にはかなき最後を遂げにたれば、平家の勢力朝日の登

るがごとく、一門の榮花こゝに咲き亂れて、益々其權力を恣にせり。されど隴を得て蜀を望むは人情也、淨海こゝに橫暴を極め、黜陟常なく、殘忍なるふるまひのみ多くして、遂には一天萬乘の君をも動かし奉らむとす。忠勇氣節の士、誰か憤慨せざらむ。源頼政は鳥羽帝に從ひ奉り、清盛と進退を一にしたれど、いまこの樣を見るより、いたく怒りて、以仁王を奉じて平氏を倒さむとしけるが、如何なるまがつみの仕業にや、計りごと皆宇治川の泡と消え、平等院に名譽の跡を殘しぬ。されど諸國に散在せる源氏に檄を飛ばして、木曾の木强漢を起たゝしめ、蛭が兒島に潜める龍に雲を與へしは、實に彼が力なり。後年平氏を西海の波にたゝよはせ、壇の浦の藻屑とせしも、興つて功ある也。かく源氏勃興には力あれども、時を得ざればまた活動すべからず。もと頼政は、俗に鵺を射たりと稱ふる程にて、弓矢取っての剛の者なりしがなか〳〵にゆかしき心ありて、和歌の浦波たち後れざりけり。保元以來勳功多けれども、野中に立てる一本杉、之を援助する者とてもなければ、僅に大内守護の任に當りて、みかきの内に侍りながら、なほ昇殿をば許されざりければ、昔の功に比べては、世のはかなさを感じけむ、人を口惜しくや思ひけむ、或る夜行幸ありけるに、明月圓かにして無限の情を浮べたり。今は憂ひにえ堪へで、一首の歌を讀みて丹波の内侍の許に遣せり。



人知れぬ大内山の山守は
　　木陰れてのみ月を見る哉

かくて二條院位を高倉帝に讓りぬ。この歌を聞召していと不便におぼされ、遂に昇殿を許されたり木陰れたりし山守の、茂みをいでゝ月を見る、そのゆかしさはいかならむ。其後やう〳〵昇進して四位の殿上人にて、久しく仕へ居るを述懷して、

上るべき便なければ木の下に
　　しひを拾ひて世を渡るかな

此時よはひ既に傾きて七十五歳の高きに達し、かつ源平常に仇敵視したる姿なりしかば、誠に昇進すべき便なかりし也。逆境にある人の歎聲を洩らすは、敢て怪しむに足らず。帝之をいとはしみ給ひて、三位に叙せられぬ。彼は大に喜びて、是より出家して源三位入道とも稱せらる。四位よりは、容易に三位に叙せざるを例とすれば、この事は、實に意外の昇進なりとて、時人の耳目を驚かせりとぞ。かつて紀貫之が天地を動かすといへるも、決して强事にはあらざりけり。

◎　◎　◎　◎　◎　◎

石見の國司、某、未だ年若けれども、才器人にすぐれて、善く其國を治めてけり。慈仁を本とし賞罰を明かにせしかば、民草風に靡きて野に怨聲なかりき。常に領地を巡見して地理を究めしが、一日石見潟に遊びけるに、空は碧瑠璃のごとく晴れたり。朝なぎ海面靜かにして白鷗汀に眠り、かなた此方に羅列せる小島の巖の、常盤の松の姿をかしく枝をかはせる美しさ、えも言はれず。しばし其景色を眺めつゝ、唐詩など口ずさみけるに、いづこよりかかすかに歌の聲聞えたり。自然の奏づる音にも通ひてゆかしければ、思はず心ひかされて、其方に歩を移しぬ。見れば岩隠れの濱邊に敷

多のかづきする海士ども、節おもしろく歌ひ居たり。音樂の巧なる調べには、行雲いざよひ、梁塵動くとかよ。國守その事を知るや知らずや。その者どもを呼び寄せて歌はせけるに、鄙とはいへどさすがに身にしみぬらむと覺えたれど、大方國守なるを憚おぢて逃げ隱れたるをあきたらず思はれぬ。されど、其中に海上には肖やらで、容貌うるはしく、雪の肌の解けもせぬべき心地せらるる女ありつるが、なほ其心はうるはしかりけり。花はづかしき姿、あはれ深山の名花をりもしつべきを、芳紀漸く十七八に過ぎず。かの御前にて歌ひ興じけるものどもに托して、一首の歌を國守に申しける。

　もろ共にあさりしものを濱千鳥
　　いかに雲井に立のぼるらむ

人麿の生れし程の國柄なればにや、その調べおさおさ都の人に劣らざりしかば、國守之を聞きて、そのやさしき心を感じ、紫の衣一重を與へにければ、

　紫の雲のうは着も何かせむ
　　かづきのみする海士の身なれば

と一首の歌を附して返せしかば、益々其清き心をめでゝ、遂に伴ひ歸りて御台所になしたりとぞ。あしたはもしはやく海士の身、ゆふべは國守の北の方となりて榮華を謳ふ。歌の德また少々なりと謂はむや。

（未完）

都の塵（その二）

本居茗水

◎牛が淵

むかし牛車こゝにおちて、遂に牛も車も揚らずな

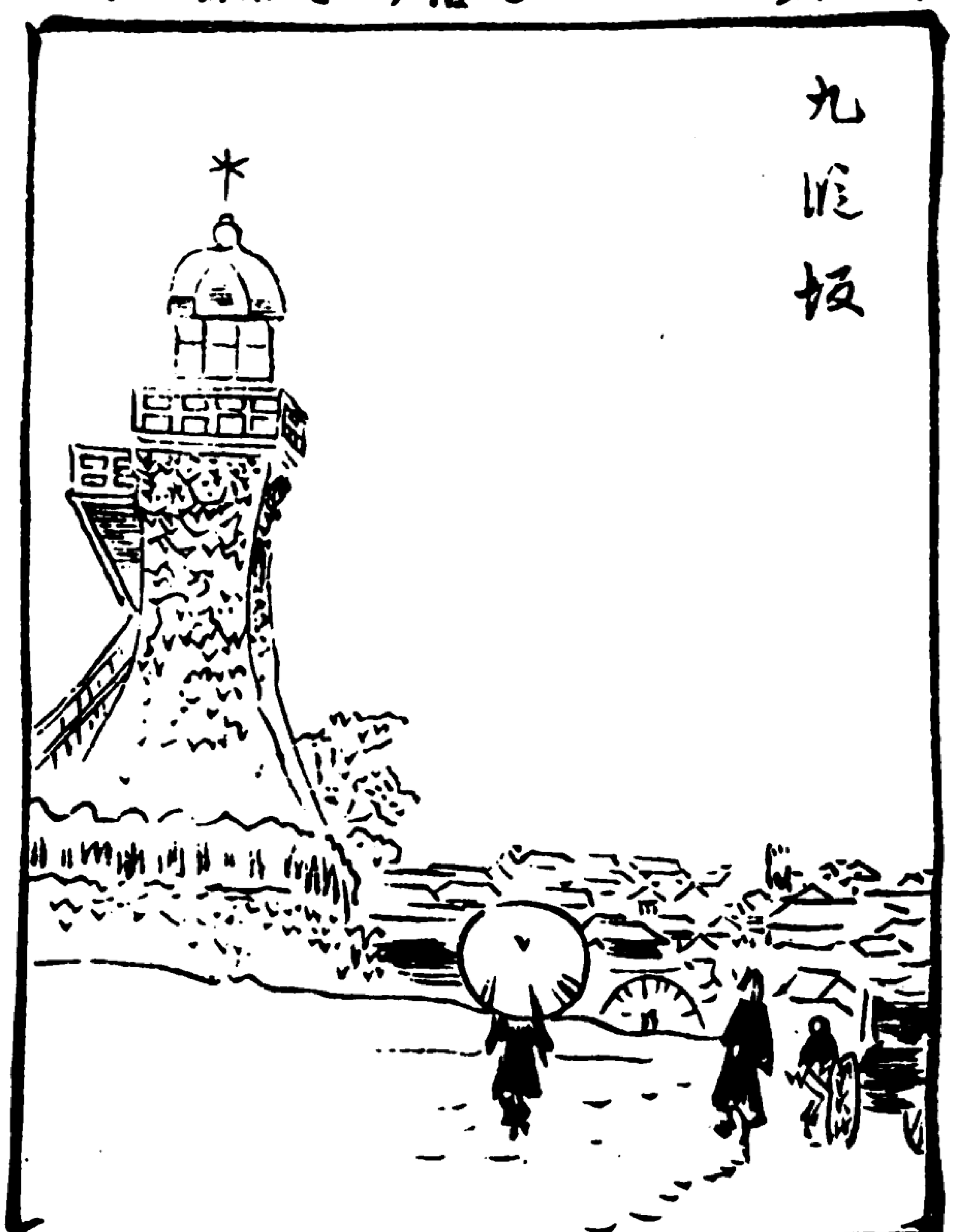
りにければ、かく呼ぶとなん云ひ傳へたる。九段坂より見下ろせば、玉藻生ひ茂りて、今も猶物凄かりけり。あはれ、かゝる青淵に沈み果てけん心の中を思ひやれば、げに、それをこそうしとはいふべかりけり。

◎嬉しの森

吾妻橋近き川端に茂れるが、この森なりけり。川をへだてゝも、やがてそれと見きはめ得るは、誰をまち得て、かくは袖にも包みあへず、穂にあはれし嬉しさにかあるらん。

◎雞聲が窪

昔大炊頭と聞えて、世に時めきし土井の何がしが



館近く、夜な〳〵雞の鳴きわたりしを、人々あやしみて尋ぬるに、其の館の内なる地の底に聲せしかば、やがてそこを掘りて見しに、まさしく、黄金、白銀にて彫れる二羽の雞ぞ出たると云ひ傳へたり。あはれ、夜をこめて告げわたりしは、なかなかに雞のそら音にはあらで、そら雞の鳴く音なりしぞをかしきや。

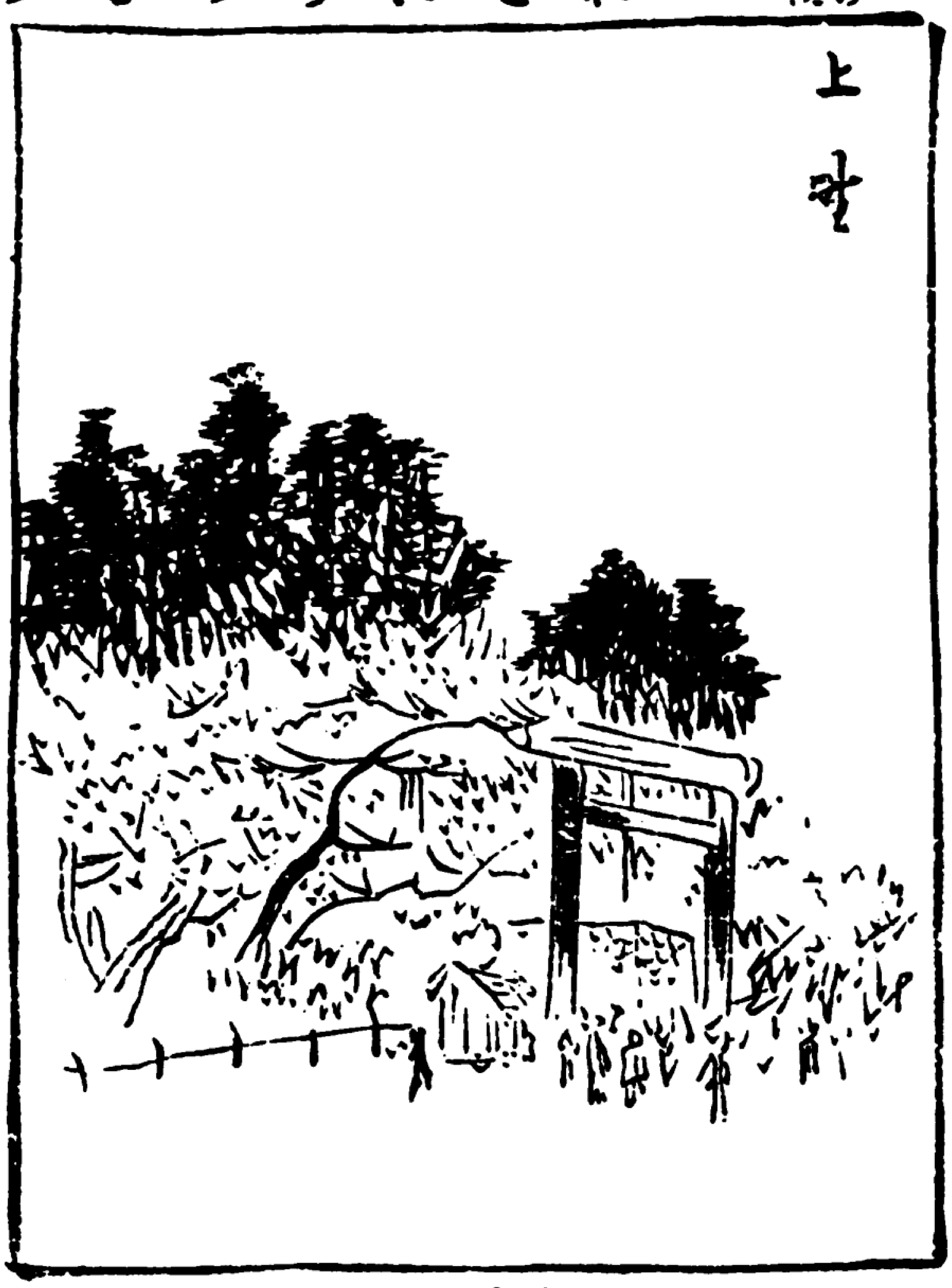
◎青山

赤坂といふ坂の上は、この青山といふ山ぞ連りたる。こゝは、東都の鳥部山にて、大方よき人の墓は、この山に築かれたりけり。こは近き頃より、おくつき所と定められしものなれど、思へばかゝ

るものにも、逃れぬ宿世はありけん。青山といふ文字を見るが、やがて、骨を埋むる所とは推しはからる丶心地してあん。

◎上野

この山に入れば、木立物ふりて、た丶深山に分けのぼりたる心地せらるれば、物騒がしき都の中とは、眼馴れしおのれらにも、つゆ思ひ得ざりけり花さく頃には、都の人の大方は此の山に集ひ來てこ丶の草むら、かしこの木陰に酒くみかはして、深山の面かげは消え失する習ひなれど、咲きにほふ花の梢を遠方より眺むれば、なほ、浮世には程遠き雲の上野とは見やら



る丶なり。

◎柳ばし

神田川の流れ、隅田川に注げる際にか丶れるがこの橋ありけり。程ちかきあたりに、誘ふ風には靡きがちなる者の住めれば、かくは、其の名を主無き宿の柳にちなめるにや。しか思ひゆけば、げにうかれ男の袖にまつはれたる。物思ひがちにむすぼほれたる。あるは、朝戸出の緑のねくたれ髪まで、皆この柳の糸の緑にはもれざりけり。されど、青柳の眉こもれるうなゐより、枯柳の老い朽ちたる嫗まで、みな大方こ丶

ろうきて、よるべ定まらぬは、此の川近き流れの身なればなるべし。あはれ。

◎霞が關

都の春の惜しまれてにや。御空ならねど、この關は設けられたりけり。近きわたりに、春の日の永田といへる町の名もきこえ、さては、霞の衣八重洲町も程遠からずと云ふめれば、あはれ、行く春もこの關にてぞとゞめ得たりけん。さてこそ、關の名の霞を隔てゝ彼方には、咲きをゝる櫻田、さくら川といふ名も世に匂ひたりけれ。

◎鐘が淵

向島の堤を北に進みゆけば、おのづからこの淵の岸に出づべし。こはいにしへ、法源寺の鐘樓崩れて、鐘、この川の底に沈めりしかば、かくは名づけたるなりとぞ。其の後、幾人かこを引わげんとひしめきて、水をくゞりて綱を結び付けんとするに、龍頭のあたり異樣に輝きて、何時も恐ろしきまゝに、え結び果てず、遂にはこの事も思ひとゞまりぬと云ひ傳ふ。今もこゝは水渦卷きて、そゞろに物すごき淵なりけり。かゝる事は、世の人、とくに其の鐘の音にも聞き知り居給ひつらんかし。

女子事務員養成談

私立銀行事務員養成所長　黒岩規

◎女子を事務員に採用して、帳簿の整理をさせることは、婦人の天性から申しましても、誠に格好して居る譯で、周到緻密ある用意と、丁寧親切なる扱ひ方は、比較的男子に優る所があるかと思はれます。

◎現に、遞信省の或る部分では、これを實際に應

用して見た所が、大分成蹟が宜しいので、必要な部分へは、漸次女子を採用するとか申す話を聞きましたが、さし當り、一番困難を感ずるのは、適當な人物、則ち多少事務的素養のある婦人を集めることでございませう。

◎銀行事務員として、男子を養成しますのは、私も多年の經驗と、其の方面の信用がありますから同種の養成所抔には、決して負けぬ丈の確信がありますけれども、女子を養成して見たいといふ事を思ひ立ちましたのは、最早十八年も前の事でございます。爾來いろ〳〵と計畫をして見ましたが何分經驗のないことですから、實は多少躊躇しましたが、漸く大體の腹案も成立ちましたので、兎も角もと、志望者の募集を試みましたのは丁度本年の二月頃でした。

◎すると、少數ながら五六の應募者がありましたから、先づ男子の生徒と共に、授業をして見ますと、思ひしよりは至極好い經過で、これならば、行末隨分面白い結果を得られるであらうと、稍、見込みが立ちました。殊に運算なども、最初はどうあらうかと、少しく懸念でしたが、遣らして見ると存外なもので、到底生半熟の男子抔は、足元にも及びません位でした。

◎それで、一ト通り授教を了りましたから、これを某商店へ紹介して、實務に當らせて見ました、所が、成蹟はたしかに良好で、現にその商店などでは、今後少なくとも、兩三人の女子事務員か欲しいとの注文がありました。

◎さういふ巧合ですから、私も此際女子事務員の養成に身を入れて、一方需用者の爲めに、之れが供給を仕て見たい考へから、いろ〳〵と計畫して此度又々、修學希望者を募集する積りですが、さ

て、困つたことには、適當の志望者が少ないので、これを勸誘し、これを教導して、この目的を達するまでには、まだ〳〵幾多の苦心と、年月を要することゝ覺悟して居ります。

◎先づ、女子教育の全盛時代ともいふべき今日、女子事務員の養成などゝいへば、或は奇を好むといふ樣な批評もありませうが、全體現今流行の海老茶式部連の總てが、悉く高等師範や、女子大學を卒業しますれば、それは〳〵大層結構では御座いませうが、さう〳〵女學者、女先生が出來ましたとて、それが必ずしも、國家の慶事であるや否やと申すことが、大いなる疑問でございまして又實際殘らず口でいふ樣な譯にまゐらぬのが多いやうにも思はれます。

◎そこで、女學者、女先生は暫く措き、普通中位の處で、女子處世の方法として、職業を求めますと、小學校か幼稚園かの教員、若しくは公私立病院の看護婦、其の外裁縫、編物、點茶、挿花、女禮式、割烹等、隨分いろ〳〵と種類がありますけれども、女子が、帳簿整理、事務整理等の新方面に向つて處世の道を講じますのも、亦た極めて適切のことであらうと考へます。況して、需用者の側では、その供給を渴望して居る今日、之を等閑に附するのは、頗る遺憾極まる次第で、私が經驗の淺いにも拘らず、女子事務員の養成に苦心するのも、畢竟はこれが必要を認めたからであります。

◎勿論女子に計算事務を習得させると申しましても、何んでもかでも、事務員にならねばならぬ、給料によりて衣食しなければならぬといふ譯ではありません、計算事務といふものは、別種の才能を要するものでありますから、よし普通以上の技

育を受けました婦人でも、之を習得して家政整理の上に實地應用を試みたならば、その效果は、蓋し、豫想の外にあるであらうと思はれます。

◎勤儉とか、貯蓄とか、やかましい説教を仕ないでも、帳簿を整理して、一家の家政を始末したならば、自然の間に冗費を省き、不生産的支出を節約し〳〵、遂には餘裕を蓄積し、所謂女子の天職ともいふべき、内助の實效を奏することが出來得るであらうと思ひます。唯、これを習得せんとする婦人方が、苟且にも誇大の廣告などに迷はされずよく〳〵思慮を定めて、玉石を混同せぬ様に注意し規律の正しい、確實なる教師を擇ばねばなりません。



いとし子

柳川春葉

(下)

『小母さん用つて何です。』

手を曳かれながら、不思議さうに對手の女を見上げて問ふのは八歳ばかりの愛くるしい男の子で、紺飛白の單物に淺黄唐縮緬の兵子帶を房々と締めてゐる。

連立つのは二十七八にも成らう、美しい丸髷の細君で、夜目にもしるき襟足の白さ、俯き勝に歩いてゐたが、

『一雄さん、貴方は私を知つてゐますか。』
『エ、』
と父見上げて、
『僕は知らない。貴方は誰？』
『私はねえ。』
と言つたが、耐らなくなつて女は袖で顔を蓋ひながら、
『知らう筈が無い、私はお前の生れたばかりで別れたのだもの。』
一雄は猶も不思議さうに見てゐる。
『お前は今年八歳にお成りだねえ。』
『然うです』
『眞實…………親は無くとも子は育つといふが、此夏まけも爲ずに、能く太つて、お父樣に能く似てゐるでなさる。』
手を取つて熟と打眺めた。

『エ、皆然う言ひます。お父樣にもお母樣にも能く似てゐると言ひます。』
『誰が其樣な哀れな事を言つて聞かせるのでしやう、お前はお父樣やお母樣を知つてはゐますまい。』
『僕の生れた時に皆死んで了いました。』
一雄は淀みも無く言つて、
『だから僕は知りません。』
と急に思ひ出したか、
『僕は時々逢ひたいと思ふんだけども、死んだんだから爲方がありませんね。お前は祖父樣の子だと思つてゐろつて何時でも祖父樣は然う言ひます。』
『然う〳〵お前は眞實に祖父樣の子ですよ。何でも仰有る事は背かないやうに爲なければなりません。然うすれば死んだお父樣も、お母樣も何んな

にお喜びか知れません。』
『けれども死んだ人は何にも知りはしない。』
『否、死んでも魂はお前の傍に附いてゐるから、能く知つてゐらつしやる。お前の方では知らなくつても……。』
と言ひかけて又泣くのであつた。
『貴方は誰です、能く皆の事を知つてゐますね。誰なの。』
『妾はお前さんのお母様のお友達です。』
『ア、然うですか。』
一雄は初めて了解して、丁寧に挨拶を爲た。
『可い行儀ですねえ。祖父様のお仕込でしやう。』
『貴方僕の家へ來ませんか。エ、。』
と可懷しげに傍へ寄つて、
『祖父様も喜びますよ。家には德といふ女中と、其から霜といふのと、其つきりだから淋しい。僕は外へ出ればお友達もあるけれど、祖父様は唯一人きりだもの、貴方が來たら屹度喜びます。直に來ませんか。』
『否、私は用があるから、今日は參りますまい。而して祖父様は御丈夫ですか。』
『咳の出るばかり。』
『わ、彼のお咳では定めてお困りなさるだらう。私も御介抱を爲た事がある。今でも猶且お惡いかねえ。』
『小母さん何うしても來ないの、僕は何だか一緒に連れて行きたいな。』
『私も行きたくなくつて何うせう。』
と女は思はず犇と抱き寄せて、
『六年も前から、行きたい〳〵と思ふ心は片時でも離れないけれど、私が行つては惡いから、一生懸命忘れてゐました。今日此所を通るにつけて、

何う諦めても思ひ切れずにお前に逢つて見れば私は……。』

『ヤア貴方は泣いてゐる。』

『何にも知らない者は可哀さうだねえ。出來る事なら一緒に行きたい。又一緒に連れて歸りたい。』

と熱い涙が顔へかゝるので、一雄も何が無しに悲しく成つた。

『僕は何だか小母さんと一緒に居たい。貴方は何處にゐるの。』

『遠い處にゐますよ。』

『遠い處つて何處です、横濱ですか。』

『否、未だ〳〵餘程先です、海を越えたり、山を越えたり、百里も二百里も先から來たのですよ。』

『其樣な處から何を爲に來たのです。』

『貴方に逢はうと思つて。』

一雄は目を丸くして少時見詰めてゐたが、

『嘘々貴方は大嘘吐だよ。其樣な事を言つて僕を欺すんだ。僕は丁と知つてゐます。歸つて祖父樣に聞けば直に解る。』

『ア、其祖父樣に妾の事を言つては可けませんよ。言はなければ時々逢ひに來ましやうけれども、貴方が然ういふと最早逢へなくなるのだからね。』

『其では祖父樣に言つては惡いの。』

『決して言つてはなりません。』

『だつて僕は最早歸らなくつてはならないのだもの、餘り遲くまで戸外に遊んでゐると祖父樣に叱られます。』

女も心着いて顔を揚げ、

『然う〳〵遲くなつたら家で心配なさるだらう疾くお歸りなさい。』

『ぢやあ貴方も歸るの。』

『妾も自分の家へ。』
『僕は可厭だなあ。』
一雄は泣き出しさうに成つて、
『僕は何だか貴方は死んだお母様ぢやあないかと思ふんですよ。然うではないかしら。』
『………。』
『エ、小母さん、僕ば歸るのが可厭に成つて了ふんだもの、萬一惡くなければ家へ來て下さいな。』
女は唇を嚙みしめて、耐性も無く身を慄はしたが、
『一雄！お前は可愛い子だねえ。其程妾を慕ふのは猶且離れない血統であらう。最早妾は言つて了ふが、妾はお前のね。』
と引寄せて何か言はうとしたが、急に思ひ出して、
『お母さんのお友達です。けれども能く覺えてお置きよ、お前のお母様は能く妾に似てゐた方でした。顔も、聲も、而してお前さんの事を思ふのも、眞實に妾の通りだから。』
『ア、。』一雄は只泣いてゐる。
『お前はお亡りなすつたお父様に逢ひたいと思ふたら自分の顔を鏡で見ると逢へる。死んだお母様に逢はふと思ふなら、能く妾の顔を見覺えて置いて、夢になりとも逢つて下さい。貴方のお父様やお母様は何時までも貴方の事を思つてゐますからね。』
祖父様を大事に爲てあげて、而して行末は立派な者に成らなければなりませんよ。さあ私の顔を能く見て置いてね。』
幾度かいとし子の額に唇を當てゝ、潛然と涙を流しだか、漸く時の移るに氣が着いて、
『其では妾は最早歸ります。又其うちに來たら逢ひましやう。』

『小母さん貴方は歸るの。』
『何時まででも居たいけれど、お前の爲に成るまいから、妾は歸ります。』
『明日も來てくれますか。』
一雄は叫んだ。
『又逢へる機會があつたらば。あゝ何か紀念に遣りたいけれども、其んな事を爲たら猶惡からう。一雄さん其では體を大事に爲ておくれ。』
一雄は何にも言はずに縋り付いた。
『さう言ふ事を聞いて疾くお歸りなさい。而して妾の事を話しては可けませんよ。』
又『來るのですか小母さん。』
慌しく人の駈寄るので、女は驚いて闇の方へ飛び退いた。
『坊樣、貴方は此處に何を爲てゐらしつたのです。お家で大相心配してゐらつしやいますから疾くお歸りなさいまし。』
『僕は可厭だよ。』
一雄は下女の手を振離して四邊を見廻したけれども、最早其人の姿は見えぬ。
『何を探しておゐでなさるのです。あゝ今の人は何でございます。』
エ、彼は小母さんだい。』
二足三足闇を追ふたが、可懷しの移香ばかり、彼の小母は何處へか行くぞ、此いとし子を獨殘して。

（完）

福島將軍の夫人（承前）

森林黑猿

福島將軍が彼の單騎旅行を企てゝ、獨逸の伯林府から露國に出でたと云ふ報知のお邸へ屆きました

時、御子息方が夫人に向つて
「お母さま、お父さまは御無事に御歸朝をなさいませうか。」
とお尋ねになつたそうです。スルと夫人は、莞爾とお笑ひになりまして、
「世間のお人は十清九濁な噂をして、今度こそ福島は迚も生きては返れまい抔と被仰つて居なさるそうだが、お父樣は生きて返れない樣な所へ無暗にお出になる樣な無謀なお人では無から、決して心配し無が好い。お父樣が西比利亞を横斷なさるには、三年も五年も前から西比利亞の事情を取調べて置て、それはモウ何處には怎麽云ふ河があつて、此河の水の深さが何米突、何處には怎麽云ふ山があつて、此山には如何なる草木が生へて居るかと云ふ事まで、殘らず書物に依り、人に憑つて見極め、確に單騎旅行が出來ると云ふ事をチャンとお調べになつて、それからお始めになつたのだから、意外な御病氣にでもお罹りになつたら知らぬこと、それでなければ必ず御無事に御歸國なさるに違ひないゆゑ、其樣心配は要りません。和兒們は精出して勉強して、お父さまがお歸りの節は、意外に進歩したとお賞めに預る樣にして呉れないと、此のお母さんが、お父さまに申譯がありませんよ。」
と懇被仰つて御子息方を勵ましつゝ教育をなされて居られたそうで厶います。それゆゑ歸朝されて見ると、前回に演べたる如く、其の邸宅の意外に立派なのみならず、御子息方の教育も行屆かれて居たのにも一驚を吃せられたそうで厶いますが、其位ですから將軍と同郷の各夫人方は、特に福島夫人慰勞會なるものを設けて夫人に贈るに一の紀念品を以てせられました。將軍が外國に在る中、

參謀本部への報告は極めて精密であるが、自宅への音信は、甚だ稀であつて、廿七八年の從軍中、自宅へは前後僅かに二回しか通信がなくて、それで其の通信が頗る面白いので厶います。白紙の眞中へ、唯、

健康

一同自愛せよ

安正

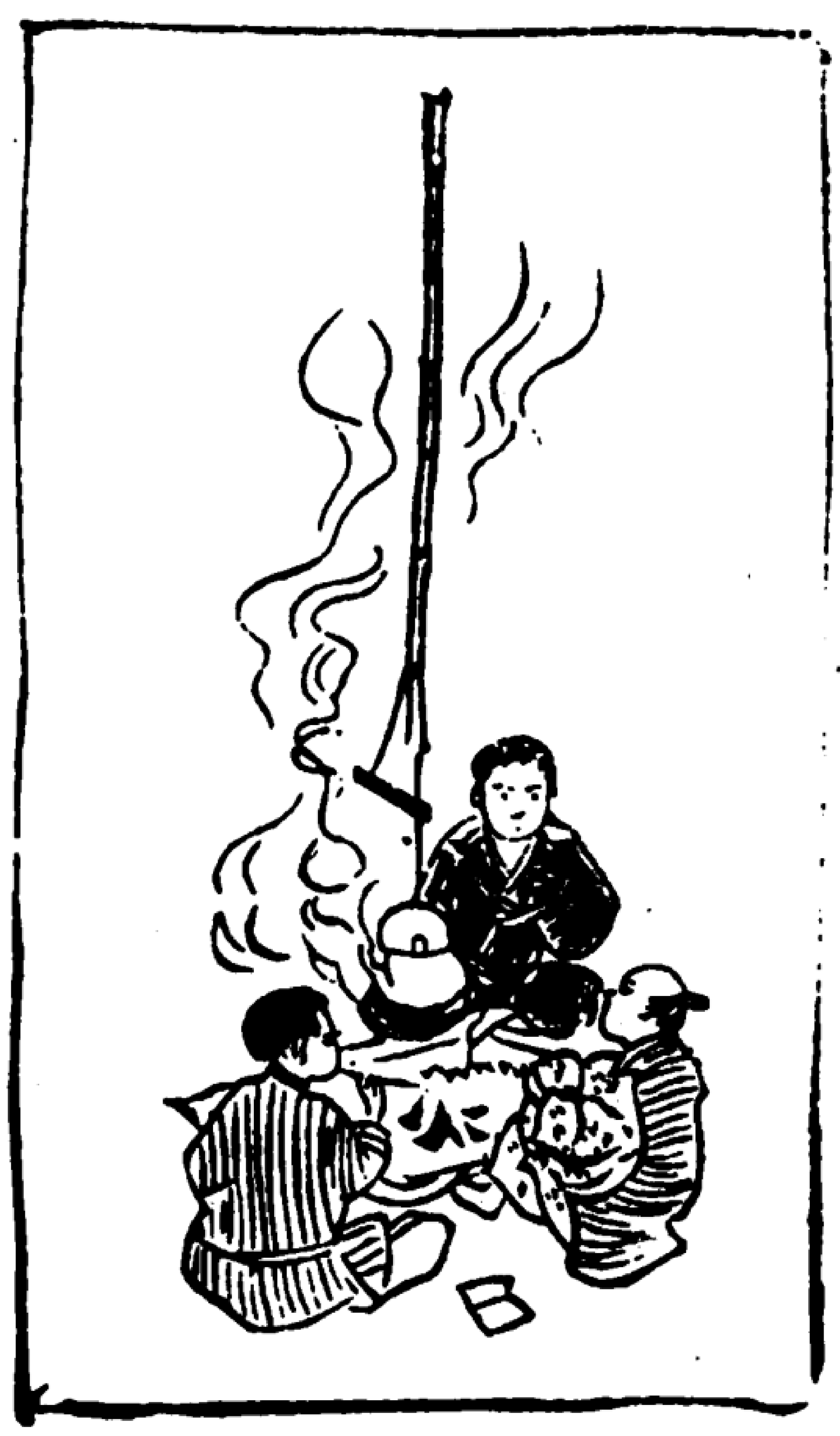
貞子どの

子供等へ

恁う書いてある切りで厶います。そこで御總領の子息正一氏が、

「お母樣、お父樣のお手紙は、寔に淡泊し過ぎて居て、何だか物足りない樣な心地が致します。」

と云ふと貞子夫人は



「決して物足りない事はありません。お父さまが御健康で被在れば、此上の喜びは有ませんので、又妾や和兒們に迄自愛せよと被仰つて下さる、寔に有難いお慈悲深い思召しではないか。軍人と云ふ者は、海外に出て君國の爲に盡して被在れば、妻子の事などはモウお心に懸けるものでない。又お心に懸けるお暇はない。其の御多忙な中で、恁してお慈悲深い御書面を下さつたのだから、實に有難い事で、他のお人が其の妻子に、百萬字の書面をお寄せになるより倘増して、お慈悲の情が僅かの數文字に溢れて居ます。」

と云つてお諭しになつた事があるそうで厶います。恁云ふ賢婦人でありますから、先頃將軍の

舊藩主なる戸田子爵の若様を福島夫人がお預り申して御養育になつた事もありまするが、夫人はお兒が六人あられまして、長男は正一と云はれて(今年廿七才)陸軍の中尉です。其次は二郎(廿五才)次が三郎(十九才)それから四郎(十五才)五郎(九才)一番の末子は女のお子で美佐子と云はれ、今年五才にある寔に愛らしい嬢ちやんで厶いまして、お子供衆が揃ひも揃つて怜悧であらるゝのは、一は天質にも因りませうが、一は福島夫人の家庭教育の好い爲であります。之を思へば人の母たる者、實に其の責任は重且つ大なるもので厶います。(終り)

賣花娘

八木原骸華

(上)

嗚呼悲慘、嗚呼大革命、聞くだに身の毛の竪立ものを、況して其場に、その大革命に、親しく出逢つた人々の心は、迚も想像などの及ぶ所ではない、『願くは子孫、帝王の家に生るゝ勿れ』とは、病床に蜜を求めて、得られなかつた、昔の支那の某帝が喉を絞つた、呻きの聲と聞いては居たが、それにもまして、痛恨の涙を飲みつゝ、大革命の刄の光に送られて、幽魂長に宙宇に迷ひしは、誰であらう、問ふ勿れ彼を、彼は佛王ルイ―十六世で、頃は一千七百九十四年。

昨日まで、萬乘の高御座を占めて、佛蘭西一國の父と仰がれた其君さへ、國民の怒の前には容赦の餘地のなかつものを、況して怨みの府となつて居た貴族、佛人の眼には、虎とも狼とも寫つて居たものを、何で容赦、もし求むるものとしたならば、火の中に氷のそれであつたらう、大革命の手に織り出たれ　錦は、野にも山にも貴族の血で染

め揚げられて居た。

その七月、金をも爍かさん暑さの中を、山のやうに枯草を積み上げた荷馬車の一輛が、ナントの町へとこゝろざして、只ある草原にかゝつた。

『あゝ暑い、べらぼうに暑い日だ、乃公は欲と二人連れだて、まだ辛抱もしやうが、口が開かねへ馬奴が憫然だ、どれ一喫やつて退けべエけエ』

獨語した御者は、馬を駐めて流れる汗を拭つて居たが、不圖馬の足許に眼を注いで。

『變だぞこれは、どうも不思議だ。』

呟き乍ら御者臺を下りて、その草の上に滴々と紅を印して居る不思議なものをたどつた。

紅の滴々は、やがてこの御者を叢に導いた。

アッと叫んだ御者は、殆ど腰を拔かしたのである。

それも其筈、叢の中には氣高い婦人が、數ケ所の傷の爲に朱に染つて、もはや縡切れて居る、のみか、定めてこの不幸ある婦人の兒達であらう、姉弟とも見える二人の子供等は、歸らぬ人と知るや知らずや、この婦人を枕として、心地よげに眠つて居た、薔薇の花にも似たらん頰の色、開かば如何に凉やかならん其眼元、何れを見ても宛然天の使をそのまゝであつた。

全世界の哀れを集めた、この畵幅に對つた御者は、暫時茫然として彳んで居た、が、やがて畵幅の側にひたと寄り添つて、徐に彼等の着て居る衣服を調べたのである。

『さうだ、どうだ乃公の鑑定通りだ、何でも高位の人に違エねエ、氣の毒な事たなア』

叢にどつかり、目をしばたゝき乍ら、腕を組んで思案に暮れて居た御者は　やがて、

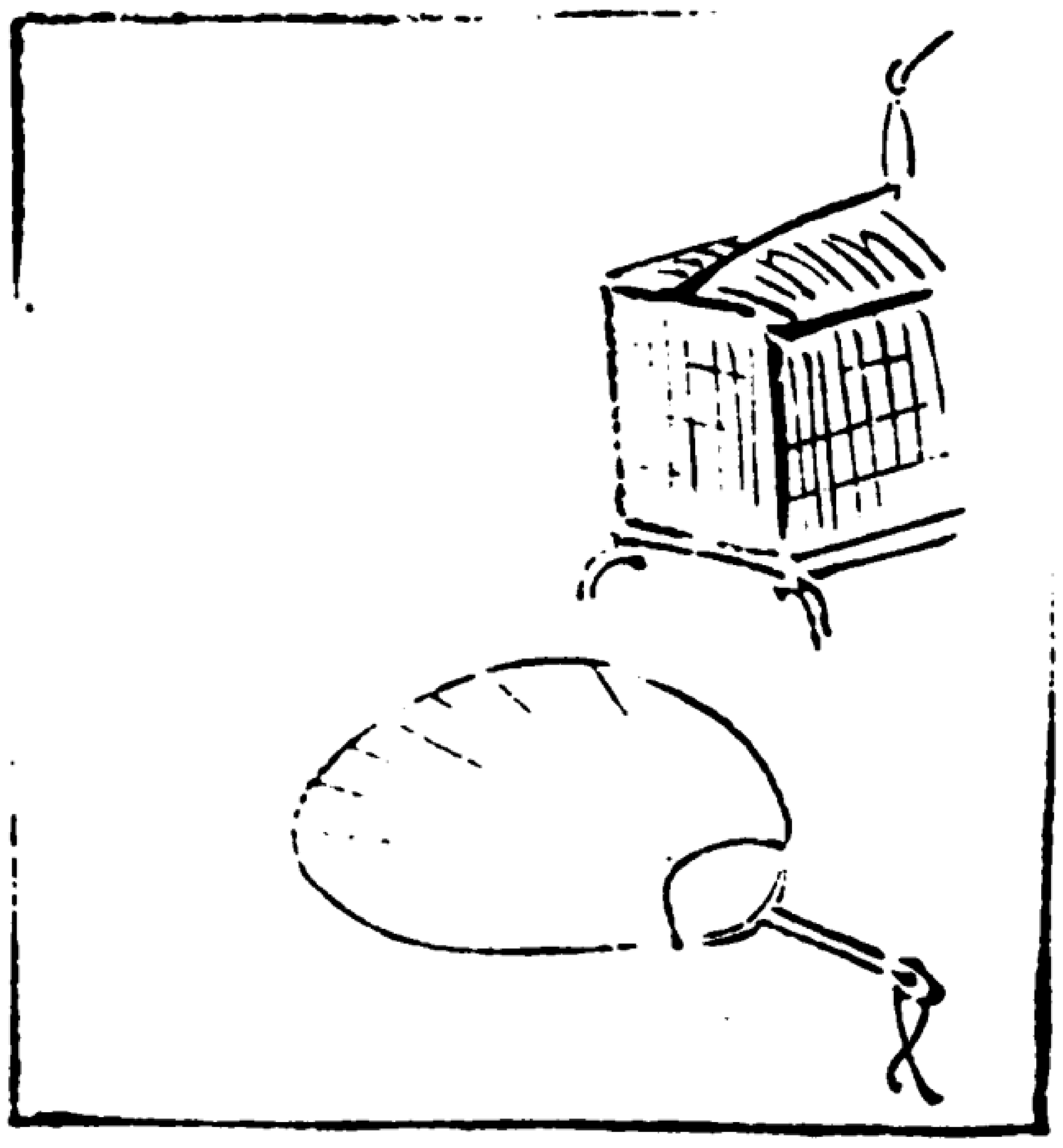
『金がねエたつて、養ふことが出來ねエ、たつて

この儘に抛ッて置きやア、二兒とも餓死するか、捕へられて殺されるか、孰ちにしても命はねエ、今日かうして乃公の目に當つたのも、神樣が乃公に助けろッて、さう云ひなさるのだらう、何の金なんぞ、働けばどうにでもなることだ。』

覺悟の臍を固めた御者は、そつと二人を枯草の上に移して、婦人の屍體は草で深く覆ひ隱し、やがて馬に鞭つた、荷車は蕩々地、砂煙は朦々。

蝶に化したる二兒の夢は、車の振動に破られて、姉は目を覺した、同時に御者臺に居る眞黑に日に燒けた、鬚むしや男を發見して、泣聲を絞つた。

『阿母樣、阿母樣、何處に在つしやるの、何卒來て頂戴な、阿母樣ッてば、阿母樣。』



泣かれて御者は後を向いた。

『これさ、其麼聲を出して泣くもんではねエだよ、御前達の阿母樣わの、今一寸用達しに行きなすッたゝよ、直に歸つて來る、歸つて來るから、泣きなさんなよ、泣くと決して歸つては來なさらねエだから、宜いか孃さん、そりやアさうと、お前達は定めて腹が空つたんべエ、今麪麭を出して遣るから待つが善い。』

と、御者は車に縛り附けて置いた、辯當箱から、眞黑な百姓麪麭の二片を取り出して。

『サア遠慮せずに喰つたが善いだよ。』

二兒に與へた、が、手を出しさうにもせぬ。

御者は一人で頷いて。

『至理だ、が、孃さん死ぬにやアましだんべエか

ら、忍耐して喰わッせェ』

叱るやうに言ひ聞かせて、其麪麭を姉の膝の上へ置かうとした御者は、この姉娘の腕から血潮の出て居るのに氣が注いて。

『あゝこれ／＼孃さん、お前も怪我をして居さつしやるじやアねエか、風が這入ると惡るい、ちよくり乃公が縛つて遣るべエよ、』

古びた服のポッケットから、醬油で煮染めたやうなハンカチーフを取り出して、その傷所を捲いたのである、この親切に初めて安心した面地で。

『では叔父さん、御前は盜賊じやアないのね、私や、この弟のカードを殺しはしないのね。』

鶯は玉を轉ばしたのである、此時まで餘りの恐しさに殆ど泣くことも出來なかつた、弟のカードはその姉のメレと顏を見合せたのである。

御者は手をメレの肩に置いて。

『殺すッ、滅相なこと、何でこの叔父さんが御前達のやうな可愛い、罪のねエ好兒を殺すなんて其、其、其麼ことが出來るものか、まア好いやア安心して其麪包を喰べたが好いだよ、』

態と二兒に脊を向けて、徐に馬を歩ました。

やゝあつて、御者は問ひかけた。

『御前達は幾歲になんなさる、エ孃さん、坊ちやん、フヽム、姉さんが七歲で、お前が五歲だと、可憫に、が、まア一體お前達は何して、叢の中なんかに寢て居なすつたのだ、エ孃さんてこの叔父さんに話して聞かせるが好い。』

姉のメレは徐にその愛くるしい口を開いて。

『あのね叔父さん、私も善くは覺えて居ないけれど、昨夜遲くなつてから、阿母樣が、よく眠つて居たのを、メレ、メレ、と搖ぶり起して、私と弟のカードに着物を着替させて、外へ出て暗

闇を急いで歩いて居ると、叔父さん、向ふの方から眞黒な人が、ピカピカするものを振りわげて來て、阿母樣を斬らうとするから、私はね叔父さん、阿母樣を斬るなら、其代りに私を斬つてお呉れッて、阿母樣を私の身體で……、さうすると黑い人は、煩い奴だ、邪魔だどけッて、いきなり私の腕を突いて、斯麼に傷をつけたのよ、だから私は愕然して其處へ倒れちまッたが、もうそれッきり、後のことは知らないのよ。』

怜悧さうに見えても、まだ七歳の稚兒である、廻らぬ舌で、考へ〳〵辛う〳〵遭難の顚末を物語つた、弟も昨宵の事を思ひ出したか、急に大聲を揚げて泣き出したのである。

『カードさん、好い兒だからよ、よカードさん、好い兒といふものは、泣くものではありません、泣くと此叔父さんに叱られますよ、阿母樣の所へ連れて行つて下さらないのよ、好いかいカードさん、泣くんじやありませんよ。』

メレはカードを膝元へ引き寄せて、頻りに慰めて、困じ果てゝ居たのである。

御者は鬼の目に涙を浮べて。

『ドレ、阿母樣の所へ連れて行つて遣るべエから、兩兒共靜にして居るが好いだ。』

御者は再び鞭を揚げたのである、車は何時かナントの町へ入つたのである、と、町の中程には蟻の樣に人が集つて居る、で、御者は馬車臺から下りて、馬の口を取つて、群集の事を徐行したのである、群集の目は一枚の高札に集つて居たが、目に一丁の文字もない御者は、見向きもせずに行き過ぎて、刹那に御者を呼び止めた者がある。

文林

浦鶴鳴月　東久世通禧

浦遠くしほみはれたるつきかけに
そらゆくたつも聲たてつなり

衛生會　佐々木高行

嬉しくもわひにける哉すこやかに
いのちを保つみちもあるよに

朝秋風　津輕承昭

虫の音はまた夜をのこす朝ほらけ
わきかせたちぬにはの淺茅生

月下潮　水野忠敬

ほにいてし尾花か袖をてらすかな
露おくのへのあきの夜のつき

野花留人　宮地嚴夫

百くさの花野のあきのからにしき
たちとゝまりて見ぬ人ぞなき

隣朝顔　北郷久政

露ふかき竹のまかきのすきまより
みゆるとなりのあさかほの花

虫聲　芝葛鎮

遠くなり近くきこえておもしろし
かせふきすさふにはの虫のね

月下萩　小出粲

咲花のいろはけたれててるつきの
ひかりまはゆき露のはきはら

秋園　千葉胤明

松はかりうゑたる園にさきいてゝ
あきを見せたる野菊ひともと

橋上霧　遠山英一

霧こめてはしは見えねと行かひの
くるまのおとの絶えす聞ゆる

海邊月　　下田春與

こよろきのいその松風おとふけて
月にしつまる沖つしら浪

曉露　　近衛貞子

ありあけのつきの光そやとりける
露にうるほふにはのこけちに

夜殘暑　　本多芳子

秋たてとのこる暑さにくれたけの
ふしとのまとはさゝてねに鳬

庭秋草　　南郷柳子

にはの面に一もとうゑしあき萩の
所せきまてはなさきにけり

旅宿鹿　　松平健子

われはかりかなしきくさの枕そと
思へは夜たゝしかもなくなり

くれゆく空に月いてたり　日野西廣子

足曳のやまもとくらくなるかへに
くも間はなれて月は出にけり

海眺望　　田中竹子

朝きりのはるゝまに〳〵和田の原
おきのしら帆の數そ添ひゆく

燐寸　　常磐井文子

すりつけきつくる家さへ多きかな
外くにまてもてはやされつゝ

森露　　中村禮子

虫のねもよはり〳〵てひるも猶
おくつゆ寒しもりのしたみち

葛風　　田中瀧子

やれ垣にはひまつはれる葛のはの
風にかへるもさひしかりけり

逍散　　服部磯子

昨日けふ招くちからもなくなりて
　かせにちりゆく野へのを逍

名所月　　下田壽興

月影のさやけきまゝに
　そことなくあくがれいで
伊豆の海や大瀬のさきの
　ありそわにわが立ち見れば
このさきに遠くもあらず
　このいそに近くもあらず
みぎりべのうなひのかたは
　龍神のわだかまれること
ひだりべのいそわのかたは
　龍神のよこほれるごと
おのもおのもあひむきたちて
　月影をあらそふなせり
よこほれる龍と見ゆるは
　水浦の三保のさきかも
わだかまる龍と見ゆるぞ
　内浦のあの島かも
其の島によする白浪
　其のさきになびく白雲
雲のまにいでつかくれつ
　波のまにうきつしづみつ
さまざまにあがめかはらひ
　み所のおほせのさきに
月影をながめしおれば
　あかずもあるかな



野べの兒

清水橘村

雲の衣を引まとひ
女神が乘れる白駒の
闇より空に入ると見て
目覺し兒こそ崇とけれ

搖籃の褥をぬけいでゝ
駒の行衞やたづぬらむ
野に小蜂飛ぶ白薔薇の
蔭にぞ稚子は來りたる

殘んの星か白露の
胸に滿ち來る朝ばらけ
何とはなしに微笑める
眼にうるはしき光あり

かゝれば草の虫すらも
足のほとりに啼きめぐり
茂れる森の巣をいでゝ
雉の山鳩空に飛ぶ

樹立ぬ原に住むと云ふ
獅子も馴れくる人の子の
清き野歌の聲を聞き
鷲かけり去る雲の前

青き香高き草を食む
村の牧場の小羊に
しばし化したる　狼の
形も今はかくれたり

流るゝ自然の眞清水を
稚子の惡魔に乞へばとて

火焔の油唇の
花の蕾にうたがむや
露にちる薔薇の花びらの
草より蝶に生れつゝ
羽袖縫ひおふ野べの舞ひ
兒は戯むるゝ夏の風
吹かれて輕く飄り
み空に入りし蝶のむれ
野には殘りぬ白綾の
衣のみ草にゆらぎつゝ





九月五日兼題

名所月

天　肥後國玉名郡木葉村　坂本・美代子

月よゝしよゝしとめてむみよしの
よしのゝやまのあきのよのつき

評、同じ詞をうち重ねたる。力ありて調高し。

地　肥後國菊池郡城北村　鶴田貞子

淵はせとかはりゆけともわすかかは
むかしなからにすめるつきかけ

評、感情ふかし。

人

駿河國富士郡鷹岡村　佐野みさ子
すみた川せきやのさともなのみにて
かたふくつきはとゝめさりけり

評、所がらおもしろし。

甲之部

肥後　佐々小琴子
水しまのおきのしほかせおとたえて
野さかのうらのつきのさやけき

埼玉　前野ふさ子
からさきのまつふく風にきりはれて
つきすみわたるせたのなかはし

大阪　桝田益子
は東やまはつかにてらすゆふ月の
ひかりにみゆるわきのいろかな

伊豫　吉良貞子
おもしろき笛の音もしてふけわたる
つきかけきよしあしからのやま

東京　三好珍子
なくむしの聲さへにほふこゝちして
つきかけきよしみやきのゝはら

東京　片山ふみ子
かけとむるしからみもかなみつ庭も
きよたきかはのわきの夜のつき

肥後　千知波橋子
夜もすからくもらぬ月のかゝみやま
こゝろうつしてみぬひとそなき

和泉　藤原菫子
てる影のわきてさやけきかゝみやま
くもらぬつきそこゝろうつれる

京都　坪内りき
清みかたなみちしつかにわきのよの
つきをものせてわたるふなひと

東京 北島功子

名ところはさはにあれともかゝみ山
澄みてそまされあきの夜のつき

肥後 澤田春子

影きよきつきにうかれてつまことを
しらへあかしのあきのよのつき

乙之部

なかれゆく水をそらとやすむつきの　東京 安井あや子
しらなみよするそてのうらかな

すみた川さゝなみわけてこくふねを　安藝 和住千鶴
さやけくてらせあきの夜のつき

すみの江の岸邊をあらふさゝなみも　栃木 青木たま子
さやかに見ゆるあきの夜のつき

すまの浦にしほくむあまのぬれ衣も　東京 山口みな子
ほすまもあらてつきそやとれる

住のえのはまのまつかせおとふけて　東京 戸塚鐵子
てりこそわたれあきの夜のつき

おもしろく月はてらせりまつしまの　大阪 中館やう子
はなれ小しまのかけもさやかに

ふくろまて浦つたひしてなかめまし　大阪 伊勢村春子
名さへあかしのあきの夜のつき

すまの浦や更ゆくまゝにかけきよく　東京 新海わか子
なみ路をわたるあきの夜のつき

なくしかのこゑもかすかの山の端に　大阪 大阪谷新子
てるかけさひしあきの夜のつき

さらぬたにさひしきものをみかさ山　大阪 伊勢村花子
つきすむ夜半のさをしかのこゑ

ひとはいさつきかけきよき秋の夜の　大分 菊池富子
あはれはふかしふかくさのさと

和歌のうらなみの月かけことの葉に　三河 永井さい子
かけて見る夜そたのしかりける

すまの浦やうき雲はれてこのゆふへ　岐阜 佐藤そう子
さやけきつきのかけを見るかな

いその上ふるきむかしをしのふかな　肥後 野口靜子
かさきのやまのつきをみる夜は

あらしふく生駒のやまのきりはれて　肥後 野口信子
つきかけきよしあきしのゝさと

さらしなや姨すてやまのつきみれは　肥後 佐々有郷子
むかしのかけもしのはるゝかな

すみの江のまつふく風にくもはれて　山口 田村多豆子
こすゑにすめるあきの夜のつき

秋のよのつきにあそひてよもすから　肥後 德永廣子
あかしのうらのあけほのゝそら

てる月のかつらのかはにさをさして　松山 上原のふ子
かけをくたけるふねもありけり

あかし潟うらかせわたるまつか根に　埼玉 横田秋子
つきかけよせてかへるなみかな

しなのちやゆふきりはれて久かたの　筑後 鏡山增代子
つきかけきよしさらしなのやま

よしの山むかしおもへはてるつきも
こゝろつからやくもりかちなる　筑後　武田[illegible]子

すまの浦やちりもくもらぬ月かけに
さやかに見ゆるあはちしまやま　但馬　田尻保代子

見んひとのこゝろのくまも寫さまし
かゝみのやまのあさのよのつき　長崎　八尾いへ子

須磨の浦やいそふく風にきりはれて
なみまにいつるつきのさやけさ　東京　椎野ぬき子

かせのおとは松にのこりてすみの江の
なみにうつろふつきのさやけさ　肥後　德永雪枝子

見る人のこゝろそうつるかゝみやま
ひかりさやけきあきのよのつき　肥後　坂本美智子

まつかせにさきのはゝれて明石かた
なみ間にうかふつきのさやけさ　東京　近澤和子

やはすやまふりさけ見れは弓はりの
つきはくもまたいてゝすみけり　熊本　志力圓女

すまあかしうらつたひして月みれは
あきのなかよもみじかゝりけり　三河　三宅中枝子

限もなきつきかけきよしさよふけて
あきかせわたるさらしなのさと　岐阜　吉村せい子

たちこめし三保の夕きりはれゆきて
そてしのうらにのほるつきかけ　東京　黒澤松枝子

まつ島やまつのはこしにかけ見ゐて
なみちをわたるつきのさやけさ　札幌　山田嫦美子

千代のかけなみにうかへて住よしの
まつにかゝれるあきのよのつき　札幌　山田靜子

いつくしまわた殿てらすつきかけも　和歌山　長尾小榮子
なみにくたけてたまとちりけり

いひしらぬあはれそふかき松しまや
をしまさやかにてらすつきかけ　大隅　山田いれ子

はし立のまつのかすさへみゆるまて
さやかにわたるあきのよのつき　大隅　山田よれ子

もしほやくけふりもこゐて影きよき
つきこそすめる三保のかみつち　東京　牛山素子

丙之部

打よするまに〱かけもくたけけり
すみ田かはらのなみのうへの月　東京　安井きやう子

秋の夜のふけゆくまにそかけすみて
かゝみとみゆるさらしなのつき　東京　平尾あさ子

もゝ千とせまつ風きよくすむつきの
かけをよせくる須磨のうらなみ　周防　杉瀧子

月かけはおなしひかりときくものを
なほしのはるゝをはすてのやま　青森　柿崎秀子

しま山もてにとるはかりみゆるなり
すまのうらわのあきのよのつき　肥後　德永眞澄子

花をみしはるのけしきそしのはるゝ
よし野のやまのあきのよのつき　肥後　德永萬壽子

夕されはまねく尾はなのかけきよく
くまなくてらすむさし野のつき　肥後　德永多瑠子

すまの浦名にまさりてそすむつきに
おきのしら帆のかすしられける　肥後　德氷弘子

わかの浦やことのはくさも匂ふかな　肥後　佐藤玄子
なみにうかへるあきのよのつき

さらしなや田ことにうつる月かけを
わかふるさとのひとや見るらむ　長野　松澤まつ子

眺めやるこゝろのはてそなりにけり
あかしのうらにすめるつきかけ　東京　吾妻ちか子

あきの夜はかすまぬそらもおも白く
かけふけわたるみよし野のつき　東京　矢野やす子

しもとゆふかつらき山もあきふけて
つきは夜ことに照りまさるかな　東京　片山あや子

はれわたるかゝみのやまの月みれは
いまもむかしをおもほゆるかな　東京　川竹松子

かゝみとも見るへかりけり墨の江の
なみまにやとるあきのよのつき　大阪　大阪谷信子

露になくむしのこゑ〱さえわたり
いとゝくまなきむさしのゝつき　和歌山　瀬戸榮子

すみわたる月にうかるゝあきの夜は
そゝろにおもふさらしなのさと　岩代　大川ふく子

さしのほる月にきらめくわたつみの
あかぬなかめやたけしはのうら　東京　松村あさ子

わかの浦やまつかせたえて波間より
たかくものほるあきの夜のつき　大防　橋本しか子

秋くれはいとゝさひしきわかの浦に
こよひそみつるいさよひのつき　大阪　古山たれ子

棹させはかけやみたれんあかしかた
なみもしつけきもちの夜のつき　伊豫　竹村竹里子

いしやまの月さやかなるあきのよに
なのりてすくるかりのひとつら　相洲　中島富美子

さらしなや田ことの月をめつる夜は　伊勢　池田梅子

わかふるさともわすれけるかな

つくはれのこのもかのもの雲はれて
はてなくてらすむさし野のつき　肥後　坂本登子

近江路やてりそふつきにかけ見えて
かたゝにおつるかりのひとつら　相模　岩橋花子

おほ原やおほろのしみのつきすみて
あきも夜さむになりにけるかな　埼玉　横田音羽子

よし野山はなにたくへて見めてまし
かけさやかなるあきのよのつき　山口　村上操子

よるもなほにしき見よとか宮城野の
小はきかつゆにやとるつきかけ　長崎　内藤美與子

秋もやゝもなかのつきのきよみかた
みほのちもとのまつもよみえん　駿河　佐野きやう子

秋かせもみやこにまさるさむしろの
つきをともなるさらしなのさと　東京　山本梓子

あま人もなこりをしくやなかむらん
すまのうらわのみしかよのつき　東京　椎野清子

うちよする波のはなさへきらめきて
すまのうらわにすめるつきかな　東京　椎野鋭子

くたかれしたまとみるまてすむ月の
かけもすゝしきたこのうらなみ　東京　椎野薫子

名におへるあかしのうらの波にしも
ひかりをそふるあきのよの月　東京　椎野秀子

わき妹子とさやけき月をよもすから
あかしのうらにみんよしもかな　肥後　坂本竹子

なにおへるあふみの海はしろかれの
波にかゝよふつきのさやけさ　東京　高柳榮子

からさきの松ふくかせのおとたにて　くも間ないつるつきのさやけさ　茨城　内田さた子

あふみ路やいし山てらのあきのつき　さやかにいつるかけなみるかな　茨城　荒野たに子

ゐたくみの筆もおよはし三保の浦の　つきにふしみる夜はのけしきは　三河　河合ぬひ子

はりま路はひろは名ところよろは又　すまにあかしにつきにうかれつ　三河　服部鷹子

おはすてのやまよりいてし月なみて　よたゝなくさむわかこゝろかな　三河　服部正子

さやかなる月のてらせるかゝみやま　こよひはひるのこゝちこそすれ　三河　本多きさ子

松しまのまつもさやかに見ゆるかな　なみ路はなるゝつきのひかりに　東京　大木光子

あきふかき加茂の河瀬のつき見ても　すまゝほしきはみやこなりけり　廣島　衣笠澄子

あまのはらうき雲はれていくちさと　ひかりそへけんかすか野のつき　埼玉　前野壽賀子

くもりなきゝよみか浦にうら〳〵と　すみわたりけりあきのよのつき　茨城　小沼かの子

まとゐして月みるひとのおほきかな　加茂のかはらのところところに　大隅　稻垣まさ子

もちの月まとかにすみてこかれなす　なみまにうかふあはちしまやま　東京　林　環子

あかしかた今宵に似たるつきの夜は　亡きわかともとゝもにめてしな　長門　岩田璋子

郊外散步

天

長崎市新町十三番地　八尾いへ子

朝な〳〵賤の女が桔梗かるかや、女郎花と賣歩くを見ては、春遊びせし野邊の思ひ出らるゝ折柄、親しき友どちふたりみたり、若菜つみつるあたりすゞろあるきせばやとそゝのかし來つれば、うれしとも嬉敷、いざとて出立つ。空はうき霧あとなう晴渡り、そよ吹風も心地よし。道すがら賤が軒端にまつはるつたかづらの薄く色つきたるを見ては、まづ秋のあはれを思ひそめ、朝顔のやれ垣にしぼみたるは、朝の程なりせばといと口をし。とんぼおふ子に行手妨げられ、あるはめだかとらへんとてや、七ッ八ッ計りの子らが、乳ほしとてむつかるみどり子を脊おひつゝ、いさゝ小川にたはむるゝ樣のあやうげあるを、立留まり見ては氣もおかるゝよ。やうやう心さす野邊に來れば、龍田姫のよをこめてのすさびにやあらん、見渡す限り花の錦のむしろしきたらんやうにて、一ッみどりと見しあたり

とおもほえず。風になびく薄は妾らを招くかと思はれてをかしく、枝もとをゝに咲ける萩の花の姿ゆかしきに、そこかしこなまめける女郎花のあたりに、たがぬぎすてけんと覺ゆる迄ゆかりも深き藤袴の匂へる、花なればこそとがむる人もなけれ、珍らかなる花のとり〲時を得顔に匂へる樣、得もいはれず、君が言の葉の花もそへ玉へと友のうながせど、拙き身は千草の花に比べん言の葉もとみには出でず。今かく花の色々心にとめおき、やがてこそなど打興じ、足のむきたるまゝそこはかとなう行き行くほどにいつしか日は西の山のはに入りはてぬ。一むらしげき草の蔭に忍びねにあく松虫の聲すなり、われかといひて立よれば、あらずとにや鳴き止みたるぞいとにくし。友の鈴虫得たりとほこりかに示すを、名さへ知れぬ虫ぞと笑へばからくもとらへしをと腹立しげにふり捨てぬ。それ見ずや振捨てもならぬぞあかしなるといへば、げにとて皆笑ふ。あはれ男の子ならましかば、今宵はここにあかして虫にも月にも心やらんと思ふもかひなく、徒らに野守りの身こそうらやまれけれ。野らは霞の内にすみれ咲春をのみたのしきものと思ひたれど、今日のあれにはまた及ぶべくもあらずかし。

大君の露のあまねかる世は、わがよの秋も更ぬまに、奥深き文の林にわけ入り、この千草の花にもはぢざる程の、目出度花を千とせにははせばやと、はじめておこたりのゆめをさましつるも、すゞろありきのかひありけり。

評、才情うるはしく、趣向おもしろくして、いとめでたし。

地

長崎市櫻町廿番地　内藤美與子

花賣少女が籠に見出でつる、草花のいろ〲なるに、野遊は盛りなめりと、はしき妹等と袖かいつらねて、そゞろありきす。思ひあればにや。いつしか穗にあらはるゝ花薄、主知らぬ香に匂ふ藤ばかまの床しきに、萩のらうたき、女郎花のなまめきたる、刈萱のむくつけき、きちかうの愛らしげなる、翠な

る一つ草とぞ見てしも、いろ〳〵に匂ひ出たるは、巧なる花のむしろ打敷たらん様にて、いとをかし。露ならぬ心も千々に亂れて、何れをかわきて折ましと心惑るゝよ。實に古人の思ひたはれんと言ひしもうべありけり。女郎花はよし多かるとも、女の身は後めたうもならじと、名に愛でゝ先づ手折りぬ或は萩、或は蘭と、とり〴〵の品さだめに打興じ短き日の殊更に短しとかこたるゝも、をかしきすさびなりかし。遠山の木々の紅葉に、入日花やかにうつろうさま、鳥の塒に急ぐ杯、淸少納言の君の記されたるもかゝりけんと覺えて愛たし。限なきをのみ愛づるものかはと、双ケ岡の法師のいひけん、片破月のさしいでたるに、雁の一つら渡るも、一きは哀れを添へたり。いざまからんと言へれど、惜しげに招く尾花の袖も拂ひ難う、葛の恨み顔なるさへわあるに、人松虫の鳴いでたる、しかすがに心引るれど、幼き妹の家路おもふもびんなしと、宿りもせまほしき、秋の野より歸り路につきぬ。ついて思ひ出さるゝは、過つる年學の庭に敎草摘みつる頃、わきて睦魂合へる露子の君と、寫生の料にとて、花咲野邊に袖ふりはへて行きにしことなりけり。其折彼君の言はぬ色なるは嬉しけれど、女郎花のたはれたらんやうにて、實なきは愛づべきかは。同じ色ある野菊のつくろはぬさまこそてよなけれと、眺め入給ひしさまよ。心高き君はさもありなんとこそ思ひしが、はかなく消え玉ひし後は年毎に匂へる菊は手向の花とありにしなと思へば、秋風も身に泌みて、分てし露かあらぬか、袖の怪しきまでそぼちぬるは。

評、秋の野のさま〴〵なる景色をいろどりたる筆の跡、最とあはれふかし。

人

本鄕區丸山福山十　名木山勝子

眞柴垣に纏はりて、紅、紫、白、淺、黃など様々の朝顔、いと大輪なるが、此程漸々丈さへ延びて、綠の葉は垣を隱す迄に蔓りぬ。そゞろに見捨難くて、花數ふる折しも「姉君よ姉君よ」と弟の聲す。「けふは

塵計りの雲もなく、涼しき風さへそよぎて、眞に得難き日曜なれば、いでや大宮わたり散歩し給ひなんや」と、「我もさ思ひ居りぬ。いざ然らば」とさそく誘ひて、仕度調へステーションに急ぎ行きぬ。朝露含む上野の森を後にせし頃は、遠近の紫だちたる丘も、濃き綠となりて、うらゝかなる朝日は硝窓を通しつ。病の爲學びやにも赴かでありし身は大宮の町に着きし時、殊に去年此處に運動會ものされし事の思ひ出されて」心地よき蟬の聲をきゝつゝ、「氷川神社のみ前にたどり行く。物ふりたる木立、何となう尊く覺えて、心より額かるゝも宜なりや。蕾多くもてる野菊のそこゝ匂へるも愛らし萬松樓とかいへるにつきぬ。こゞは我等が爲に旭の旗揭げ迎へつ。柴折戸の前にて競爭などを催にせりき。今も其折のやうに、秋草などわたりに咲けども、たゞ數多の親しき友はあらで、弟とふたりのみあり。紫に白に唐錦にまがふ萩は、今しも盛なり。友に送らんと一枝手折りつ。弟は寫生の料にとて高く低く優しげに招ける尾花のわたり走り廻りつゝ、舞ふ蝴蝶追ふ。丸木を截りて腰掛としたるに、何やら歌めきたるものゑりつけられたる、あはれみやびならずや。こゝは萩多く游も繁くあまつさへ小松の蔭なればいと涼し。ひるげしたためて心の行く限り彼方此方そゞろありきしつ。「此花は父の好ませ給ふものよ彼虫は幼き弟の喜ぶものよ」と、おのが家づとさへ、たづさへてもとの道にもどりぬ」美しき夕日は我等の影を後にひきて、彼方の森をてらせり。鍬肩にしたる農夫は、あぜ道づたひやうやうに遠く小さくなりぬ。折柄うしろの林よりひぐらしの聲われらを送るがごとく。

評、敍景敍情共にとゝのひて、わざとらしからぬところ甚だ宜し。

秀逸之部

長門　岩田章子

枕草紙にも、秋は夕暮とぞ記されたる、げにやと、妾は小川の堤に

添ひて、そゞろあるきつゝ領きぬ。山は紅葉に黄に初秋を裝ひ、そが麓を回り來れる水は、岸の青柳の影を碎き、小石に玉散らし、さらさらと音を立てゝ、わが足下に秋の歌奏で行く。今しも、日は山端にうつろはんとし、金色の雲夕映に紅を流し、紅葉の山々照り添ひて、一しほ錦と燃ゆ、苅萱しどろの野は、夕風に海のごと波立ちつ。あな美しき秋の夕暮。誰か秋をばあはれとやは云ふ。彌生の曙花を飾り、緑滴る若葉に夏を過し、今こそ實を結んで美しき秋に散る。何の恨かある。人は無情とも見む。此華やかなる臨終を。妾は、是こそ天地の吾々に示せる教訓とぞ思ふ、などて悲しき歌のあるべきや。

あれ見よ、低に勇む鈴の音、馬子の歌、招く穗の中なる川添ひの堤に近き一つ家の軒端、豊かに上る夕炊の烟見よや。續いて、今日の業終へ早く樂しき家路につけよと告げて響く村寺の鐘、歸り行くをのこをんなの一群二群。いでや、母待ちまさむ、又來ん時の友たれな、さらば靜けき秋の夕暮よ。

虫は道邊の千草にすだきて野菊咲亂れて白し。

評、勇ましく潔よく出來たり。

東京　山本梓子

日ごろの雨やうやうはれて、空のけしき清らなるに、殘るあつさは、なほいみじきものから、軒の松かぜさすがに秋の聲して、折からをかしき夕ぐれの、そゞろ心のあくがれまほしう、父君いざなひまゐらせて、廣き野べのほとりにいでつ。近きさとわの夕けぶり、たな引あひて、きりわたれるやうなるも、いとあはれに、むしのそこはかとみだれ、小かやふくかぜの、そよ音たつるなどいふばかりなし。月あらましかば、いかに、むしのこゑも、草ばの露も、もてはやされましをとつぶやけば、いかでさのみやはあらむ。くらきにさぐる虫のねも、いとあはれふかきをとのたまふ。小川の水のむせぶ音近く聞ゆるに、たどり行きて、しばしやすらふほど、笛竹のれのながれきて、むしのしらべにあはせたる。たがすさびにやと、ゆかしかりき。風ひやゝかになりもてゆくに、うちみやれば、星の影まれに、雲まよひて、又もや雨さそひがほなるもゆゝしく、笠取の山のあたりにもあられば、降出てなばびんなからんとて、歸らむとするに、ねをなく虫は、いとゞしげさまさりぬ。鈴虫のふりすてがたきもわりなしや。我がとて行とぶらひし秋の野の、人まつむしのねこそわすれね、などかへりて後も思ひつゞけてなん。はへなきことの葉かきつみしを、人みぬうちにとくやりてまし。

評、筆致の氣骨に沁むこゝちす。

大阪　桝田登子

秋立初し空のけしき、雲のたゝずまひは、さる物にて、風の音なひ、露の亂れのあはれさに、深染の夕つげて、雲井の雁のかきつられつゝ、そこはかとなく、そゞろに北野邊りへあくがれ出でぬ。涼しの袖にふき通ふ、風の信りにさを鹿の聲も聞ゆ、白妙に紅ゐに、とばりはりたらんやうなる萩はしき秋が花妻、うしろめだう立る女郎花、誰がぬぎすてし藤袴、ゆかりの色の桔梗、苅萱、あはれにかなしき露の撫子、恨み顔なる葛かつら、袖にするべき月草、雞冠花のとりどり、道もせに咲亞みたるさへあるに、朝良の朝めよろしき、夕良の口惜しからぬも生ひそひて、風に浪よる尾花が袂には、思ひもとゞまり、招くに似たる糸薄には、心もひかるゝ花野のにしきは、何にたとへん物もなく、立田姫もおもてふせつべく、いひ知らずあはれになん。また爰に高くそびえたるは、是なん凌雲閣なりける。昇て見渡ば賑はしき市ぬちは、眼下につらなり、大城の松、四天王のあらゝぎ、手にとる如く、東は生駒、志貴、十三峠、南は高野、紀路の山、北は池田山、箕面山、西は摩耶、六甲山を見さげ、天保山、しりなし川、堺の海、高師の濱など遙に見ゆ。げに、雲を凌ぐてふ名も、

うべなはれてゝいと心行ながめ成けり。やう〳〵暮れ果ぬれば、雲井を翅る雁の數さへ、見はへきさやけき桂の光りは、みづ山に匂ひ、玉なしきみてる花野の露ば、星ときらめき、小草にすだく虫の聲は、小鈴の音に通ひ、松ふく風は、小箏の調べに似たりけり。幽に聞ゆる笛の聲に、牧童のいにしへ、嵯峨野の昔も偲ばれて、冴ね渡る月のかほのみ打まもられつゝ、老と成てふことも知らず、身ひとつの秋の悲しさも忘れて、心すが〳〵しうあはれの進む、いと〳〵樂しき夕の、そゞろあるきなりけり。

月清み露も玉なす八千草の
はなのにしきを來てぞ見にける

評、いとうるはし。

長野　松澤まつ子

八月某日の朝まだき、例よりは早く起き出でたる、二人の弟を引連れて、一面に靑だゝみ敷つめたらん如き田面に、おき渡したる白露の、涼しく渡る朝風に、はら〳〵と葉末こぼるゝあぜ道を、つゆふみ分けつゝたどる心地よさ。眺むれば靑みたる山の端に有明の月のかすかに殘るもいと嬉し。又淺間の山にたてる煙のほんのりとして雲か煙りか分ぬもをかし。かしこに古木しげれる森あり。其森には神さびたてる八幡神社あり。今しもねぐらや出でけん、三羽四羽鳩のなき出でたるも神々しく、はるかにおろがみまつりぬ。上の弟は、昨日學校にて習ひたる、朝の景色の歌をとり出だしてとかう見くらべなどしつ。末の弟の勇ましき唱歌も愛らしく、巳等はいつ歩みけん、行くともなく布施川のほとりに行きぬ。水淸く流れ、後にうの花など咲ける小山をおひ、前に田圃をひかね、田圃の彼方に松山つゞけるなど、なかしき景色を巳等は、あやしげなる橋の上にて暫し眺め入りぬ。此時上の弟は、急に聲に力を入れて「姉樣此水も終には海に入りて、海國の爲にもつくすならん、我も此水にあやかり度思ひなりつ」と末の弟も雄々しとききてか「兄樣私も」とさけびぬ。あゝ此二人の一言は、未だ春永き未來に希望の光、輝ける淸き精神より發せしになん。「たのもしや」と思はず妾のさけびし折しも、いづこよりか唱歌の聲はきこえぬ。「流るゝ水の其如く、うますたゆます勵みなば、つひには海の其如く、ひろき望みも達しなん、やよ、勵め子等其水の如」誰人の兒なるらん、姿見はぬこそゆかしくもあるか。其高く愛らしき唱歌は次第に遠ざかりて、其かすかにきこゆる迄、巳等三人は耳をすましつ。水はいよゝ岩にくだけ、風にゆられて流れ〳〵ぬ。

あゝ此あたりに別るゝは悲しけれど、母君も待ち給はん程にとうながしたてゝ歸りの道につきし時、朝日うら〳〵と登りて、露てふ露をかゞやかしつ。

實に朝早く郊外を散歩するばかり体を養ひ、氣を廣くし、心をはげますものはなしと、師の君の給へりし御言葉思い合はされて、家にかへりて、斯くは記しぬ。

肥後　佐々有隣子

秋の七艸はみな花さきて、みわたしひろき託麻の原に、二人三人の友たち。うちつれ立て、かはほり傘さしかさして、そゞろあるきの心のたのしさは、いかにいふべきことばもなきに、鈴むしのふりいでたるこゑ、まつ虫のともまちがほるなるこゑ、尾花がそでにすがり、葛の葉のうらなつかしげに、秋の日くらしのこゑもとりどりなれば、あきつはのあきたらずして、かはほりの飛かふ夕つがたとはなりぬ。一人が「うき露もはれてうれしき野あそびも」とつぶやなくききつれば、下の句をとおもひつれど、かへり路のいそがれて、何の風情もなく、弊屋の垣ねとなりて、いとど露けく郊外散歩のたのしさをわすれがたくてなん。燈下の硯の海におり立ちてしるしぬ。

肥後　德永廣子

ひるのまのあつさはいまだ夏とのみおのはれつる、空いとあきらけき日影に、木末のみどり秋しりがほにそよぎ、いでし風景、げに初秋のけしきいとめづらしく身にしみて、ふきくる風にさそはれつつ、四方のけしきに心とめて、そぞろあるきしける、なりからおさなき里の女生徒が、夕そらはれて秋風ふき、月かげたちてすず虫なく、おもへばとほし故鄕の空、あゝわが父母いかにおはすらんなどと、うたふこゑに、秋のあはれのいやましていと深くしのばれぬ、すぎにし秋、學の窓に、つとめしころ友がき二三人うちつどひ、散歩せしころ、かの唱歌うたひて、たのしかりしことをおもへば、近きことのやうに侍れど、はや三年四年もすぎさり、夢まぼろしに日をすごしつゝ今日とはなりぬ、末弟が路いそぎつれば、心を野べにのこして家にはかへりぬ。

安藝　和住千鶴

くれそむる秋の夕、軒端にすだく虫のね哀なるに、いざや、野邊の秋を、とはんとて立ち出でぬ。秋といふより、稻葉にそよとをとづるる風も涼しう、このもかのもにさきいでて、たれ招くらむ、花すゝき、荻、をみなめしの初花、もとも末も露を置けるさま、いとめでたし。やがて、尾上に至りぬ。目ぢの限り、ふりさけ見れば、をちの山々夕もやに包まれて、そこともわかず、綠なす海原は、鏡のごとくすみ渡り、いくさ船の二つ三つ沈みたる、あるは眞帆片帆さまぐ〜なるが、追風にこぎもてゆき、あるはいさり船のあなたこなたに梶をたをたるなど、とりぐ〜にうるはし。あかず眺むるをりしも、いみじう吹きくる風に、葉末の露のはらぐ〜とこぼるゝにおどろかされ、いざかへりてんと立ちあがれば、はや、そやのかねもきこえ、空には夕づくよのくまなく照りわたり、水の流れは、千草の露に影を宿せしさまのうつくしきに、やよきなけ、ほとゝぎすなど。ひとりごちつゝ、かへりぢたどりぬ。

あゝ、たうるはしの秋の夕ぐれ、花も、紅葉も、及ぶものかは。

周防　杉瀧子

文讀む氣に倦みて、そゞろ田圃のかたを歩めば、野邊の草葉は黄ばみて、女郎花もとりぐ〜に、裳裾に萩の香もうつろひぬ。をちこちの田家も秋の聲を綴り、昨日にまさりていと寂しき眺めかな。紅葉をのせて、さらぐ〜と流るゝ小川にそひて、小徑を辿りつるに、そよ風は黄金の花に囁きて、野菊の香もいとゆかし。かなたの鎭守の森に、名殘を止めし夕日影、丘の紅葉にかげろひて、草叢に鳴く虫の聲も絶ぐ〜に、黄昏告ぐる山寺の鐘もいと哀れ。

東京　中林榮子

四季の内にて散歩に、適する時節は、何れも良けれど、其内最も良きは秋にぞありける。吹き來る風は暑からず寒からず心地いとよし。かゝる時に、家にのみ在らんよりは、秋草見て、心を樂しましたる方、益あらんと思ひ立ち、小犬をば引つれ、我家よりやゝ遠き處の人げ少き方へと、散歩に行きたり。さるに、誰も、秋の散歩は好ましき物と見ゆ、常に無き人足繁きには、先づおどろかされぬ。多くの人々の内にて、母は、小供に、必要なる話をきかせ、老人は、我子の遊べる樣を見て、嬉しげなりやがて、向ひなる方にさはがしき、聲聞ゆれば、行見しに、小川に、およぐ小魚とらんとて、小供らの、立さはぐなり。草花は、所殘さず、咲き亂れたり。中にも、朝がほのつぼみは亦廻りくる朝を待ち遠がほなるもをかし。かゝる間に、早や、夕ぐれさびしき頃とはなりて、あたりの人は、未だ、遊びにふけり居れど、我れは老母へ慰みにもと、はぎ・一枝たなりて、家路に向ひぬ。



●行啓●●　東宮妃殿下には第二皇孫淳宮雍仁親王殿下御同伴、去月二十七日午前七時二十五分青山御所御出門、桂東宮主事、片山、加藤兩侍醫、萬里小路、吉見、正親町、生源寺、富田等の各女官、及び御乳人中村タイ以下、看護婦侍女を隨へさせられ、同七時五十五分新橋驛御發車、神奈川縣下葉山御用邸に行啓あらせられ、當分同所に御滯在遊ばるゝ旨承りぬ。

●森權掌侍の卒去　權掌侍森則子は七十五歲の御高齡にて先頃より御病氣療養中の處藥石効なく去月廿五日午前四時三十分遂に卒去せられぬ。掌侍は有栖川宮威仁親王殿下の御生母なりとぞ。

●西村茂樹翁の逝去　日本弘道會長正三位勳一等文學博士西村茂樹翁は、今春來肝臟病に罹り向島なる自邸に靜養中なりしが、療養効なく去月十八日午前四時四十八分、七十五歲の高齡を以て溘然逝去せられ、葬儀は廿二日湯島麟祥院に於て佛式を以て營みたるが、天皇皇后兩陛下には、博士が生前の功勞を思召され祭粢料として金五百圓下賜せられぬ。博士が、專心日本道德ために盡されしは今更いふまでもなし、惜みても余りありといふべし。

●吳如綸氏の三輪田女學校參觀●●●●●●●●●●●　吳如綸氏は、嘗て日本に三(姓)輪田(名)と稱する有名なる女子敎育家あることを傳聞し、遙かに詩を寄せて其の高風を詠せしが、頃日吳氏は、通譯として一名の

留學生を從へ、三輪田女學校を參觀し、校長三輪田眞佐子刀自にも面會せしが、床間往年自ら揮毫して三輪田に贈りし、庭前春鳥啄レ林聲。紅夾羅裙繞未レ成。今朝社日停針綫一。起向三朱櫻樹下一行。の一軸の掛かれるを見、玆に始めて三輪田は眞佐子刀自の姓なりしことに氣付き、意外のことに打喜こび、女子敎育上、種々の問答の末、歸國の後は速に此の如き女學校を設けたきにつき、刀自の意見を承りたしとのことに、刀自は之を諾し目下其の意見を起草中なりと云ふ。又吳氏は刀自が老軀を以て、學校設立のために鞅掌するの狀を見、且つ新築中なる校舍を仰ぎ巾幗の身を以て國に竭すこと彼れが如し。日本國の興隆偶然にあらずとて、深く感ずる處ありしとぞ。

●●●●●●●●

●第一高等女學校の移轉　東京淺草七軒町第一高等女學校の敷地は先月二十日を限り居住人悉皆の立退を終りたれば、直ちに周圍の煉瓦塀建築に着手し、來年新學期前までには是非移轉を了る都合なりと。又神田橋の舊校舍は、東京府敎育會へ下附せらるべしと。

●●●●●

●女子美術學校　同校にては、當夏更らに第三講舍を增築し此際各科共新入生を募集中なるが、殊に造花蒔繪の二科はその志願者の多數を入るゝに足る由にて、尙舊寄宿舍を校內に改築し、善良なる保姆數名懇篤に生徒の便を計り、此上廿名の入舍を許す程の手廣きものとなしたりと志願者は此際入學する方便宜ならん。

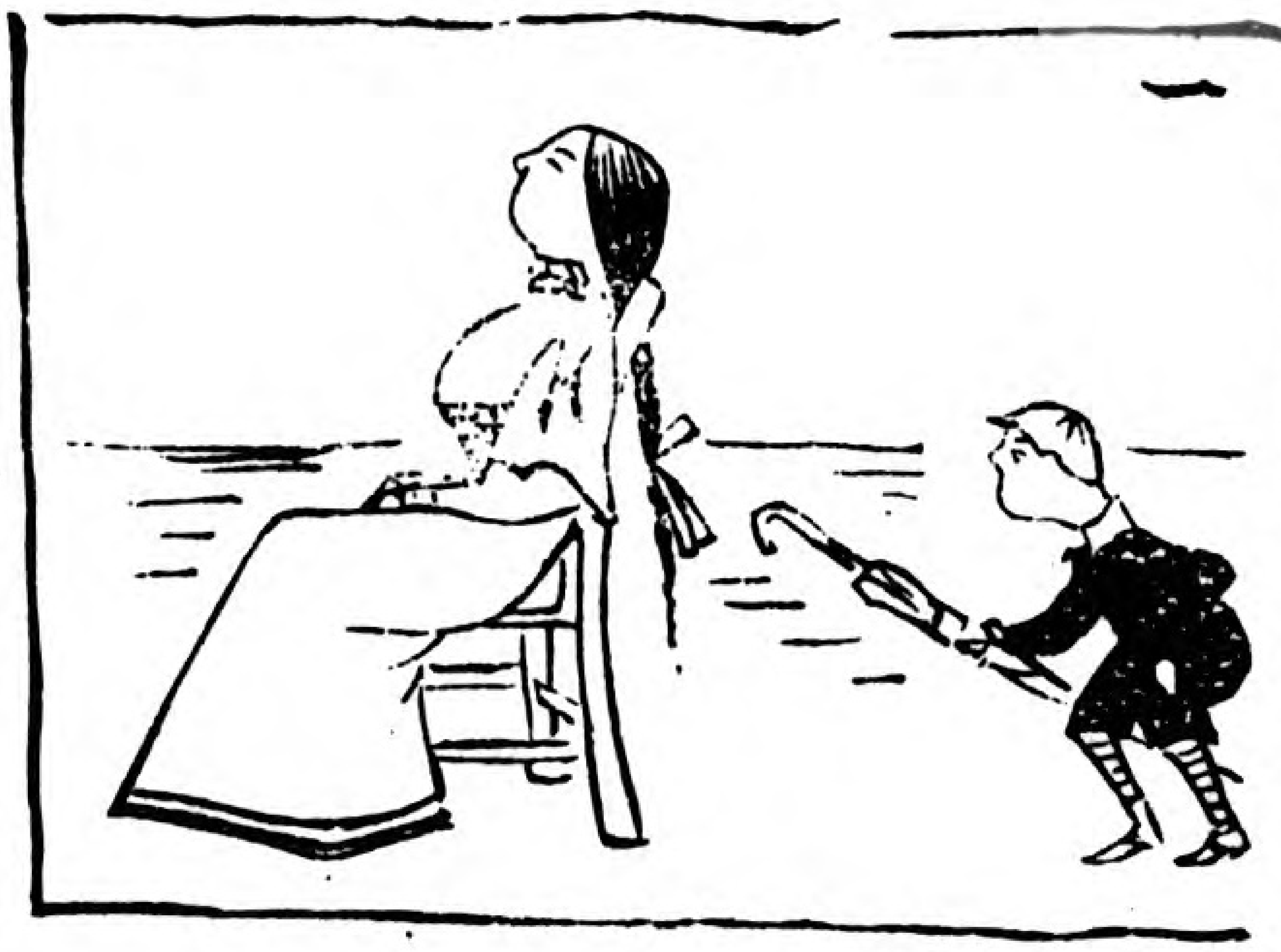
●●●●●●●●

●三輪田女學校の開校式　麴町なる同女學校は校舍新築に付、九月下旬開校式を擧行する由。設立者三輪田眞佐子女史は、該事業を以て自家の紀念となさんと、家產を傾けて敷地を購ひ、又女子大學の敎授、近刊の著書等に依りて得たる處を擧

げて、建築費の一部に投ぜし由なるが、令息文學士三輪田元道氏は、豫て鄕里香川縣より推されて衆議院議員たらんと志せしも、女史の諫止むなく之を辭し、該校敎頭の任に當ると云ふ。尙女史の知人等は、獨り老女史を勞せしむるに忍ずとて、最も親交ある左の人々を擧げて評議員となし、愈々其規摸を擴張することに決したるよし。

濱口義兵衞、男爵細川潤次郎、伯爵大隈重信、田邊爲三郎、中川謙二郎、伯爵松平直亮、森村市左衞門、齋藤諒、原禮子、佐藤靜子

●女子同窓會　廣島師範學校女子卒業生三十餘名は、去月十一日樓上會議室に集合して同窓會を催したり廣瀨師範學校長、佐伯敎諭、廣島縣立高等女學校吉田敎諭等出席し廣瀨校長は女敎員の覺悟に就て體格を强健にすること之に伴ふて運動を奬勵すること女子服を改良すること、女子をして活潑ならしむること、即ち處信を斷行し、女子としての本分を盡す上に於て遺憾なからしむべしと云ふにありて、佐伯敎諭も同樣の談話をなし、夫より集會室にて茶菓の饗應あり。卒業生より交々任地の情況を語り、日沒に至りて散會したりと云ふ。



●女子講習會　女子に對する中等及び高等敎育は近時益急要を感じ、頻りに其發達を奬勵せらるゝにも拘らず、方法設備尙未だ充分ならずして現に本年の東京府第一高等女學校の入學試驗に三百餘名の不合格者を出し、無試驗入學者と雖も校舍狹隘の爲め競爭試驗に附せられ、其結果不幸

にも不合格となりしもの尠からず。寔に學界の恨事なれば、豫て女子教育に熱心ある下谷區仲徒士町二丁目本島小學校長 本島明光氏は、伊藤第一高等女學校長及び各教諭、下谷區長等の賛助を得て、女子講習會を設け、高等女學校入學準備の爲め、國語、英語、算術、地理、歷史、理科等の諸學科を教授する事となり、本月一日より毎日午後三時半より二時間づゝ、同小學校內に開會せりとぞ。

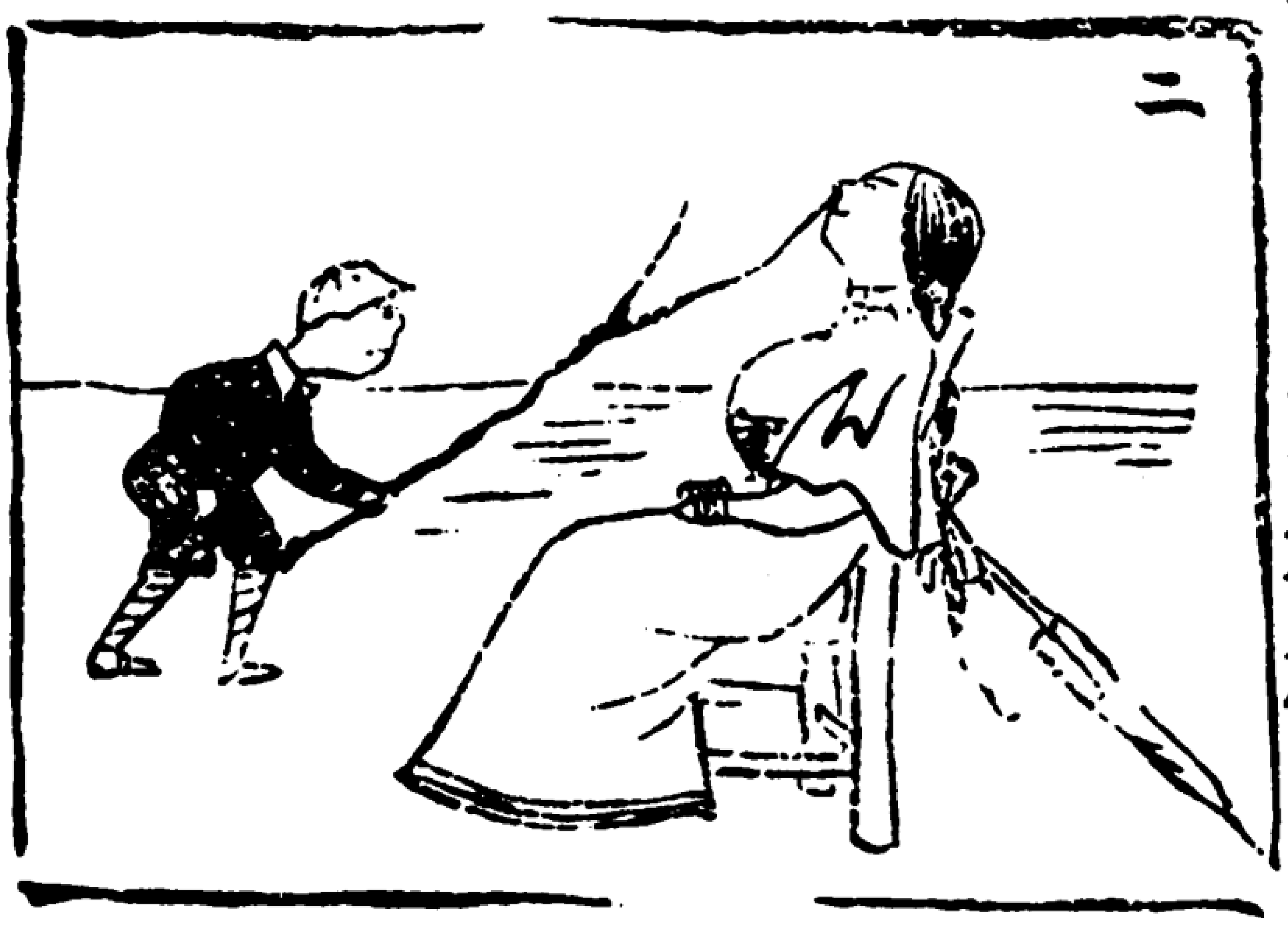
●●●●●●●●

●可憐なる孤島の節婦　大島本島の南一葦帶水を隔て、東西に連れたる住計呂麻島とす。住島の南海上三里を隔てゝ請島と云ふがあり。周回僅に五里餘、分つて二村となす。一を池地村といひ戸數百餘ありて、一尋常小學校を置けり。村の中央稍々濱近きに一茅屋は建てられたり。是れこそ節婦なる與マツ（四十六）の住家なれ。與マツは、二十餘年前政祥喜に嫁ぎ、二女をあげて不足なく暮し居けるが、如何ある因緣にや。夫祥喜は不圖せし事より發狂し、瘋癲病者となりにけり。妻與マツ大に氣を揉み、有りとあらゆる手段方法を講じ、醫藥の療治は言ふに及ばず、風の晨雨の夕、神に祈り佛に願ふのみか、苟も夫の病を癒せんためには如何なる勞も聊か問ざりしが、遂に夫の病は癒えず、與ふれば即ち食し、與へざれば即ち憤りて食慾の外絕えて心なき一稚兒に化したれば妻は世の無常をかこち、天に叫び地に號するも、今はせん術なく、唯青松雪を凌ぎ、白蓮泥に染まざる堅き操もて、身を清め、朝に夕に夫の平癒を祈り、己が職ある農業を努め、二女の養育を怠らざるさへ殊勝なるに、弱き婦女の身にして一家の柱石となり、二十年一日の如くなるは眞に讃歎の外なし、猶は老ひたる姑に事ふること眞の母に於

けるが如く、一度なりとも其の怒に觸れしとなく孝養を盡し來りしが、不幸にして姑も病の床に臥せしより歩行自由ならず、大小便の用をすら自ら辨ずる能はざりしかば、忠實なる與マツは、自から背負ふて用を辨せじめ、敢て少しも憂ふるところあらしめざりき。然るに天は終に年を假さず、姑は八十餘の高齡もてみまかりければ、泣く〳〵野邊の送りをすまし、死後に事ふる恰も生前に於けるが如く、今や無心の夫を養ひ、二女と共に業に勤しみ勵みつゝありと云ふ感ずべき事ならずや。

●●●●●●

●感ずべき少女　東京深川區西平井町十五番地に住む內田德次郎(四十五)と云ふは、人力車夫を營み居りて、女房およし(三十九)との間に初太郎(十六)千代(十四)よね(九ツ)勝造(五ツ)すえ(一ッ)と呼ぶ都合五人の子供を擧けたるが、初太郎だけは他へ奉公に遣したるも、四人は手元にて養育し居たるに、近來の不景氣にて碌々稼ぎもなき所へ、家內多き事なれば困難も一層にて、一家六人僅かに口を糊すばかりなり。然るに泣面に



蜂の喩へ、女房のおよしは產後の日立惡くして、脚氣より心臟病を續發し、一ケ月許も患ひたる末、去十七日黃泉へ旅立ちたるにぞ、一錢の餘裕とてもなき身の野邊の送りさへ營みかねて、只四人の子供が亡骸を取圍み、オロ〳〵と泣き居る側に、德次郎が嘆息を吐いて茫然となし居る有樣誠に憐れなる事なりとて、車夫仲間や近所の者が打寄り、金七圓六十五錢の涙金を醵めて德次郎に與へ漸く葬式を濟まさせたるが、德

次郎は餘りに稼ぎに身を入れたると、妻に死なれて落膽したるとにて、俄かに病氣となり、仕事にも出られずブラ〳〵となし居るを、娘のお千代はまだ十五歳に足らぬ少女の身ながら、甲斐〴〵しく働りつゝ、夜の目も寢ずに卷莨の手内職をなして些しの賃錢を取り、それにて父の藥の代より三人の弟妹を養ふべき食料、及び牛乳などを購ひ一家の世話をなし居る行ひの殊勝さには、見る者感ぜざるは無しとぞ。

●太宰氏の美擧　福島縣伊達郡保原町の富豪太宰文次郎氏は、米價騰貴して窮民饑に泣くの慘狀を見るに至らんことを患ひ、之を救ふの策として自費を投じ毎日十俵位づゝの米を買入れ、時價より安値にて町民に買ひ取らしむべき法を立て、此程より同町役場の斡旋にて着々實行しつゝあるが若今日のまゝにして米價下落せざるに於ては、氏はいつまでも此美事を繼續する決心なりといふ。

●無名の特志留學生　本年五月十五日發行の讀賣新聞明治の令孃欄内に掲載したる、吉田壹伎英女苦學力行の事實を讀み、在獨逸の一留學生より左の書面に金十圓を添へて贈來り、仝社へ其傳達方を依頼せりと。政府より受くる學資を割いてまで之を苦學の女生に惠與するは、感ずべきことなりといふべし。

（前畧）貴社新聞　八千百四十五號一覽致し候處明治の令孃の中吉田壹伎英孃の記事有之、母子兩女の苦心左こそと察せられ、如何にも御氣の毒の感に堪へず、我々が政府より金を受けて食に飽くを思へば、益す同情の念を禁じ難ね、失禮をも顧みる遑なく、些少ながら金十圓同情の印として同家へ呈上致度と存候、就ては御手數甚恐入候得共、貴社の御盡力を以て同孃の

筆硯の料の足ともならば、幸甚の至りに御座候
（下略）

七月二日　一留學生

讀賣新聞社御中

●・・・・・・

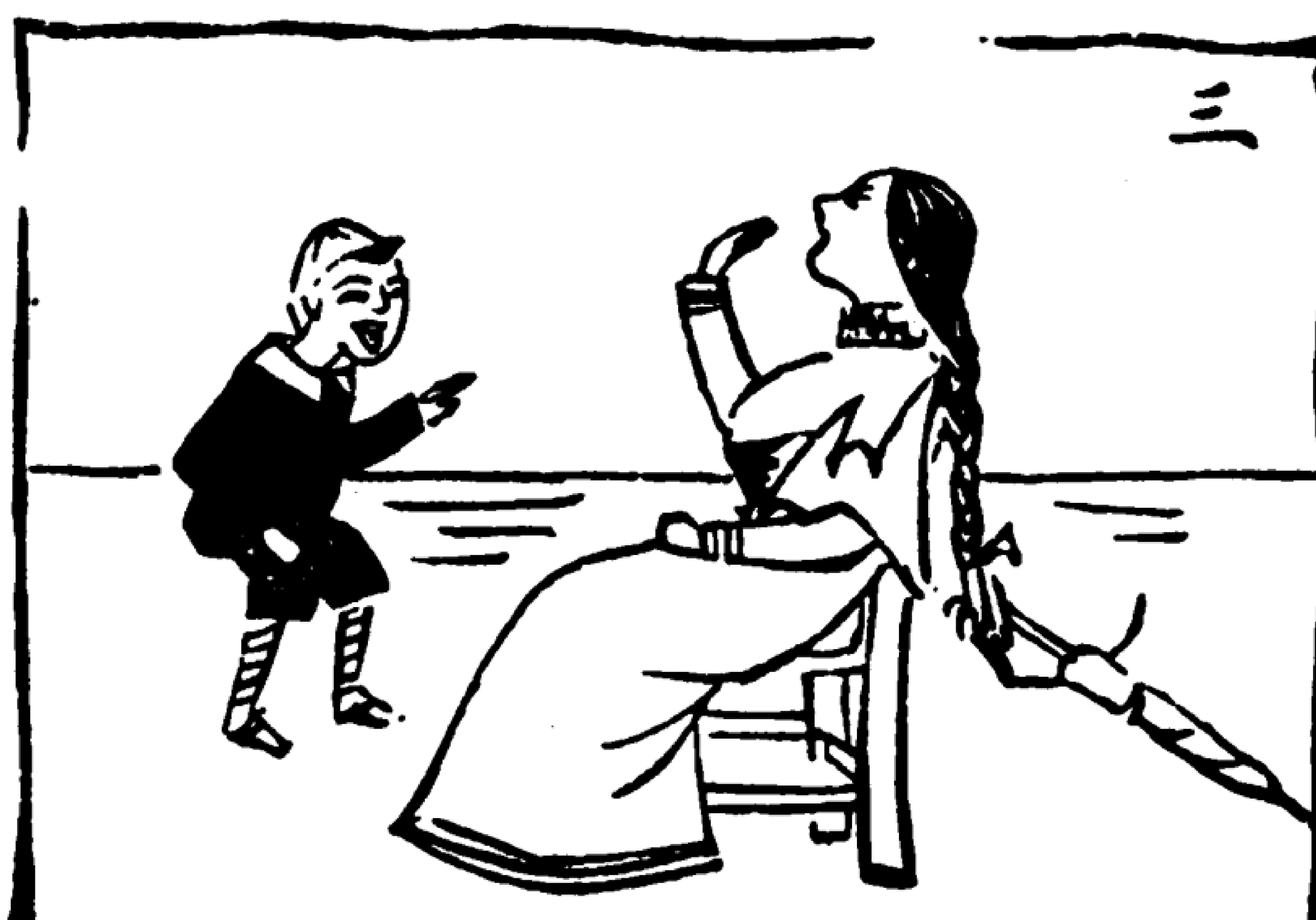
看護婦の記章受領　北清事變の際、廣島豫備病院に於て、佛國傷病患者の療養に從事せし看護婦數名に對し、今回佛國大統領及び同國文部大臣より夫々左の通り記章を贈與せられたる由にて此程之が受領幷に佩用方の允許を出願したりしと。

廣島病院看護婦長勳七等　加藤マサ
弘濟丸看護婦長勳七等　萩原タケ

右佛國オフイシエー、ダカデミー記章

西野ノブ　友成トミ　奥野ムメ　高木ムメ
湯淺ムメ　四方テツ　桂イクヨ　池田チエ

右佛國名譽銀章



●・・・・

ヒユス孃　前の英國ケンブリッヂ大學高等師範學校長にして、過般來英國政府より日本の教育事業視察の命を受けて來朝し、目下高等師範學校其他の教師として教授に從事しつゝ、視察中なるヒウス孃は、外に二名の隨行者と共に去二十二日松山にいたりて同地諸學校を視察し、次で、日本聖公會講義所に於て教育に關する演說を爲し、更に飛彈高山へ向け出發したり。尤も今回の行は、信州より飛彈へ掛けての山道は、日本一の奇勝なるを聞きて探勝の爲めなりと言へば、模樣に因つては木曾路へ出で御嶽へも登攀するやも知れずと。

●・・・・・・・

日英女學生の通信交換　日英同盟成立以來、英國婦人にして日本婦人の眞情を知悉せんとする

の念大に起りたる結果同國々立地理學院會員リチャード氏、及び在留本邦人中川浩平氏等發起人となり、英國皇后陛下の校長たる倫敦女子大學生外數十名の書簡を裁して、各般の事情を具し、遙に日本女學生の交際を求め來ること丶なりし由にて在神田の英學新報社は、專ら之が媒介者として我女學界を警醒し英國女學生と通信を交換し、情誼を訂結するものを求むるとぞ。

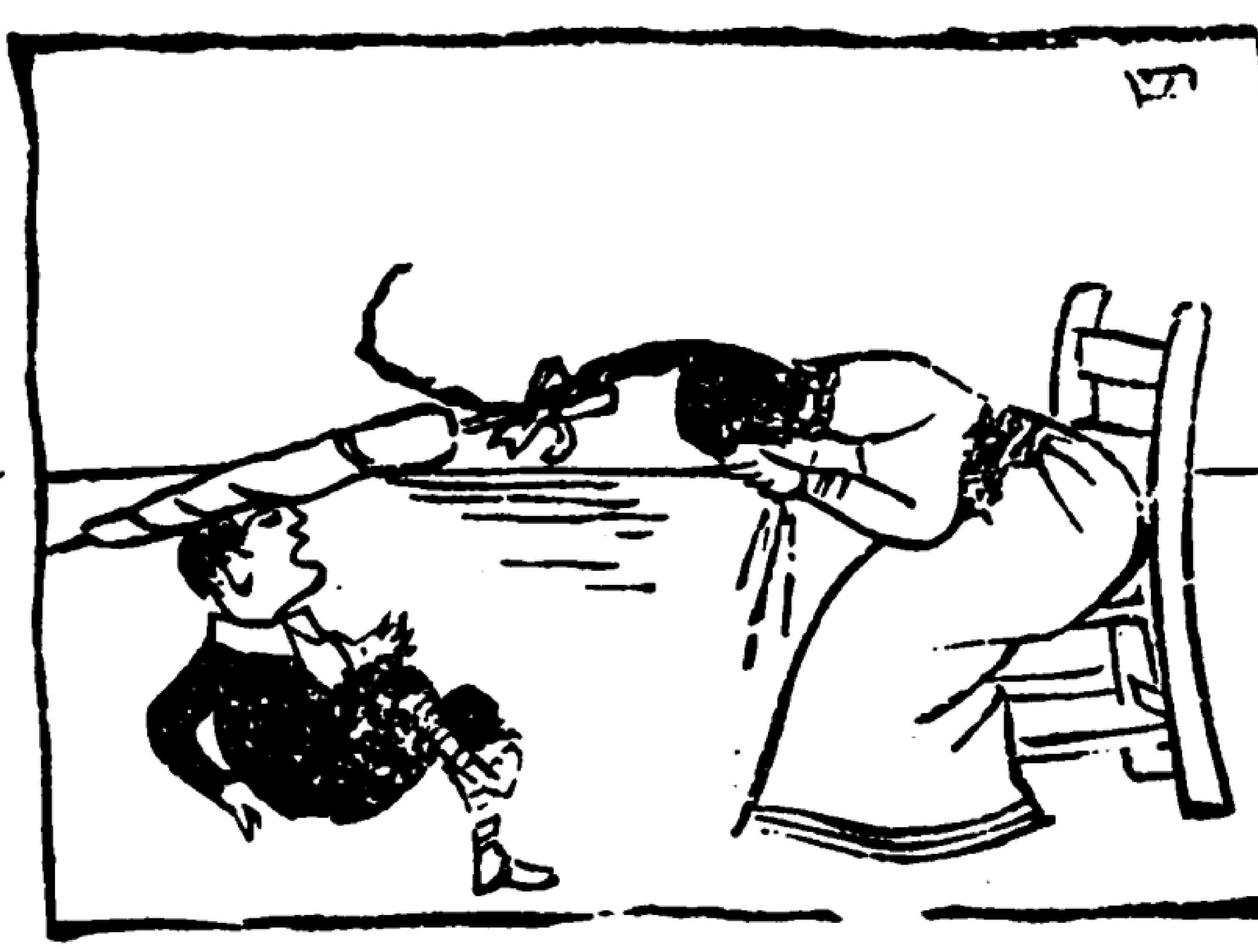
●●●●●

●本邦の女禮服

露國大公主殿下の保護の下に聖得彼斯堡府なるトーリード宮殿に於て、來る十一月一日より來年四月一日まで、萬國服裝博覽會を開設するに就き、三井呉服店にては外務省よりの通知に基き、參考として婦人式服一襲を出陳することとなし、去る三月より京都なる同店染工場に於て調製中なりしが、此程漸く出來して東京の本店へ送り來り、意匠係等の檢分を經たる上、愈々露國へ向けて發送せり。扨式服の模樣は、元祿時代に當世樣を參酌したるものにて、頗る華美に仕上りたるが、其大略を示せば、▲振袖は縮緬の納戸地を地落染となし模樣は萠黄擬ひの大浪の間に金泥にて槌車を現はし、其傍に茶色の疋田染にて蛇籠を据ゑ、袖より裾へかけて、所擇ばず紅葉と櫻を散らし、總じて模樣の利目は、悉く金糸と色糸とにて刺繡せり、▲下着は紋羽二重地に松形の大模樣、▲長襦袢は、紋縮緬の肉色地にて、半襟は白の鹽瀬に、古代模樣を色糸にて刺繡る。▲襠は、紋羽二重の緋色地にて、模樣は雪輪と花物なるが、雪輪は日向の雪を鹿の子に絞り、陰の雪を紫紺と納戸の兩色に絞上げ、花物は梅藤菊萩の四花に松と薄を加へ、之を幽禪に染上げ、其を色糸にて刺繡り、模樣の間に金箔もて源氏雲を摺り出せり、▲襠下帯には、萠黄の繻子地に孔雀の尾

を金糸と色糸とにて刺繍り、其上に牡丹の花を、金糸、赤糸、納戸色の糸等にて繍潰し、花の輪廓は紫紺と茶の兩糸にて括れり。▲紋は五ツ所にて古代の蝶鳥、草花等を色糸にて加賀紋に刺繍れり又以上式服の外に白羽二重の足袋をも添へたる由。

●●●●●愛國婦人會彙報　◎會員の增加　同會は漸次隆盛の域に向ひつゝありて、去る七月には新入會者九百名の多きを見るに至り、全會員二萬餘名に達せり、◎有功章贈呈　全國各支部員其他同會へ對し効勞少なからずと認めたるもの九名へ、二等有功章、（七寶金製）十四名へ三等有功章（七寶銀製）に褒狀を添へ、孰も昨日贈呈せり。◎奥村女史の遊説　同女史には、本月より新潟地方遊説の豫定にて、目下其準備中あり、因みに女史の地方に遊説するや、決して旅店等に宿泊せず東本願寺末寺に宿を乞ひ、專ら會費の節儉を旨として、通常の必要費の如きは自ら負擔せる程なりと。◎奇特なる女　此程の事なるが、伯耆國女學會員まつの、のぶの二人の名前にて、同會へ金五十錢宛を寄附し、添書に右の金は、中元手當として主人より賜はりたるものを寄附する旨記載しありたりと。



●●●●●女性の勞働者　女工の職業及び年齡別を農商務省商工局の統計表により示せば、左の如し。

職業	十四年以下	十四年以上
製糸	八五六〇	一〇一三七一
紡績	一一六一八	五四〇二九
織物業	五二〇八	三三二六四
其大小	二一	三六四

木組物細工	一二二	二九一
機械業	……	八三
造船業	二〇〇	二〇二
器具業	四五	二四九
鑄金業	四	一四六
陶磁器	七三	五四〇
硝子	一四	一四五
石灰類	三六	九八三
製紙	二三九	一七〇四
染・色	九	八五四
製革業	三二	一一八
燐寸煙火類	四三三九	七二一四
揮發油類	……	七四
人造肥料	……	四三
醫薬	七六	一八五
酸類	……	六
他の工業品	……	一〇
化粧品他の原料	四〇	九六
雜類	二三	一四五
醸造業	一四	一六七
煙草業	一二三七	六八六九
製茶業	二七	一四五五
精穀業	二六	九一
鑛泉業	……	六三
菓子業	……	六五
罐詰業	四	一七四
刻昆布其他	九	五八一
印刷業	二二〇	六四五
紙製品	一二七	八四一
竹木製品	一四三	九七一
皮製品	二〇	一〇二
羽毛製品	一三二	五六四
參料業	五五〇	一八五四
石工業	一六	四〇
漆器業	……	三
製綱業	二〇	二五八
裁縫業其他	九九	七四六
金屬精煉業	三六一	五〇五〇
合計	三三六三〇	二二一五二

外報

●米國婦人の贅澤　米國婦人が、すべて贅澤に成りつゝ有るは人の知るところなり。現時米國に於ては寶石熱流行し、紐育に在る三百有餘の寶石店は全く寶石の一手輸入を爲し、尙歐洲に人を派して金剛石を求め、金剛石の無きに困じて、紅寶石或は綠玉石を以て米婦人の要求に應ぜむと欲すれども、是等にては彼等の望に適ふ可くも有らず

一方には南阿に於ける六千名の工夫が採掘する金剛石は、其半以上は米國婦人の美を補け幸福を益すの具となるあり。米國をして世界金剛石の市場となさしめたるも、一年二千萬弗の寶石を輸入せしめたるも、一時一年に七百萬弗の割合を以て寶石の密輸入をなさしめたるも、年々千二百萬弗の金剛石を求め、世界の婦人の虚榮に對しては僅に八百萬弗を以て之れに應ぜしむるに到れるも、一に米國婦人の爲めにて、米國婦人の粧飾の爲めには有名なる南阿キムバレーに於て產する額の三倍即ち千二百封の金剛石を米國に輸入すと。

●●●●●●●

●貴女の空中旅行家　澳太利亞のフキンチ夫人は、輕氣球を飛ばせて、セントクラウドより百六十哩を隔てたるコンデサアキル迄、五時四十五分間に到達したれば、佛國の空中旅行俱樂部は、同夫人に賞盃を送りたるが、此の一事を見ても、外邦にては、婦人まで冒險志想に富む一班を知るべし。

●●●●●●●●●●

●英皇孫の女兒に對する不平　未來の英國皇帝たるべき同國の皇長孫ヨーク親王は、本年の齢、僅に八歲なれども、己に世人が、女子に對して特別の待遇を爲すことを知られ、其不公平を嘆じ居らるゝ由にて、此程其侍者に向ひ、女兒の爲すことは常に正しと認められ、男兒の爲すことは常に惡しと想はると述べられたりと。之に對する答辯は恐らく男兒の如く、女兒は涎掛を汚さずといふの外なかるべし。

●●●●●●●●●

●大膽なる米國の惡少女　此程米國紐育の嬌風會にては、十歲の少女にて、名をケチー、コンロイと呼び、七歲の弟と共に市街を乞食し廻はるものを捕へたるが、法廷にて嚴しく取調べたる所に據れば、此少女の父は貧しき鐵管職工なるより、

其子供等四人に乞食を爲さしめ居るが、右の少女ケチーは、其前日或る雜貨店の前を通りたるに主人は店番をしながら眠り居たれば、少女は大膽にも店臺の後ろに近附き、抽斗の鍵に指を當て鈴の鳴らざる樣に注意して、抽斗を開き窃に百九十八圓を盜み取り尚數個所にて、價凡百八十圓の指環四個金時計一個、寶石入指環數個等を窃取したりと。恐るべき事にこそ。

●●●●●●

●米國婦人の惡戲　米國カリフオルニア州のレッチングにて珍らしき事起りたり、同地の交際社會に名を知られたる二名の美人が、男子を強迫して強盜を爲したるとにて、去月上旬の或る夜、同市の商人にて、エドワード、ポールソンなるもの店を仕舞ひて歸宅せんとし、暗き小路に入りたるとき、覆面したる二人の男道を遮ぎり、鐵槌を振り上げて待てと叫びたるより、ポールソンは大に驚きて狼狽する所を、一人の男に捕へられ、所持の指環及び金貨四十八弗を奪はれたり、ポールソンは直ちに此事を巡査に報じ、家に歸りて、委細の事を妻に話し居たる際、妻の妹及び郵便局に務め居る、一少女來りて、鐵槌覆面男裝の衣服指環等を示し、自分等が強盜なりと自白したり。多分戯れに爲したることならんと云ふ。

●●●●●●

●英國皇后戴冠式の正服　こは、巴里の裁縫店に命じて造らしめられたるが、其材料は、重に英國及び其殖民地製のものを用ゐられたり。其中には、印度にて造りたる紗の繡箔あり、金絲にて、英國の薔薇、蘇國のあざみ、及び愛蘭土のかたばみ草の花を縫模樣とせり。服は金絲を以て織りたるものにして、グリーム色の絹の紗を以て之を被ふ。裾は赤色の天鵞絨にして、其長さ二十碼なるが、黄鼬の毛皮にて裏を附け、金にて皇室の徽章

を飾りたるものなり。此服は巴里の裁縫店に於て皇后の眞形大の模型に合せて造りたるものなれば只一度假縫を爲したるのみなり。此模型は右の裁縫店にて皇后の服を造るに常に用ゐらるゝものなりとぞ。

●●●●●●●●喫煙と飲酒との關係　有名なる英國の醫學雜誌ランセツトの報ずる所に據れば喫煙の害は、飲酒の之に伴なふとき最も激しく感ぜらる。こは煙草の内に含まるゝニコチン及びピリヂンは、アルコホルに溶解し易き故にて、ピリヂンはニコチンより害多きも、水には溶解し難し。喫煙の後口内に殘る分子は、此ピリヂンなるが、酒を飲むときは直ちに之を洗ひ去りて胃中に運ぶなり。此塲合には單にピリヂン若しくは酒に依りて生ずる害よりも、一層大なる害を與ふ。されば、飲酒の際、同時に喫煙するは頗る危險なりと云ふ。

●●●●●●●●●●嬰兒を携へて徒歩旅行　墺太利のヤルードルフハンスリオンと云ふ人は、嬰兒を車に載せ、妻と共に一昨年の九月十二日維納を出發して、徒歩旅行の途に就き、歐洲諸國を巡遊して、去月墺國のグラッツに歸着し、非常なる歡迎を受けたる由。此時までに、此夫妻の旅行したる哩程は一萬五千哩にして、七月二十九日維納に歸りて旅行を終る筈なりしと。

落葉籠

●靜岡の松江子さまの御說の通り、私も名譽ある兼題當選者の寫眞を出して頂戴したいと存じますが、出來ることなら、その寫眞と共に、簡單なる履歴やうなものをも掲げて頂いたら、一段結構に思ひます（谷中とり子）

●青嵐女史の御尋ねには、かゝり記者先生の御返

事もありましたが、當時女流の詩人には跡見花溪先生などもありますから、女史の御考へ一つでは花溪先生の門に摯とやらいふものを執り玉ふもよろしかろうと存じます（本鄕一女子）

●麻布のみち子さんの御希望の通り、音讀しても笑はれたり、叱られたりしない新聞を久しく捜して居りますれど、今に見當りません。廣い東京に幾種もある新聞の中に一つとして、妾等の望どほりの新聞がないとは甚だ遺憾に堪へない譯ではありませぬか（芝三田吉田たけ子）

●森林黒猿さんの福島少將夫人の御話を拜見いたしまして、私は大いに感服いたしました。それに就いて御願がありますが、だうか女鑑の口繪に夫人の御姿を載せて下さる事は出來ませんか、私はそれを机の傍に置いて、仰慕の情を寄せたいと存じます（長州萩松井たゞ子）

▲松井たゞ子さんへ御答へ申します。まことに宜い御心懸けであります、福島夫人の肖像は掲載する都合になつて居ますから、多分此次かその次ぎ位の口繪に出ますことと御承知下さい、暫らく御待ち遊ばせや（かゝり記者）

●私は神戸のむめ子さまや、木挽町のあや子さまの御説に賛成です、築地のはや子さんや、横濱の中川さよ子さんなどは、早くアメリカにでも御出でなさるがよろしからう（麹町大内さく長子）

●一寸御伺ひ申します、日本赤十字社の看護婦となるには、入社手續は如何ですか、又學資金が大凡どれ位いりますか（淡路子）

▲東京の御方は本社に地方は支社に願書をいだして試驗を受けるので程度は小學卒業であります、既に看護生とあれば金はいりません、たゞ小遣ひ位だそうです（かゝり）

●野口小嶺女史の御住居は當時何處にや御敎へを乞ふ（相州よし子）

●本所又は淺草あたりに、たしかなる茶道の宗匠之あり候はゞ、御をへし被下度、願ひ上候、尤も表か裏の千家ならば猶よろしく存じ候（同上）

▲此邊には非常に茶道の宗匠が多いので、千家の表裏の者もありますが、確かとは保證ができかねます、但し宗徧流ならば善い宗匠があるさうです（か丶り）

●妾は、世の中の義理になきしが、漸く心づきて見れば、吾一身をだにさゝげなば、希望の光は未來に耀やけるものを、斯く決心せしより二年程經て本年のつい先つ頃、其期來りければ、幾度かさゝげんとしたる、我一身をついに受納し給はず、光は忽ち消え失せぬ、其故妾は、是非無くも不幸の地におち入ぬ、ア丶悲しや（信濃まつ子投）

●東京の皆様にお尋ね申します、私は音樂學校に入學いたしたいと思ひますから、何程の學科で入學されますか、又何に〳〵の學科をならッて居りますか、一ケ月に學費幾程か丶りますか、御存じのお方は早速お知らせください（岩内たき子）

●口繪について

●●●●●●

●長岡子爵夫人　夫人名を知久子と稱し、肥前大村藩主故從三位大村純熙公の第六女なり。萬延元年十月江戸藩邸に生る。その性質さとくおはして萬の道いたらぬ限なきが上に、容姿さへうるはしかりければ、父上母君のおんいつくしみ一方ならず、御兄妹達との御間柄もいと睦じく、又常に召仕のものにまで慈愛の情をかけられき。かくてやうやう長じ給ひて、明治十二年四月長岡子爵に嫁が

せられ、伉儷よく偕ひてこゝに多數の御子を設け給ひ、家庭の圓滿なること、和らぎたる春の海のごとし。明治十五年子爵全權公使に任ぜられ、和蘭に赴任せらるゝや、夫人從ひて彼國に到り、よく內を治め、夫を助けて、その重任を全ふせしめ、同十七年六月無事歸朝せられぬ。おほむね玉の臺におほし立てらし人は、見聞せまく、固僻に傾き易きものなれども、夫人はわが國の婦道を備ふると共に、外國の道にも通じ給ふ。さればにや慈惠病院創立の際には、發起となりて斡旋の勞を取り、また日本赤十字社看護婦會幹事となりて、大に力を盡されたり。其外婦人教育會、慈善事業等に關はせられて盡力せられたる事少なからず。目下婦人教育會幹事として女子教育の進歩に盡されつゝありといふ。

●●●●●田中正雄子刀自　刀自は、現時千葉高等女學校首座教員として、幾多の子女を教養しつゝありとぞ。

●●●●●松操會員　松操會は、婦人の道德をすゝめ、併せて其品位を高くせんがために伊豫松山に設けられたる婦人團體にして、會長には三輪田眞佐子か自を頂けり。いまその詳細を得たれば、左にかゝげむ。

松操會が呱々の聲をあげしは、實に明治三十一年十二月の四日なりき。此日來會せしものは、其數二百五十有七人、其中通常會員百九十八名、賛成員四十七名、其他の十二名は役員にして松山公會堂和氣藹々の中に發會式を擧へたり。是より、先發企者數名は深く我國の現況にかんがみ、一致共同相和し相助けて女流の圓滿を圖らむことを期し、設立協議會を開き會則の梗概を議し將來の希望方針などを定めぬ、時はこれ昨年十一月二十三日處は即ち私立愛媛高等女學校なり。これより事務處をこゝに設くる事とし、毎月の常集會々場としては大概此校を使用せしのみならず、同校職員兩三名も心を盡して會務に鞅掌したるなど、女學校と松操會とは離るべからざる關係を生じたり。さて又地方長官其他有志の士はいたくこの會の趣旨を賛し、補助を與へられし事、尠からず、此補助と會員の熱心とは會務をして其歩武をすゝめしめて賛助員百余名通常會員三百八十余名を有する盛況に達せしめたり。

かくて毎月一回開催する常集會には會長先づ其旨を述べ、一同

松操會の唱歌を奏し、或は會務を議し、或は、名家の說話を請ひ、會員の裨益を圖るを常とせり。其會するもの凡老少三百五六十名皆日を計へて之を俟つもの〻如し、此會已に三十余會を重ねたりといへども、毎に天氣清朗未だかつて風雨に際會せず顧へばこの會の創りてより日猶淺けれども地方風俗の矯正に女德の涵養に効益を與へし事尠からざれば、天も亦此高操に感じて然るものか、誠に奇緣と云ふべきことにこそ。

松操會の唱歌は左の如し

名もうるはしき姫松の　操のまとゐ幾千代も
しぐれにそます降る雪に　たわまぬ色は見はにげり
かたみにむつびいやまひて　誠の道を一すぢに
まもる心のまとゐこそ　千代も八千代も榮ゆらん

●●●●●●

●京都嵐山渡月橋　京都嵐山は櫻花及紅葉の名所にして、山水の美また古來の諷詠に上り、洛陽景勝中にて最も冠たる所なり。前流に架する長橋を渡月橋と稱し、北岸に有名の割烹店三軒茶屋あり。山中戸難瀨瀧、又淺黃櫻、大悲閣等著名なり。遊客常に絶えずといふ。

●●●●●

●鎌倉稻村ケ崎　は勤王の史蹟として世に聞えたる處なり、史に傳ふ弘元三年新田義貞義兵を擧げて鎌倉に北條高時を攻めし時、夜極樂坂を過ぎんとせしに、敵は兵船を稻村ケ崎に集めて横矢に射んと構へたれば、輙く過ぐるを得ず、此時義貞馬より下り冑を脫ぎ海神に對して祈誓を凝し、黄金裝の太刀を解て之を海中に沈めけるに、其晩方に至り潮の退くこと二十餘町にして、兵船皆遠く引き去りしかば、義貞大に喜び兵を進めて鎌倉に入り終に高時を亡しける。爾來六百余年物換り星移り山河幾度か其主を換へたれども、義貞が勤王の美名は不朽に傳へて岸打つ浪の音と共に高し。

●●●●●

●岩代福島信夫橋　岩代信夫郡福島町の西南端須川に架せる長橋にして、明治二十一二年頃、八萬余圓の費額を投じて架設したる石橋破橋の後、明治二十七年更に三萬圓の費用を以て、鐵橋模造の木橋となしたるもの則ちこれ也。本圖は、對岸渡利村の辨天山腹(所謂ヒーロー山)より撮影せしなり。

●●●新刊廣告●●●

女子必讀

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂

新編ひめかゞみ　全

近世女子教育の年に月に熾んなるに随ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも評すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、専ら智育を宗として重きを徳育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は質なり、花あり質ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花質を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る、傳文撰述の作家中重なる人々の姓名を左に錄す

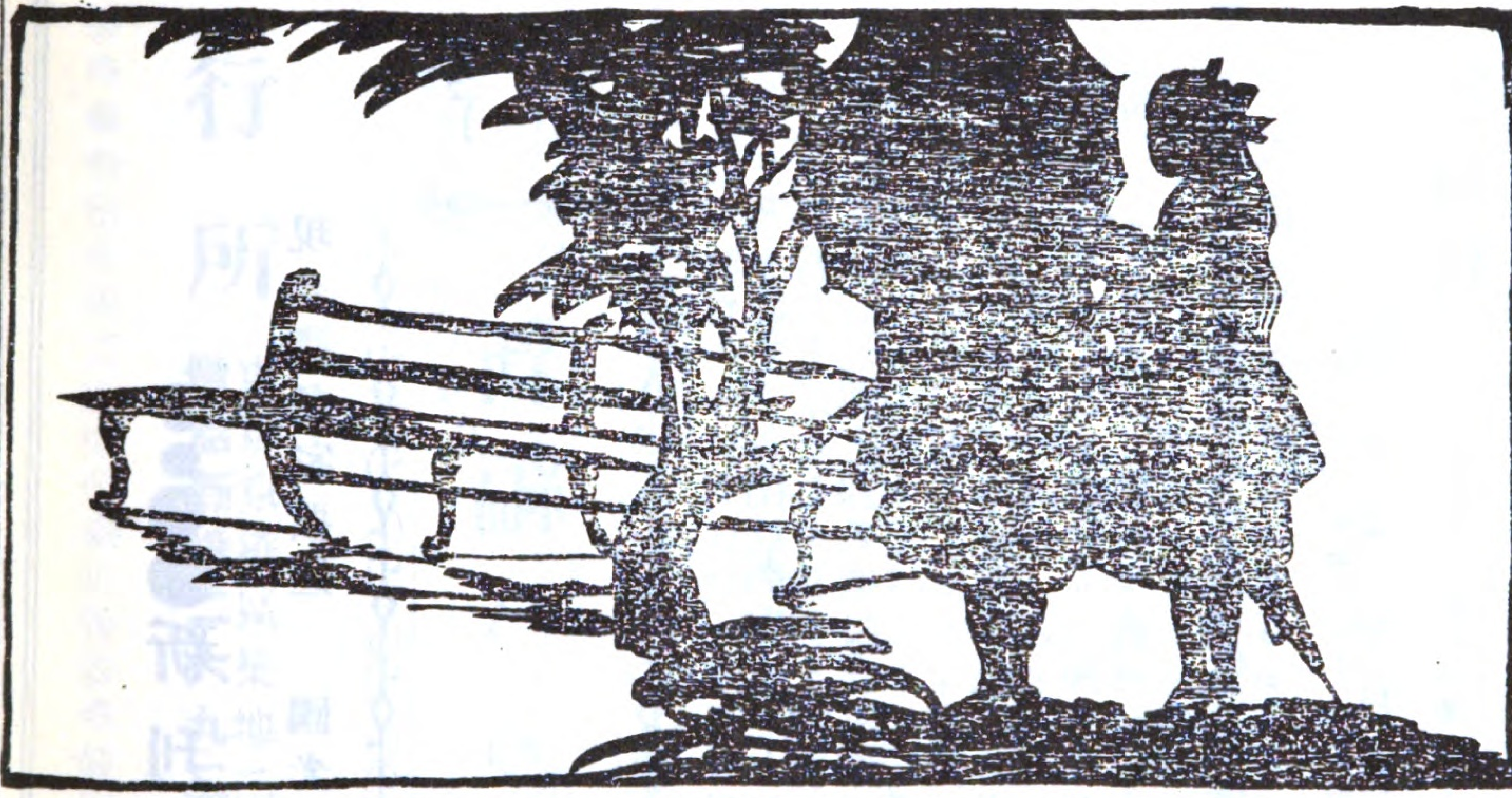
細川潤次郎　大町桂月　三輪田眞佐子　鹽井雨江　久米幹文　山川清家　井上頼文　鹽井ふく子
青山延壽　安藤紫光　栗田寛　山本正周　磯野徳文　大槻文彦　濱田康　指原乙子　以下數十家

發行所　東京市京橋區築地二丁目　國光社出版部

孃さん方お待ちかねの

少女讀本

月の卷が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹冊價定拾.八錢郵税四錢

花の卷に對する批評

◎毎日新聞評 堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く、且つ有益の册子なり、目次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評 まじめな所があつて先づ〱善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評 家庭小說を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小說數種を集めたるものなり面白くたのしくまた哀れに悲しき間教訓的意味を含ませて綴たり妻たり母たるものゝ心得を說きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ

◎教育時論評 たま椿、家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭教育の一助とすべし

◎中央公論評 家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドケ無き物語中自然に教訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評 家庭讀本をあらはして以來、常に斯る著を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に續いて、今又この著をなす、趣味の淺源は暫くこゝに言はす、吾人はたゞその年少女子を害すなきを喜ぶ。

◎國民新聞評 花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、旣に少女らしき名題にして、著者亦た夙に此種の書に經驗あり、且つ成功したるに近し、夏の浴場、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく應しかるべし。

◎國文學評 花の宴、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはり、の六篇を輯めて、一册としたもの、皆、孰れも、教訓の意を寓して最も、少女に適するやうな誠に罪のない物語である。讀み終つた跡に、清らかな和氣藹々たる家庭の面影も、髣髴として目前にあらはるゝやうな心地がする。吾人は、殊に、著者の『家庭讀本』を讀みて、その筆の、斯の種の著作に甚だ適するものあるを見たが、本書を讀みて、なほその然るものあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

發行所 東京築地 國光社出版部 ◎賣捌 國光書房 北隆館 東京堂 文魁堂

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分

訂正第十一版
表紙彩色摺
大和綴美本定價
金二十五錢
郵税金六錢

西村茂樹序　三輪田眞佐子著

女子處世論

訂正第五版
定價金廿錢
郵税金四錢

生田目經徳編

標註 雅文消息集

菊判美本全一冊
定價金二十五錢
郵税金四錢

井上頼圀校訂　小澤政胤著

慶長以來 國學家略傳

洋裝全一冊
定價一圓五十錢
小包料二十四錢

福羽美靜序　下田義天類校定　指原乙子編纂

女子文章軌範

和裝美本全一冊
定價金三十錢
郵税金四錢

伯爵東久世通禧君題字　高等教育會々議員湯本武比古君序　東京感化院長高瀬眞卿講述

學校家庭 修身一夕話

伯爵副島種臣題字　新泉堀内文厥編

新刊

洋装菊版美本
全一冊 上製
定價 金六十錢
郵税 金八錢
並製定價 金卅八錢
郵税 金六錢

杉谷正隆編

家庭の鑑

訂正第三版
菊版全一冊
定價金六錢
郵税金四錢

家庭歌訓 修身百首

菊版全一冊
美本
定價金廿錢
郵税金四錢

千葉縣師範學校長弘田正郎氏編

豪吟集

寸珍美本
定價金八錢
郵税金二錢

紅鹿庵俗觚評　富岡永洗畫

國の譽 櫻の花

極彩色口繪挿畫數葉
菊版美本
定價金五十錢
郵税金八錢

東京築地二丁目　株式會社國光社出版部發行

倉庫銀行頭取中村清藏君序　中村佐平著

新式 銀行簿記學

本書は東都大小の銀行に就て實地調査を施し、之を參酌折衷して銀行に關する大體を說明して洩さず、實地に應用する方法を編述して遺す事なし、されば、簡易商業學校その他の教科書として適當なるのみならず、學校に入らずして銀行業に從事せんと欲する者の、一日も必要缺くべからざるの最好良書なり。

新刊　洋裝美本全一冊　定價金五十錢　郵税金六錢

富田鐵之助君題字　須田毎六著

銀行利用法

新刊　洋裝美本全一冊　定價金四十錢　郵税金六錢

銀行は資金の泉源にしてこれと取引するの必要あるは何人も均しく認むる所なりと雖も、能く之を利用する者に至りては寥々乎として晨星の憾なき能はず。著者こゝに感ずる所ありて、多年の實驗と私見とに依りて簡明平易に銀行利用の方法を講述したるもの即ち是れなり、何人も座右缺く可らざる珍書といふべし。

發行所　東京築地　株式會社　**國光社出版部**

白耳義大學教授ラヴレー氏原著　文學士寺内淳二郎譯

奢侈亡國論

新刊　袖珍洋裝美本　定價郵税共　金二十二錢

現今の世、人心靡然として奢侈に流れ豪奢淫佚自ら得たりと爲すもの擧世滔々みな然らざるはなし、原著者茲に見るあり奢侈の定義動念不正を論じて一代の頽瀾を將倒に挽回せんと試みたり、譯者亦流麗の筆を以て之を譯出したれば繙讀の間趣味津々自ら禁ずべからざるものあり

陸軍大臣寺内正毅君題辭　關謙之君序　紫洲甲秀輔著

德川の孔明

新刊　袖珍美本全一冊　定價郵税共十五錢

本書は德川の孔明とあだ名されたる德川東照公帷幄の謀臣本多佐渡守正信の經國意見を編纂せし者なり、世人多くは正信を以て權詐狡猾の奸物なるが如く速了すれども是實に皮相の見にして其言ふ所眞摯篤實最も今日に適切なるは本書を讀むで始て了得するを得べし

山崎忠和著

日露の英雄

新刊　洋裝四六版　肖像入全一冊　定價郵税共廿二錢

露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其の識見事業の世界的なる同一なりと論じ、三雄の音容動作眼前に現はれ出で、宛も活動寫眞を見るが如し

少年のよみもの

少年 武士道史傳

全部八册

菊版美本 壹册各金拾九錢宛

◎第一篇 既刊 山中鹿之助
文學士大町桂月著
飯沼珠城畫

◎第二篇 既刊 上杉謙信
文學士三好物外著
飯沼珠城畫

◎第三篇 新刊 本多平八
文學士笹川臨風著
飯沼珠城畫

◎第四篇 近刊 小早川隆景
田岡嶺雲著
小堀鞆音畫

◎第五篇 近刊 立花宗茂
文學士白川鯉洋著

◎第六篇 木村重成
法學士太田蒼淇著

◎第七篇 山鹿素行
國府犀東著

◎第八篇 大石良雄
文學士中内蝶二著

東京築地 株式會社 國光社出版部發行

明治三十五年九月五日發行
毎月二回五日廿日發行
第貳百六拾號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷